研　究　会　報

2024年度

佐賀県中学校教育研究会社会科部会

目　　次

○ はじめに ・・・ 1

○ 令和6年度　研究の成果及び課題 ・・・ 2

○ 令和6年度　各分野の実践と分析 ・・・ 6

○ 第19回　佐賀県中学校社会科教育研究大会
小城・多久大会報告 ・・・ 12

○ 第56回　九州大会社会科教育研究大会　長崎大会報告 ・・・ 19

○ 各支部研究経過及び実績報告 ・・・ 39

※　この度、指導案を載せさせていただいております。ワークシートや写真は都合により載せておりません。

○ 令和6年度　業務報告 ・・・ 79

○ 佐賀県中学校教育研究会社会科部会会則 ・・・ 81

○ 地区別研究分野並びに九中社研発表分担表 ・・・ 82

○ 令和6年度研究組織一覧 ・・・ 84

○ 佐賀県中社研の研究のあゆみ ・・・ 85

○ 九州中学校社会教育研究大会のあゆみ ・・・ 86

○ あとがき ・・・ 89

あいさつ

佐賀県中学校教育研究会社会科部会
会　長　　吉　村　典　浩

佐賀県中学校教育研究会社会科部会の先生方におかれましては，本県の社会科教育発展のために日々，その実践と研究に取り組まれていることに心から御礼申し上げます。昨年は，他の研究大会と兼ねずに単独開催による県大会を５年ぶりに行いました。授業実践の公開や運営にご尽力いただいた小城・多久地区の先生方はじめ，ご参加いただいた県内の先生方に深く感謝申し上げます。

中学校学習指導要領社会科の目標に，「国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を次のとおり育成することを目指す。」とあります。すなわち社会科の目標は，「公民としての資質・能力の基礎を育成する」ことであると捉えられます。これは小・中学校の目標に一貫した文言であり，社会科の究極のねらいを示しています。本研究会では，ここでいう「公民としての資質・能力の基礎を育成する」ことを「正統的周辺参加」の理論を援用して市民社会という共同体へ少しずつ参加していく過程ととらえています。この理論は，学習することの意味を社会的側面からとらえなおしています。すなわち，生徒たちは，社会の諸問題に対して，未熟ではあるけれども一人の市民として市民らしく考え，表現していこうとすることでもあります。社会科におけるこうした学びは，生徒にとって現実社会への周辺参加となります。そして，生徒にとって社会科の学びそのものが，社会参画の始まりであるといえるような授業を目指すべきであると考えています。そのための学びは，教室の中だけでしか問われず，教室の中だけで完結してしまうような閉じられた学習ではなく，「問いの内容」「人との繋がり」「学習成果の発信」は社会と繋がり，社会に開かれた学習活動を創造していくべきであると考えています。AI が発達して学ぶことの意味が問われる現代においても，社会からの負託に応えることができる理論と実践になることを期待しています。

本研究会が，上記のような方針で社会科教育の実践研究を始めて１０年経ちました。１０年の間に研究方針の中の位置づけとして濃淡や強弱はあったものの，その底流には常にこの考え方が生きていました。そして１０年の間に新たな指導方法や新たな視点を研究に加えながら数多くの授業が実践されてきました。１０年間の積み重ねを基礎としてさらに進んだ提案ができることを目指して，本県は中学校社会科教育研究会の全国大会を令和９年度に開催する予定になっています。きたる令和７年度・８年度は，この全国大会に向けて支部の研究と実践を高め準備を進める期間となります。佐賀県中学校教育研究会社会科部会の先生方のご支援ならびにご協力をお願いいたします。

結びとなりますが，本研究会の活動に当たり関係諸機関，関係各位には並々ならぬご支援をいただいおりますことを心より感謝申し上げ，あいさつとさせていただきます。

佐賀県中学校教育研究会　社会科部会

令和６年度（2024 年度）研究について
成果と課題

研究部長　佐賀大学教育学部附属中学校
教諭　山岡　貴秀

１　今年度の研究について（研究概要から抜粋）

(1)　研究主題

社会に開かれた中学校社会科の学び
～「見方・考え方」を働かせた個別最適な学びの実現を通して～

(2)　研究仮説

実際の社会の課題（社会問題）を教室に持ち込み、個別最適化された学びの環境（教師・生徒・ＬＰ・ＡＩ等）において「見方・考え方」を働かせることで、最適解や納得解を見出していくことができる力が育つであろう。

(3)　目標達成のための原理＝授業づくりを貫くもの

本物であること＝オーセンティックであることを原理とする。

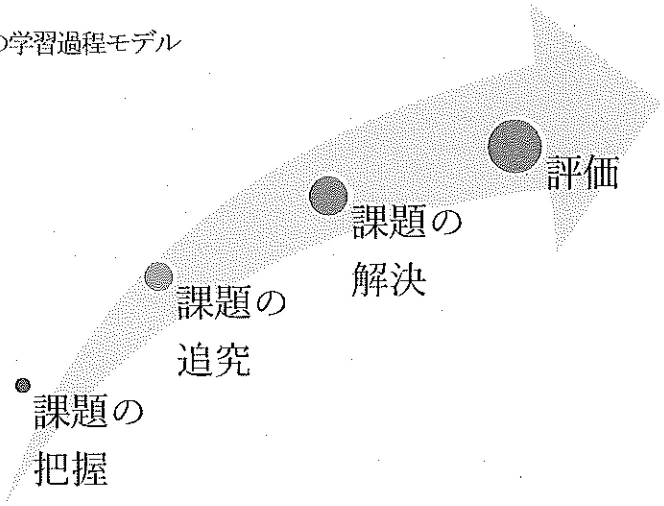
(4)　目標達成のための立場

「総合社会科」という立場を前提とする。

(5)　目標達成のための単元構成モデル

単元構成の３条件
①　「課題解決型」を基本とする。
②　「逆向き展開」を基本とする。
③　「パフォーマンスを行う＝パフォーマンス評価」を基本とする。

※　課題解決型の学習過程モデル



(6)「見方・考え方」について

社会科は社会的な事象をどのように捉え、考えていくかが重要であり、そのための考える視点である見方や考え方は多様なため、ここでは澤井と加藤が整理した代表的な見方・考え方を引用する（表１・表３[1]）。見方・考え方（あるいはその他の社会科固有の見方・考え方）を有機的に結び付けて働かせながら、知識・技能を習得したり、思考・判断・表現をしたり繰り返すことで、深い学びにつながり、また見方・考え方そのものも豊かで確かなものになっていくと考える。

[1] 澤井陽介／加藤寿朗編著 『見方・考え方　社会科編』 2017 年 東洋館　pp.16-17 より筆者作成

表１　社会科の見方・考え方の例

分野名	視点（見方）	視点（見方）の具体例
地理的分野	位置や分布に関わる視点	規則性、傾向性、地域差など
	場所に関わる視点	自然的、社会的など
	人間と自然の相互依存関係に関わる視点	環境依存性、伝統的、改変、保全など
	空間的相互依存作用に関わる視点	関係性、相互性など
	地域に関わる視点	一般的共通性、地方的特殊性など
歴史的分野	年代の基本に関わる視点	時期、年代、時代区分など
	諸事象の推移や変化に関わる視点	変化、発展、時代の転換など
	諸事象の特色に関わる視点	相違、共通性、時代の特色など
	事象相互の関連性に関わる視点	背景、原因、結果、影響など
公民的分野	現代社会を捉える視点	対立と合意、効率と公正、個人の尊重、自由、平等、選択、配分、法的安定性、多様性など
	社会にみられる課題の解決を構想する視点	対立と合意、効率と公正、民主主義、自由・権利と責任・義務、財源の確保と配分、利便性と安全性、国際協調、持続可能性など

表２　社会科の見方・考え方を働かせるための手立ての例[2]

<table>
<tr><th></th><th>地理的分野</th><th>歴史的分野</th><th>公民的分野</th></tr>
<tr><td>単元の導入部</td><td colspan="3">・パフォーマンス課題の提示
・パフォーマンス課題の選択に向けた視点の提示
・パフォーマンス課題の選択を自由に行う場の設定
・単元全体を見通すための単元計画の提示
・単元全体を見通すための単元デザインシートの作成
・身に付けるべき力（資質・能力）を把握するためのルーブリックの提示</td></tr>
<tr><td rowspan="2">展開部</td><td colspan="3">・調べ学習の場の設定
・調べ学習の手段の提供
・調べ学習の視点（見方・考え方）の提示
・調べ学習の成果を共有する場の設定
・意見を構築する場の設定
・構築した意見を吟味する議論の場の設定
・写真や統計などの資料の提示</td></tr>
<tr><td>・地図の活用する場の設定
・他地域との比較視点の提示</td><td>・年表や史料の提示
・過去の事象との比較視点の提示</td><td>・写真や統計などの資料の提示
・法や経済、民主主義など議論する際の視点の提示</td></tr>
<tr><td>展望部</td><td colspan="3">・意見を再構築する場の設定
・再構築した意見を吟味する議論の場の設定
・単元全体を自己で振り返る場の設定
・他の単元との関連性を見出す場の設定</td></tr>
</table>

表３　見方・考え方を働かせる具体的な問いの例

【地理的分野】
・それは、どこに位置するだろうか　・そこは、どのような場所だろう
・そこは、それ以外の場所とどのような関係を持っているだろう
・その地域は、どのような特徴があるだろう

【歴史的分野】
・いつ（どこで、誰によって）おこったか　・なぜおこった（何のために行われた）か
・どのような影響を及ぼしたか　・どのような時代だったか

【公民的分野】
・なぜ市場経済という仕組みがあるのか
・市場経済にはどのような機能があるのか
・民主的な社会生活を営むために、なぜ法に基づく政治が大切なのか

[2] 佐賀大学教育学部附属中学校『研究紀要第６号』2023年　p43

(7)　個別最適な学びについて

・裁量を与える
→どのように学習を展開するのか、誰とどのように交流するのか、もしくは交流しないのかについて考え、決定していく裁量を生徒に与える［個別最適化］。一人で学んでもいいし、隣同士でもいい、班にしてもいい。生徒との打ち合わせでパネルディスカッション、ディベート、タウンミーティング、ワークショップ形式などの形を選択する場合もある。
・異なる学習状況が生まれ、対話につながり、考えを交流する
→生徒が課題解決に必要と感じたときに最善と考えたモノ・人・事柄とつながり対話するという手段を選択させる。
・考えを磨き合い（パブリックディベート）、意味が変わる
→多様な意見に折り合いをつけて、最適解・納得解を出させる。
※教師と生徒の関係としては、「教える一教えられる」という一方向的な関係ではなく、共に「学ぶ」関係として教室に存在することになる。

以下、各支部からの取組報告を副題の２つの視点でそれぞれ類型化し、取り組み状況を俯瞰的に分析し、次年度に向けての展望とする。
（注）なお、具体的な実践については各分野からの報告に譲ることとする。

2　次年度に向けて
(1)　「見方・考え方」について
表４は、各地区の「見方・考え方」を働かせた実践例である。当然ではあるが、すべての実践において分野固有の「見方・考え方」が働かされていた。また、分野固有の学びに留まらず、「総合社会科」の立場から他分野の「見方・考え方」が働いている実践もいくつか見られた。

表４　各地区の「見方・考え方」を働かせた実践例

	「地理的な見方・考え方」	「歴史的な見方・考え方」	「現代社会の見方・考え方」
分野固有	・関東地方における地域の広がり、地域内の結び付きと人々の対応【佐賀市地区】 ・近畿地方の産業の発展における人々の対応【鳥栖・基山地区】 ・九州地方の交通網の整備における空間的広がり、空間的相互依存作用【唐津地区】 ・中部地方の産業における地域の広がりや地域内の結び付き、人々の対応【鹿島・嬉野・藤津地区】	・幕末の政治や社会の変化【神埼地区】 ・近代世界の時期、年代、推移【佐賀市地区】 ・幕末日本の工業化の進展と政治や社会の変化【伊西地区】 ・人類の誕生から古代における現在とのつながり【小城・多久地区】	・経済における対立と合意、効率と公正、分業と交換、希少性、責任【佐賀市地区】 ・経済における対立と合意、効率と公正、分業と交換、希少性【三養基地区】 ・個人や企業の経済活動における役割と責任【武雄地区】
分野横断	・個人や企業の経済活動における資源の配分【武雄地区】	・近畿地方の産業の発展における歴史的景観の保全とのバランス【鳥栖・基山地区】	・九州地方の交通網の整備における将来性、費用対効果、【唐津地区】

(2)　個別最適な学びについて
表５は、各地区の個別最適な学びの実践例である。すべての実践において、クラス単位で意見を共通にするのではなく、個人あるいは班単位で意見を自由に構築できるような手立てがなされていた。その際、意見を考える視点が前述した「見方・考え方」を具現化したものとなっている。また、意見を現実の文脈に即した形にするために、多くの地区でLPを活用した実践がなされていた。

表５　各地区の個別最適な学びの実践例

地理的分野	歴史的分野	公民的分野
・東京大都市圏の過密問題の解決策について、『学び合い』で意見を練り上げる【佐賀市地区】 ・班ごとに企画書を決め、LP（保護者、他教科の先生）との意見交換を経て、クラス内で投票【鳥栖・基山地区】 ・九州新幹線の延線について、LP（影響を受ける地域に住む他教科の先生）との意見交換を経て、グループで意見を練り上げる【唐津地区】 ・中部地方の産業の魅力を、３つの視点ごとに各自で設定し、Canva で紹介する【鹿島・嬉野・藤津地区】	・江戸幕府滅亡に大きな影響を与えた人物について、LP（参観者）との意見交換を経て、自分の意見を練り上げる【神埼地区】 ・幕末の日本の近代化に必要なことについて、『学び合い』で意見を練り上げる【佐賀市地区】 ・江戸幕府滅亡の理由を、ジグソー法で協働してまとめる【伊西地区】 ・便利で豊かな生活を送る最も大きな要因（人類の発明）について、LP（複数の留学生）との意見交換を経て、意見を構築する【小城・多久地区】	・10 年後の一人暮らし家計のシミュレートを『学び合い』で行う【佐賀市地区】 ・「世界幸福度ランキング」の向上について、各自視点を設定させ、『学び合い』で意見を練り上げる【三養基地区】 ・ラーメン屋開店のシミュレーションを班ごとに行い、タブレットを活用して共有する【武雄地区】

(3)　各地区の実践を踏まえた次年度の研究の方向性

令和９年度に控えている全中社研佐賀大会に向けて、本県の社会科教育における「強み」は、「正統的周辺参加論」に基づいた、社会に開かれた学びである。九中社研での過去数年間の実践及び全国各地の附属中学校の実践例を数多く拝見させていただき、現実社会とのつながりを意識した実践例は、分野の偏りはあれど多く見られるようになっていたが、学習を参加と捉え、現実社会の文脈に埋め込まれている社会科教育を一貫して実践していることはなかった。

もちろん、批判的に考えると、教科書の内容との関連性やカリキュラム過多など、日々の実践の毎時間で意識して単元開発していくことは現実的には難しい。状況論に依拠した学びは、状況に応じてフレキシブルに組み替えることで社会の状況との整合性を図ることができる反面、教科書というツールの中に埋め込まれている状況とは乖離してしまう。

しかし、VUCA の社会を生き抜く生徒を育成するためには、現実社会とのつながりを絶えず意識していく必要がある。教科書は日々更新されていくわけではないため、教科書に記載されている「事実」が、学習するタイミングでは覆ることもあり得る。

現実社会の状況を踏まえて、解決すべき課題について考える。その際、教科書や副教材、ICT ツールなどを活用し、LP とよりよい社会の在り方について議論することで、生徒の公民的資質の基礎が養われる。そのような先進的な実践を１年に１単元でも開発し、共有することで、新たな授業づくりの着想を得て、また単元開発をしていく。その契機となる佐賀大会になることを切に願っている。

今年度副題としていた「見方・考え方」は、現行の学習指導要領で整理された、各教科等固有の資質・能力を身に付けるためのアプローチ方法である。社会科教師が無意識に実践していた授業の視点を可視化することで、より多面的・多角的に考察することにつながるが、今年度の各地区の実践例を分析していると、「見方・考え方」を明確に意識しているかどうか、学習指導案等から読み取ることが難しい実践も散見された。「見方・考え方」の働かせ方を意識することで、身に付けさせたい資質・能力も具現化され、また確実に生徒に身に付けることにつながる。また、分野固有の「見方・考え方」を超え、「総合社会科」としての「見方・考え方」を働かせることで、社会に開かれた学びが実現すると考える。

個別最適な学びに関しては、令和３年度から『学び合い』を取り入れてきた。しかし、『学び合い』は教科書内の状況に閉じた学びに終始するため、本県の「強み」とは本質的には逆行してしまう。そこで、学習方法は固定化するのではなく、パフォーマンス課題の解決に向けて最適なアプローチ方法を見出すこととする。協働する対象者を絞らず、自由に交流することができる『学び合い』の要素も取り入れながら、学びの裁量権を高めた、よりよい学習方法の在り方について、各実践に応じて提案されることを期待したい。

令和6年度地理的分野　各支部実践の分析

地理的分野部長　　川原　峻

1　今年度の研究主題について

県中社研の研究方針もとに，地理的分野においては「社会に開かれた社会科地理学習の在り方」と研究主題を設定し，次のような視点から各支部に実践をお願いした。社会科授業において，①学ぶ必然性を感じるパフォーマンス課題を設定すること，②社会問題についてその背景や要因を理解し，望ましい社会の在り方について他者との交流を通して検討すること，③望ましい社会の在り方について生徒が考えたものを評価する方法を検討すること，④学習者に社会とのつながりを意識させ，議論をより深まりのあるものにするために LP を活用することの 4 点である。以上の視点をもとに今年度も各支部で創意あふれる実践が行われた。本稿では各分野の分析の様式に合わせ，「社会的な見方・考え方」「個別最適化」の 2 点から分析を行いたい。

2　今年度の実践と分析

(1)　地理的な見方・考え方について

社会科における見方・考え方の働かせかたについて，多様な場面で活用の方法が想定される[i]。そのなかで社会の在り方について考えさせる実践を行う際には，次のような場面が特に有効に活用されると考えられる。

(ⅰ)パフォーマンス課題に取り組む過程で必要な情報を得る場面

パフォーマンス課題に取り組むためには，その過程で必要な情報を得る必要がある。地理的な事象のいては，「位置や分布」，「人間と自然の相互依存関係」など様々な見方・考え方を働かせることで，その特徴をとらえることができる。

今年度の小城・多久大会において，芦刈観瀾校の鶴教諭が行った実践では，「アメリカ社会において，SDG s を達成するために，取り組むべき課題は何か」というパフォーマンス課題を設定し，北アメリカ州の学習を行った。北アメリカ州の自然環境や，文化，産業などの視点をもとに，アメリカ合衆国が抱える課題についての検討が行われた。鳥栖・基山支部の実践では，近畿地方の学習において，「自然環境や歴史的景観の保全を行いながら，近畿地方の産業を発展させる事業を提案しよう」というパフォーマンス課題を設定し，近畿地方で学習した内容をもとに，様々な視点から近畿地方の地域活性化プランについて検討させていた。パフォーマンス課題に取り組む過程で，地理的な見方・考え方を働かせて学習内容を捉えていったことが予想される。

しかし，現在の社会問題を題材として扱う場合，必ずしも地理的な視点だけで理解したり，解決できたりするものではない。他の分野の視点も大いに活用しながら，パフォーマンス課題に取り組むための必要な情報を読み取らせる必要があるだろう。

(ⅱ)社会問題の理解や，課題解決に向けて判断を行う場面

社会的な見方・考え方は，社会問題の理解や，課題解決に向けて判断を行う際も有効に活用することができると考えられる。公民的分野では「効率・公正」など，社会に見られる課題の解決を構想する視点を扱う。例えば，地域の公共交通の問題を考えた場合，「公正」の立場に立てば，赤字路線バスの運行に多額の財政補助を出してでも継続させる選択を行うだろうし，「効率」の立場に立てば，限定された箇所の公共交通機関を充実させるような街づくりを選択することが想定される。またその中間的な視点に

立てば，デマンド交通など二つの視点を取り入れた折衷案のような政策を選択することもあるだろう。このような社会に見られる課題の解決を構想する視点は，多様な意見や政策を整理したり，自己の意見を構築したりする際に有効に活用することができる。

今年度の実践では，上記のような見方・考え方をもとに課題を検討する実践は行われなかったが，立場の違いを明確にして課題の検討を行った実践があった。唐津・東松浦支部の実践では，中国・四国地方の学習において，「新鳥栖駅～武雄温泉駅に新幹線を通すべきか」というパフォーマンス課題を設定し，単元の学習内容に加え，課題を捉えるための資料を複数用意し，生徒に議論をさせていた。インバウンドや子育て世代を視点とした考えや，費用面の負担や在来線の有効活用など課題の解決を目指して多様な意見が出されていた。また LP として，新幹線開通の影響を大きく受ける地域に住む職員に参加してもらい，生徒は複数の立場に立ちながら課題について検討することができていた。

社会問題には何かしらの対立状態が起こっている。お互いが正しさをもって意見を主張するため，その対立の背景にある考え方を整理することは，社会問題を理解したり，よりよく判断したりするためには重要な過程になると考えられる。

(2)　学びの個別最適化について

学びの個別最適化について，県中社研では，「ＡＩ(人工知能)やデータ，級友も含めたＬＰなどから最善と考える相手と対話する手段を選択し，協働できるように子どもたちに『学び』の裁量が与えられること」と定義している[ii]。

佐賀支部では，学びの個別最適化に焦点を当て，『学び合い』を軸として研究がすすめられ，地理・歴史・公民の全分野において授業研究会が実施された。実際に授業を参観することで，『学び合い』の授業に挑戦する実践者を増やしていけるよう支部内の連携を強化している。生徒が必要な手段を選択し，他者との交流を通して課題解決に臨める環境を作り出すことを意識しながら今後も実践を行いたい。

3　次年度に向けて

県中社研地理的分野の今後の研究の見通しとして，令和９年度全中社研佐賀大会の開催に向け，各支部と県中社研の研究方針のイメージを共有しながら，社会科地理学習の実践を積み重ねていきたい。

今回の実践の分析では，主に「社会的な見方・考え方」,「個別最適化」の観点から振り返りを行った。いずれにしても今後の鍵になることは，学習者にとって考える価値があり，かつ現実社会において解決が望まれている課題をいかに提示できるかということである。扱う課題によっては，単元での学習内容と必ずしも関連しない部分が出てくるかもしれないが，子どもたちが周りの大人を巻き込んで，真剣に社会の在り方に考えることができる機会を数多く設けることは，民主主義社会を形成する市民としての資質を育てることに大きく寄与すると考えられる。

また単元の学習内容とパフォーマンス課題の関連性や評価の在り方についても，今後実践を積み重ねながらさらに検討を行っていきたい。

---

[i] 山岡貴秀「社会に開かれた中学校社会科の学び～「見方・考え方」を働かせた個別最適な学びの実現を通して～」

[ii] 山岡 貴秀「『社会に開かれた中学校社会科の学びをめざして』～学びのＳＴＥＡＭ化と学びの個別最適化を柱として～」令和５年度佐賀県中学校社会科研究会理事会資料

令和６年度歴史的分野　各支部実践の分析

歴史的分野部長　深井純

１　今年度の研究主題について

佐賀県中社研歴史的分野では，昨年に引き続き「社会に開かれた中学校社会科の学び」―「見方・考え方」を働かせた個別最適な学びの実現を通して―というテーマのもとで研究を行った。①パフォーマンス課題の設定 ②学びの個別最適化③ラーニングパートナー（LP）の活用を三本の柱として設定した。歴史と現実社会を結びつけていくことは容易なことではないが，そうした分野的な特性も踏まえた上で，当時の政府や人々の様々な思惑や意識，時代背景などに着目させ多面的・多角的に歴史を考察できる授業づくりを目指した。また，過去を学ぶことで現代や未来にいかし，主体的に社会参画しようとする意欲を持った生徒が育成できる授業づくりを心がけていく必要がある。

２　今年度の実践と分析

（１）パフォーマンス課題の設定

今年度各支部において，提案された授業で設定されたパフォーマンス課題は以下のようなものであった。

・なぜ私たちは現代のような便利で豊かな生活を送っているのだろうか。人類の出現から古代文明までを学び，最も大きな要因（人類の発明）は何だったのか，考えよう！
・欧米で起こった近代革命のうち，人々を幸せにした革命は何か。
・欧米諸国に対抗するために日本の近代化に必要なことは何だろう。
・四人の人物の中で江戸幕府滅亡に大きな影響を与えた人物を探り，新聞記事を書こう。
・約 260 年も続いた江戸幕府は，なぜ開国からわずか数十年で滅亡したのか説明しよう

○成果

・各支部で行われた授業実践は，生徒の興味関心を刺激するような単元を貫く問いが設定されているとともに，時代背景や言葉の概念など様々な視点から歴史を捉えさせようとするものが多く見られた。また，各支部からの報告では，新しく授業を作るのではなく，他の教員の実践を取り入れながら教材を深めていこうとする意識が向上しているという声が上がった。学校や支部単位での授業づくりが行われているということは，研究を一過性のものにすることなく積み重ねを行っていく上で非常に大切なことであり，大きな成果といえることができるだろう。

○課題

・地区で研修会や授業検討会を設けることが困難であることや，町や市をまたぐとサーバーの関係上情報をうまく共有することができないなどの声も上がり，一丸となって研究を行っていく上での課題も散見された。

（２） 学びの個別最適化

〇成果

・パフォーマンス課題を意識した授業を心がけるようになった結果，「学び合い」を行ったり，タブレットの利活用をする機会が増えたりしていることがあげられる。また，県大会で行われた，授業を受けている生徒たちへの質疑応答の際には東原庠舎中央校の生徒から，「学び合い活動を通じて，授業が楽しくなり，頭に入ってきて成績もあがった。」という声が聞かれるなど生徒の意欲や力の向上に「学び合い」がつながっていることが窺えたことも喜ばしい。

〇課題

・県大会の指導助言者より，ラーニングパートナーやタブレットなどのリソースを生徒たちが自然に活用できるような工夫を授業者は考えていく必要があるという指摘があったように，教員側が，生徒が個別最適解にたどりつけるような工夫を行うことができるように，実践を重ねていかなければならない。

（３） ラーニングパートナーの活用

〇成果

・保護者や他教科の教員，他校の社会科教員など身近なラーニングパートナーを活用した実践が数多く試みられたことに加え，九州大会および県大会の実践報告で行われた，外国人留学生との交流のような外部機関を活用した取り組みが展開された点が挙げられる。身近な人々や外部機関それぞれの長所を生かした授業づくりを行うことで，生徒の視野が広げることにつながると考える。

〇課題

・ラーニングパートナーがゲストティーチャーのようになってしまい，双方向の交流にするような工夫が必要だと感じたという声が上がるなど，深い学びにつなげていく上での課題も指摘された。

３ 次年度に向けて

１２月に行われた第２回研究員研修会では，各支部から，パフォーマンス課題を意識した授業を展開する上での様々な努力や苦労を聞かせていただいた。その中であがった，地区をまたいだ実践の共有を行いたいという課題は，令和九年度に行われる全国大会開催に向けて，佐賀県として一丸となって取り組む上で改善することが不可欠な課題であると感じる。過去の研究にアクセスできる手段の確保などの解決に向けて努力していきたい。

また県大会において指導助言を行っていただいた，佐賀大学大学院学校教育学研究科の野田英樹准教授からは，「正統的周辺参加」といった言葉をどの程度の教員が理解しているのか，していないのであれば学ぶ場を設けるべきである。という言葉を頂いた。中社研本部と他の教員の認識や理解に乖離が生じないよう取り組んでいく必要がある。

佐賀県中社研　　　　**令和６年度公民的分野　支部実践の分析**

公民的分野部長　鶴 勝己

１　今年度の研究主題について

「社会に開かれた社会科公民的分野の学び」

公民的分野の学びにおいては，自ずと市民性に注目した実践となるため，いわゆる「総合社会科」としての学びとして，歴史的分野・地理的分野の学びの固有性を生かした（歴史・地理との関連のある）授業実践の開発が十分ではなかったと考えられる。

そこで今回は，歴史的分野・地理的分野の学びとの関連性に注目し，「総合社会科」の強みを生かした授業開発を行うことを目標に，社会科教育がこれまで目標としてきた，「公民としての資質・能力の基礎を育成すること」が，VUCA の時代を生き抜く力となると考えられることから，全体研究の主題を踏襲し，研究主題とした。

２　今年度の実践と分析

（１）現代社会の見方・考え方について

現代社会の見方・考え方の 例[1]

分野名	視点（見方）	視点（見方）の具体例
公民的分野	現代社会を捉える視点	対立と合意，効率と公正，個人の尊重，自由，平等，選択，配分，法的安定性，多様性など
	社会にみられる課題の解決を構想する視点	対立と合意，効率と公正，民主主義，自由・権利と責任・義務，財源の確保と配分，利便性と安全性，国際協調，持続可能性など

三養基支部では，世界幸福度ランキングの日本の順位を向上させるために，経済面という視点（見方・考え方）から考察させている。

小城・多久支部では，よりよい小城市にするために考案した政策を，批判的に吟味するために，効率と公正，対立と合意，持続可能性，地域固有性といった視点から考察させている。

武雄支部では，個人や企業の経済活動における役割と責任について，経営シミュレーションゲームを通して，意思決定とその結果を体験させて，効率と公正という視点から考察させている。

鹿島・嬉野・藤津支部では，現実社会で起こっている実際の問題をパフォーマンス課題として取り入れることで，生徒に切実感をもたせ，課題解決に向き合うことができるようにするために，対立と合意，民主主義，持続可能性などの視点から考察させている。

ア．パフォーマンス課題

・『日本の「世界幸福度ランキング」を向上させるために，経済面からどのような対策をするべきか』に対し，自分の考えをもち，相手に説明し，意見文を作成することができる。
・市場経済において，社会事象の変化による影響や人的・物的資源の配分について考える。
・憲法９条は改正すべきか否か？
・防犯カメラを前にプライバシーの権利をどこまで主張できるだろう？
・自分が有権者なら，どの政党に一票を投じるか？
・太良町の財政について見直してほしいところを意見文にしよう！

・未成年者のＳＮＳの利用制限	・ドナーカードの所持の義務化
・投票率を高めるためのアイディア	・死刑制度の是非

イ．ＬＰの活用

小城・多久支部では小城市の政治の影響を直に受ける保護者をＬＰとし，保護者と意見を交えることで，生徒に当事者性をもたせることができるとした。

どの支部においても，保護者や教員をＬＰとする場合が多かった。また，異学年をＬＰとする場合もあった。一方で，専門家などに対するハードルの高さを上げている場合やどの単元で活用していくのがよいのか検討しているという支部もあった。

（２）個別最適化について

三養基支部では，毎時間，『学び合い』の時間を取り入れ，「誰一人見捨てない」を合言葉に学習を促している。

武雄支部では，タブレットの活用が進むことで，個人個人の深い学びへとつながっていくように感じている。

鹿島・嬉野・藤津支部では，授業中に発言の少ない生徒の中にも，自分の考えをもち，根拠に基づいて意見文を書くことができようになってきている。

３　次年度に向けて

昨年度よりコロナによる制限が緩和され，以前と同じような研修会が各支部で行われるようになってきた。また，活動を精選し，より意味のある活動へとなってきている。さまざまな研修会を実施していただいた支部・学校には心から感謝を申し上げたい。

今年度の県大会では，小城・多久支部で公開授業を，伊万里・西松浦支部に研究発表をしていただき，本当にありがたかった。感謝申し上げる。

また，昨年の１１月４日の西日本新聞にも紹介されたように，佐賀市立昭栄中学校では，昨年１０月下旬に令和６年１０月３０日に行われた衆院選の佐賀１区の候補者や比例九州の各政党の本物の公約を見比べて生徒一人一人が投票先を決める授業が行われている。私自身，授業参観することはできなかったが，大変，意義深い授業をしていただいたと感じている。

そして，いよいよ令和９年度は全国大会となっており，全県下の先生方の協力が必要不可欠になってくる。公民的分野に関しては，授業開始時期がどうしても６～７月からなるため，令和９年度はまとめの時期と考えていかなければならない。よって，来年度より授業実践の積み重ねを佐賀県全体で行ってきたい。そのためには，各支部において，パフォーマンス課題をまとめたものや生徒の認知過程やパフォーマンスを評価する判断規準を共有し，課題の把握と課題の修正を図る過程が分かるものの作成などもお願いしたい。

働き方改革や行事精選など，様々な状況がある中でも「今，できることをまずはしっかりと取り組む」を念頭に研究を進め，実践を重ねることにより，社会に開かれた公民学習の在り方を模索し，生徒の育成につなげていきたい。

[1] 澤井陽介／加藤寿朗編著 『見方・考え方　社会科編』 2017年 東洋館　pp. 16-17 より作成

第19回
佐賀県中学校社会科教育研究大会

小城・多久大会報告

第19回佐賀県中学校社会科教育研究大会(小城・多久大会)　地理的分野報告

文責：地理的分野部長　川原　峻

授業者：小城市立小中一貫校芦刈観瀾校　教諭　鶴　康徳
実践発表者：佐賀市立金泉中学校　教諭　三根　頌平
指導助言者：唐津市立小川中学校　学校長　伊東　泰弘

1　授業について

(1)　授業の概要

実践者の鶴教諭は、世界の諸地域「北アメリカ州」の単元で、「アメリカ社会において、SDG s を達成するために、取り組むべき課題は何か。」というパフォーマンス課題を設定し実践を行った。単元では、はじめにアメリカ合衆国が世界や日本に与える影響の大きさを意識させ、次にアメリカ州の自然環境の特色、多様な民族構成、農業、工業、生産と消費の順で学習を行い、アメリカの産業や生活の特色と課題を整理させた。最後に、上記のパフォーマンス課題に対して「多様な民族構成」「農業と農産物」「工業」「生産と消費」の分野にグループで分かれ、それぞれ担当した分野でSDG s の17の目標のうちどれが課題となるか検討し、プレゼンテーションを行い、クラス全体で発表された課題について意見交流を図る授業構成となっていた。

(2)　授業の実際

公開授業では、パフォーマンス課題に対する各グループからのプレゼンテーションから意見交流を行う場面が公開された。各グループが4つの分野から課題を考え、根拠となる資料を提示しながら説明を行った。その後の質疑応答や意見交流でも、資料に関する質問や、アメリカ合衆国の大量生産、大量消費に関する産業構造に疑問を呈する意見がだされた。授業のまとめで、実践者は生徒の意見を振り返りながら、SDG s を達成するためには多方面から検討しなければならないことを確認し、オープンエンドで授業が終えられた。

(3)　質疑応答

・資料の出典についてどこから引用したものか。
→資料は資料集から引用を行った。生徒が使うものについても、検索ワードを提案したりして作成させたが、引用した場合には出典を明記すべきであった。
・授業の終末に子どもたちにテーマを選ばせ再度検討させるとしたが、次時の展開はどうなるのか。
→次時はテーマを絞り対立点を明らかにし、解決策について比較検討できるように授業を展開したい。
・LP を取り入れてみてどのような効果があったか。
→社会科以外の先生に参加してもらい、新たな視点から生徒にアドバイスをもらえ、ともに課題について考えていく姿勢がみられた。
・より議論を活発にするためには、それぞれの分野で順位付けをさせることによって、対話が生まれ意見交流が促進されたのではないか。

(4)　指導助言者より

公開授業では、休み時間のうちから生徒が発表の練習を自主的に行うなど、授業に対して意欲的に取り組む姿勢がみられた。今回、SDG s の視点から実践が行われたが、世界の諸地域の学習を通して考えることは、「持続可能な社会を目指すこと」であり、どのような取り組みを行うと、よりよい社会になるのか、あるいはどのような取り組みを優先すべきであるのかを単元を通して検討していくことが大切になる。

LP について、LP と T2 の違いを明らかにすべきだと感じた。T2 はあくまでも補助的な扱いであり、個別の支援を充実させるために行われるものである。LP はともに学ぶ存在であり、招く理由を明確にし、授業の前に LP とその意図を共有する必要がある。LP と学ぶなかで重要性や緊急性、実現可能性について意見をもらうことで生徒の思考がより深まることが予想される。

2 実践発表について

(1) 実践の概要

実践発表では三根教諭から、「社会に開かれた中学校社会科の学びを目指して～対話と協働から最適解・納得解を見出していく学びを通して～」というテーマで実践発表がなされた。佐賀市の社会科部会では、単元の学習内容と関わりのある社会問題を題材に取り入れたパフォーマンス課題を設定し、社会問題の解決に向けて情報の把握、考察、解決策の提案などを意識した学習活動に取り組んでいる。実践者は、単元の学習内容と関わりのある社会問題を題材として扱い、単元を貫く問いとして設定することで、学習への取り組みに対して生徒に切実感をもたせ、さらに『学び合い』による個別最適化された学習環境をつくり、「見方・考え方」を働かせる工夫を行うことで、最適解や納得解を生徒一人一人が見出すことができるように実践を行っている。実践発表では、1、2年次の地理的分野における単元ごとのパフォーマンス課題が紹介され、それぞれの地域の学習において生徒が単元を見通して課題に取り組むことができるよう工夫されていることが分かった。LPの活用については、課題に対して生徒が自分の考えをまとめる活動において、ワークシートにLPからの意見やアドバイスをもらう欄を設け、記入してもらうように工夫がなされていた。評価については、ルーブリックを活用した評価が紹介され、授業者と生徒と相互に納得をしながら評価ができるように工夫がなされていた。研究を進めていくうえで難しさを感じる点として、単元を貫く問いと単元内の授業との結びつきが弱い学習内容があり、単元を貫く問いの設定が難しい単元があることなどが挙げられた。

(2) 質疑応答

・地理、歴史、公民でも同じような形式で授業をしているのか。

→同じ形式で授業を行っている。

・ワークシートの評価方式について。

3 所感

鶴教諭の実践では、単元で学習した視点をもとに、アメリカ社会が抱える課題について検討させる授業となっていた。学習者は課題を解決するためには、様々な観点から検討を行う必要性を感じ、今後、他の課題を検討する際の有益な視点を得ることができたと考えられる。一方今回の実践の課題となった点が、生徒間の議論についてである。今回はプレゼンテーションを通して個々の課題について「知る」ことがメインとなっていたのではないかと感じた。ただ、本来社会問題には様々な立場があり、その背景には異なる価値観の対立がある。そこに焦点を当て、生徒が議論を行うことで、より深まりのある授業になると感じた。

三根教諭の実践発表では、佐賀市の共通した取り組みや実践者の実践上の工夫について紹介がなされた。パフォーマンス課題は佐賀市の部会で共有しており、誰でも実践が可能となっていた。評価については、生徒が授業ごとに現在の学びの立ち位置を把握できる工夫がなされており、来年度の九州大会における発表が期待される。今後、実践発表をより意義深いものにするため、パフォーマンス課題の設定について、現実の社会問題に目を向けさせ、課題の解決に向けて切実感をもたせる問いを設定できるかがカギとなるだろう。

今回の県大会において、授業者、実践者共に実践上の課題として挙げられたことが、パフォーマンス課題の設定についてである。学習内容と関連性のある現実の社会問題を取り上げると、その問題を解決するために、これまでの学習内容との関連性が説明できないものもあり、課題の設定が難しく感じられる。また社会的な見方・考え方についても、今後の全国大会を見据え、社会的な見方・考え方を働かせることが研究主題にどのように関わるのか、またその示し方も含めて検討すべき課題であると感じた。

最後に、今研究大会のために、多忙のなか準備をしていただいた鶴先生、三根先生、また研究大会に参加していただいた先生方、会場として利用させていただいた小城市立小中一貫校芦刈観瀾校の先生方にも感謝の意を示したい。

令和６年度　県大会（歴史的分野）報告資料

文責：深井（分野部長）

授　業　者：多久市立東原庠舎中央校　教諭　久冨　和範

実践発表者：小城市立小城中学校　教諭　江上　哲平

指導助言者：佐賀大学大学院学校教育学研究科　准教授　野田　英樹

１　授業について

(1)　授業の概要

今回の公開授業では、多久市立東原庠舎中央校の久冨和範教諭に、「欧米で起こった近大革命のうち、人々を幸せにした革命は何か。」というテーマで授業を行っていただいた。近代革命に関する学習を進める中で、「幸せ」に着目をし、近代革命を評価させることが単元の軸となっている。幸せとは何かの定義づけを行うところから考え始め、近代革命を自分なりの幸せの定義から評価することで、現代社会の在り方についても考えることができるような授業構想となっている。またその際に以下のような工夫がなされている。

（ア）　単元内自由進度学習

生徒たちにはあらかじめ本単元で学習するワークシートがすべて渡されており、全６時間の学習時間をどのように配分し学習していくかが生徒にゆだねられている。

（イ）　価値尺度である「幸せ」の数値化

幸せという定義付けが難しいテーマに対して、それぞれの歴史的事象が、「革命に関係した人を幸せにしたか」「現在の人々の幸せにつながっているか」などの観点から評価させることによって、生徒が判断しやすくなるようにされている。

（ウ）　ラーニングパートナーの活用

単元の途中で「幸せな社会とはどのような社会か」という問いを、ラーニングパートナーに質問させ、異なる価値観に触れることができるようにされている。

(2)　授業の実際

上記のような工夫がなされた授業が、本単元だけでなく年間を通して行われているため、生徒たちは授業が始まると自然にグループになり活動を始めたり、参観者に質問しにいったりと自分のペースで学習を進めていた。またその際に、自分の意見をしっかりと持ったうえで、質問、意見交換を行うことができている生徒が多かったことが印象的であった。

(3)　主な質疑応答

Q　個人で考える時間を作らずに初めからグループでの学習をさせている意図は何か

A　グループを組むのはあくまで調整できるようにするためで、個人で行いたい人は個人で学ぶことも認めており、学びの個別最適化を行うことができるようにしている。

Q　生徒が学びを調整する時間のルール作りをどうしているか。

A　特にルール作りはしていない。自分の学力を向上させるため、クラス全体の学力を向上させるために自分がベストなパフォーマンスをしてとは伝えている。

また今回の授業研究会では、実際に授業を受けた生徒たちに質問をする時間が設けられた。

Q　1時間これをするよというやり方と、自由進度学習のどちらが良いと考えるか。
A　今の方が良い。色々な方法で取り組むことができるから。
Q　自由進度学習になって社会科の点数が上がったという実感はあるか。
A　『学び合い』活動を通じて、授業が楽しくなり、頭に入ってきて点数もあがった。

(4)　指導助言者より

『学び合い』の授業においては授業者と学習者が折り合いをつけながら行うことが大切であり、ラーニングパートナーやタブレットなどのリソースを生徒たちが自然に活用できるような工夫を授業者は考えていく必要がある。

2　実践発表について

(1)　実践の概要

実践発表では、小城市立小城中学校の江上哲平教諭より、「自他を認め合い、共に学び続ける生徒の育成～西九州大学留学生をLPとした歴史的分野の授業実践を通して～」という題で発表がなされた。江上教諭の実践は、ラーニングパートナーの活用の工夫に力を入れており、パフォーマンス課題を留学生に説明する活動を通じて生徒の意欲や説明力の向上を目指している。「なぜ私たちは現代のような便利で豊かな生活を送っているのだろうか」をテーマに、人類の出現から古代文明までを学習し最も現代の生活に貢献している要因について考えさせている。その際に留学生と交流し、自らの意見を説明する活動が今回の実践の肝となっている。授業の実践を通して、生徒たちが農耕や文字などそれぞれが大切であると判断した発明に関する説明を行い、それに対して留学生たちから、母国の農業や文字について聞き、知識が深まりを見せたり、法律や政治が大切であるという留学生から自分たちになかった考えを聞いて視野が広がったりした事例が紹介された。

(2)　質疑応答

Q留学生との交流に本単元を選んだ理由は何か
A全世界で共通している世界史を取り上げることにより、互いに理解しやすい内容を選択した。
Qラーニングパートナーとして外国人を選択した理由は
A交流そのものが刺激になっており、わかりやすくかみ砕いて説明しようと考えることが説明能力の向上につながると考えた。

(3)指導助言者より

異なる共同体との交流がテーマであったが、ラーニングパートナーのとらえ方としては疑問が残る。ゲストティーチャーのようにどちらかが説明するだけではなく双方向の学びが大切になる中で、留学生に説明する活動が中心となってしまっているので対話しながら解を導き出すような工夫がほしかった。

3、所感

小城多久地区の先生方にはパフォーマンス課題の共有など学校間をまたいで協力していただき、貴重な提案をしていただいた。令和九年度の全国大会に向け、課題として挙げられた過去の研究にアクセスできる手段の確保などの解決に向けて努力していきたい。

令和６年度　県大会（公民的分野）報告資料

文責：梅村（分野副部長）

授　業　者：小城市立三日月中学校　教諭　丸田　悠翔
実践発表者：伊万里市立啓成中学校　教諭　田雑　拓（代理：梅村）
指導助言者：佐賀市教育委員会教育総務課　指導主事　手島　将之

1　授業について

(1)　授業の概要

「社会に開かれた学びを行う社会科授業づくり」の授業実践として、公民的分野の中項目、民主政治と政治参加を行った。その中で、①パフォーマンス課題の共有化やアレンジ、②LP の活用の工夫を念頭に授業計画が行われた。①では、小城市の総合計画に掲げる１０の施策を取り扱い、その中で最も力を入れるべき政策は何か？という課題で議論・追究をそし、その中で②を身近な大人であり、小城市の政治の影響を直に受ける保護者をLPとして設定し、学びの深化を図った。最後は、LP の意見、班発表と質疑、他者の意見を聞き、自分なりに納得解・最適解を形成していく授業である。

(2)　授業の実際

○身近な実際の社会の課題や内容を取り扱う中で、実際に影響を受ける人・関わる人をLPとして設定することで、生徒自身も自分ごととして捉え（当事者性）、課題を追究していた。

○緊急性や重要性、効率と公正の視点から、他の班の施策発表を聞き、質疑応答を行う内容であった。質疑応答においては、班ごとに想定問答とそれに関わる資料や情報を事前に準備し、回答を行った。

(3)　質疑応答

Q 生徒があらかじめ、回答準備。質疑の中で、さらに切り返しの意見について、先生としては、どう思うか

A 質問に対して、あらかじめ質問をつくっていた。質問に対する回答は、他の子どもたちは知らないので、切り返しの意見があってもよかったと思う。

Q 小城市にピックアップ。その資料について、情報収取で苦労したところや、どんな視点で探していったのか。

A 資料の原本は HP に掲載されている。小城市が小城高校生向けに授業を行っている。その時にわかりやすく作り直されたものがあり、それを活用。その中から、生徒にとって身近なものにピックアップ。

(4)　指導助言者より

・社会に開かれたについて、もう一度再考する必要がある。というのも、子どもたちは、自分が好きな情報だけに偏った知識だけがある。また、AI の発達による、文書作成やプレゼン資料作成もできるようになった。だからこそ、最適解、納得解は人間にしかできない（中学校社会科の研究）。

・研究主題の妥当性について、世界、国にコンセプト、学習指導要領から見た時、妥当である。(当日別紙配布)

・個別最適な学びのデメリットを補うために(当日別紙配布)。深い学びにならない?個のみで学び続ける。

課題として「多様な学びに触れにくい」「対話や問い返しの機会が少ない」、解決策として、「パフォーマンス課題の設定」「他者参照(アウトプット)の手段を増やす」「社会に開く学習評価(オーセンティックな評価)」

・令和9年度の全国大会発表について、佐賀県は多くの授業実践例がある。そこで、県内のパフォーマンス課題を集約し、単元ごとに複数の課題を生徒に提示し、生徒自身で選択し、追究する授業を行うとよいかもしれない。

・個別最適な学びの実現においては、重要なことは選択・決定になる。(ただし自己選択・自己決定≠自己調整)

2 実践発表について(令和5年度九州大会発表のため、質疑応答、指導助言は割愛)

(1) 実践の概要

社会に開かれた中学校社会科の学びを目指して~LP との関わりを通して~

切実感のある社会問題を学習課題とするために、①パフォーマンス課題の設定、②LP の設定が行われた。①については、生徒が生活する地区を題材にすることで、自分たちで解決しなければならないという使命から意欲へとつながると考えた。②については、当事者を設定し、解決に向けた思いや、当事者でしか知り得る・経験することができない現状や課題を生徒と共有することで解決の必要性や切実感をもちながら学習に取り組めると考えた。

そこで、伊万里・西松浦地区の課題より、内容をピックアップし、パフォーマンス課題の設定を行った。授業実践例では、外国人居住者が生活しやすいまちづくりについて考えよう」ということで、納得解・最適解を模索していった。授業の中で、中国籍の方をＬＰとして設定し、生徒の意見の評価やアドバイスだけでなく、実際に自分が生活して困ったことや、他の外国籍の方に日本での生活の仕方を教える時のことなどを紹介してもらった。

3 所感

日頃の授業の取組が見える授業だった。普段からどの単元においても、生徒が興味、関心をもち、問いを追求していくという授業を行っているからこそ、生徒自身が意欲的に最適解を追及し、考察していたように感じた。想定問答の大切さ(議論、意見の再吟味につながり)、さらに切り返しの質問についての助言などで、教師がどのように活動を設定すべきか、発表時どのようにファシリテートしてくべきか考えさせられるものであった。また、想定問答での回答を考える時に、LP を活用することで、実現性や必要性、本当の市民の声や意見が見え、より議論、意見が深いものになったものと思う。また、発表形式もパネルディスカッションやワークショップ形式なども効果的なように感じた。多くの可能性を教えてくれる、意義深い授業であった。

第56回　九州大会社会科教育研究大会

長崎大会報告

令和６年度　九州中学校社会科教育研究会　長崎大会　報告書

文責：研究部長　山岡　貴秀

1　研究主題

「よりよい社会を問い続ける生徒の育成～自ら課題を設定し、追究・探究する学習を通して～」

2　研究概要【基調提案：研究部長　長崎市立野母崎中学校　山田晋教諭】

(1) 研究主題設定の理由（大会冊子 pp. 4-5 より）

① 学習指導要領から（前学習指導要領の課題）

⇒a：社会参画に対する主体性、資料からの読み取りや多面的・多角的に考察し、表現すること

b：社会的な見方・考え方の具体が不明確

c：課題を追究したり解決したりする活動を取り入れること

② 予測困難な時代

⇒現代社会の諸課題に関して、自分事として「問い続ける」「追究していく」ことで、よりよい社会の形成へとつなげる

③ これまでの長崎県の研究の流れ

H28～「社会の形成に積極的に参画する力を育む社会科学習」

⇒「社会参画力の育成」に必要な３つの学習「事実認識、価値認識・価値判断、意思決定・合意形成」と４つの能力「多面的・多角的に考察できる力、社会的事象の意味・意義を解釈する力、公正な判断力、思考・判断したことを適切に表現する力」

R 元～「よりよい社会を形成するための力を育む社会科学習」

⇒H30 より、社会的な見方・考え方、パフォーマンス課題、単元を見通す問いに注目

(2) 研究仮説（大会冊子 p. 6 より）

社会の諸問題を身近に感じられる題材を開発し、生徒自ら課題を設定・探究する単元学習に取り組ませれば、よりよい社会の在り方について主体的に問い続ける生徒を育成することができるだろう。

(3) 「よりよい社会を問い続ける生徒」とは…（大会冊子 p. 6 より）

変化の激しい社会、先を見通すことが困難な社会をたくましく生き抜き、必要な未来志向の資質・能力を身につけるために、社会的な見方・考え方を働かせる学習を通して汎用的な有用性を持つ力を身につけようとする生徒

(4) 「単元を貫く問い」と「単元を見通す問い」の違い（大会冊子 p. 7 より）

・「単元を貫く問い」とほぼ同義。学習の見通しを確実に持たせることで、学習のゴールまでの目的意識や、学習そのものの必要性を考えさせることにつなげる。

(5) 生徒に育成したい資質・能力（大会冊子 p. 7 より）

「社会を読み解く力」の育成…社会認識力、社会的判断力、批判的思考力

・社会認識力とは社会的事象に関する事実を資料（史料）に基づいて見出す能力（事実判断）と読み取り、見出した社会的事象の事象間の関係や事象の意味、意義、特色などを帰納的に、あるいは演繹的に推論することを通して解釈し説明できる能力

・社会的判断力とは社会的問題に対応する複数の政策・行為を、事実を根拠に評価し、選択していく能力

・批判的思考力とは文字・図像・映像・音声などより、示される、社会的事象に関する知識の背後にある価値や基準、立場を社会の特質と関わらせて多面的・多角的に読み解き吟味していく能力

(6) 資質・能力を育成するための問いの整理（大会冊子 p.7 より）

問いの類型	具体的な問い	資質・能力
資料から必要な情報を集めて読み取るための問い	いつ、どこで、誰が、何を、どのように、どのような	社会認識力（事実判断）
社会的事象の相互関係や意味・意義、特色を説明するための問い	なぜか、特色は何か、（その結果）どうなるか、（時代の、社会の）本質は何か	社会認識力（推論・評価）
社会的事象を評価的に判断したり、問題（論争）場面において望ましい行為や政策を根拠に基づいて選択したりするための問い	善いか（悪いか）、望ましいか（望ましくないか）いかに〇〇すべきか、何を選択すべきか	社会的判断力
知識（情報・解釈・議論・言説）に内在する価値・基準・立場を吟味したり、その組み立ての論理や提示の方法を吟味したりするための問い	その知識の背後にはどのような価値観や立場性があるか、その知識は、どのような組み立てになっているか、どのような手時の方法をとっているか	批判的思考力（吟味）

(7) 単元構想（大会冊子 p.8 より）

① 「単元を見通す問い」を設定する

② 「単元を見通す問い」を解決するための知識・技能を習得する

③ 「単元を見通す問い」と関連付いたパフォーマンス課題に取り組む

④ 「単元を見通す問い」に対するまとめや振り返りを行う

(8) 成果と課題（大会冊子 p.11 より）

〇 県全体で研究に取り組めた

△ パフォーマンス評価が実践者次第である（全体研究として示せていない）

3 所感

長崎県では、県下一斉に教員を巻き込んで研究に取り組む姿が見られた。「単元を見通す問い」を設定し、パフォーマンス課題に取り組むことで、現代社会の諸課題の解決に向けて、よりよい社会（の在り方）を問い続ける生徒の育成を目指していた。研究テーマに関しては佐賀大学教育学部附属中学校での昨年度までの社会科の研究主題と合致したり、昨年度の九中社研宮崎大会での研究テーマ「考え続ける」とも類似していたりと、個別の授業を単元全体で捉えるなど、その連続性に注目することの方向性は、九州内でも一定の潮流をなしていると感じた。

その一方で、「問い続ける」に関して、その定義が非常に曖昧で、実践者に解釈が委ねられる点が大きな課題であった。私は主に歴史的分野の授業や実践発表に参加したが、授業者や実践発表者の「問い続ける」の捉えが曖昧で、はたして歴史的分野の分野提案で、分野長が唱えていた、公民的分野への連続性を見据えた歴史的分野の学習になっていたのか、疑問であった。その点、地理的分野の授業においては、日本の諸地域の全7地域の単元をつなげる、大単元構想として長崎県の在り方を「問い続ける」という、提案性の高い授業であった。各分野での捉えを一致させたり、その言葉の定義を何度も遂行してブラッシュアップしたりするなど、理論と実践を往還させて、よりよい社会科学習へと昇華していかなければならないと感じた。

また、研究の成果として挙げられていた点が、県内全体への研究の広がりに関することだけであった点が気になった。つまり、今回の研究の有効性について、検証することが不十分であったように思う。日々の多忙な業務の中での実践家による研究であるため、分析の手法はある種恣意的なものになることは否めないが、生徒へのインタビューや、実際に取り組んでみた先生方の声からでも、例えば「単元を見通す問い」を設定することの意義、「問い続ける」ことの重要性などに言及して、研究成果を分析する必要があったと考える。今後研究が進むことで、成果が明らかになることを期待したい。

第56回 九州中学校社会科教育研究大会（長崎大会）地理的分野報告

1　地理的分野基調提案について

(1)　地理的分野における研究テーマとの関連性

地理的分野では、県の研究テーマに沿い、主体的・対話的で深い学びを実現し、社会的な見方・考え方を生かし一人一人の主体性を高めるために、「地理的な見方・考え方を働かせながら自ら課題を設定し、追究・探究する単元学習」の実践を行っている。研究主題の「よりよい社会を問い続ける生徒」について、地理的分野では、「地理的な見方・考え方を働かせて、課題を把握・設定し、主体的にその解決に向けて追究・探究する学習を通して、よりよい社会の在り方について考察・構想したことを表現できる生徒」と捉え、以下の資質、能力の育成を目指すための実践的研究を進めている。

①世界および日本の諸地域についての地理的な知識を習得し、様々な情報を調べまとめる力(知識及び技能)
②地理的な見方・考え方を働かせて、社会的事象の特色や関連、意味を多面的・多角的に考察したり、議論する力　(思考力・判断力・表現力)
③社会的事象について関心を持ち、自分が暮らす知育の課題を見出し、地域社会の形成に参画し、発展に主体的に努力する態度　(学びに向かう力)

以上の資質や能力を育成するために、①単元の再構成、②社会的事象の地理的な見方・考え方を働かせる工夫、③自ら課題を設定する学習場面の設定に着目し、実践を積み重ねてきた。

①　単元の再構成

→単元を再構成し、いくつかの地方を学習した後に、「地域の在り方①」を組み入れて、地理的な見方・考え方を働かせ、自らの課題を設定する場面をつくる。自然環境等の既習の考察の仕方をもとにして、目の前にある課題を丁寧に分析し、その課題解決のために多面的・多角的に考察・構想し、他者と議論をして深めるような、追究・探究的な学びを継続させる。

②社会的事象の地理的な見方・考え方を働かせる工夫

→地理的分野の学習において主体的・対話的で深い学びの実現のためには、「社会的な事象の地理的な見方・考え方」に根ざした追究の視点とそれをいかして解決すべき課題(問い)の設定が必要である。そこで、「地理的な見方・考え方」を働かせるために、単元の導入で「単元を見通す問い」を設定し、各単元の学習を終えるごとに必ず「単元を見通す問い」に立ち返って学習内容を振り返るように工夫を行う。

③自ら課題を設定する学習場面の設定

→単元では、生徒が個別に地理的な課題を設定する学習場面を設定する。生徒自らそれぞれの疑問や関心に応じ、課題を設定する。このように、生徒の興味・関心の方向性等に応じ、追究・探究において課題の設定等、教師が生徒一人一人に応じた学習課題に取り組む機会を提供することで学習の個性化を図り、個別最適な学びの実現を目指す。その際、生徒同士のグループ活動や、地域の方々との意見交流等の協働的な学びも充実させる。

今回の研究授業に向けての取り組みは以下の4つである。

①単元構成を工夫して、課題把握・設定→課題追究・探究する「地域の在り方」の学習を行う。

②小単元を終了ごとに、「単元を見通す問い」に立ち返り、各地域での考察の仕方をもとに長崎に関連する疑問を生かして課題設定をする。

③地理的な見方・考え方を働かせた課題設定を行うことで、学習を深化させる。

④大単元の終わりにパフォーマンス課題に取り組む。

以上4つの取り組みを行うことよって、長崎県社会科部会地理的分野の研究で考える、「よりよい社会を問い続ける生徒」を育成する。

2　授業について（授業者：長崎大学教育学部附属中学校　古藤鉄平教諭）

(1)授業の概要（大単元：「日本の諸地域」）

単元では、「日本の諸地域」で学習した考察の仕方をもとに「単元を見通す問い」である「100年に一度の変革期をむかえている長崎のよりよい在り方とは」を設定し、その課題に迫る単元を構想している。単元は「日本の諸地域①」→「地域の在り方①」→「日本の諸地域②」→「地域の在り方②」の順で小単元に分け、単元を見通す問いについて、2度の追究・探究学習が設定されている。具体的には、九州地方の学習では「自然」、中国・四国地方の学習では「交通・通信」、中部地方の学習では、「産業」、近畿地方の学習では「歴史」を中核として学習を行い、地域の在り方①の学習に入る。これまでの地方の学習で学んだ視点をもとに、長崎のよりよい在り方について、追究・探究課題を設定し、解決に向けて追究・探究を行う。さらに東北地方の学習で「伝統」、北海道地方の学習で「自然」、関東地方の学習で「人口」を中核とした学習を行い、地域の在り方②の学習に入り、再度、長崎県のよりよい在り方について探究課題を吟味し、解決に向けて探究する過程を設ける。最後に「長崎県をよりよくする方策を提言しよう」というパフォーマンス課題に取り組む単元構成となっていた。

(2)授業の実際

公開授業では、日本の諸地域①の学習を終えた後の、地域の在り方①の授業が公開された。生徒は、これまで日本の諸地域で学んだ自然や交通、歴史や産業などの視点から、「よりよい長崎」に迫る探究課題を設定していた。具体的に生徒は「被爆都市としての歴史が風化していることが課題ではないか」や「長崎は真珠の生産が多いのに、三重の真珠がクローズアップされている。ブランド化することができないか」、「長崎は坂道が多い。住みやすい環境づくりのためにどうしたらいいか。またその欠点を利点に変えることができないか」など、これまでの日本の諸地域で獲得した視点をもとに、長崎県をよりよくするための課題について検討していた。またグループでそれぞれが考えた課題についてアドバイスを行う時間が設けられ、その解決に向けてアドバイスに悩む場面も見られた。授業では最後に課題を設定する困難さを確認し、再度日本の諸地域の学習を経て自分のテーマを作るよう伝え授業を終えた。

(3)質疑応答

・「探究」と「追究」の違いについて

→探究は答えが定まっておらず、追究は調べると考えがあること

・今後の授業展開について

→日本の諸地域②の学習を終え、再度追究・探究課題を設定させ、クラス、学年で議論を展開し、最後は一つのテーマに絞り、長崎県知事に提案することになっている。

・なぜ地域の在り方を①と②で分けているのか。

→学習の途中で追究・探究したい課題が変わることを考え設定している。

・生徒の記述のなかに「ゆるキャラを活性化の材料にする」ことが記述されていたが、生徒一人一人に課題設定をゆだねると、課題解決のための検討の在り方が何でもありになってしまうのではないか。

→教師側がテーマを設定し、学んだことを生かした課題追究に進めるようにアドバイスする必要がある。

(4)指導助言

日本の諸地域の学習をしていく中で、常に長崎の今後の在り方を意識させていたからこそ、今回の研究授業で生徒の発言に「真珠の生産」について疑問と課題が出てくるなど、深い学びにつながる単元設定の工夫がなされていた。そこには分断して日本の諸地域を学習させるのではなく、日本の諸地域と地域の在り方との往還があった。今回の研究授業のように地域の実情に応じた単元設計を心がけるべきである。

検討事項としては、生徒の発言の中に他人が行動を起こすことに期待するものが多かった。今後さらなる高みを目指していくためには、傍観者として社会の在り方を考えるのではなく、自分事として主体性をもって社会の在り方について考えることができる手立てを検討する必要がある。

3　実践発表について

① 研究主題「社会的な見方・考え方を働かせ思考力・判断力・表現力等を育成する社会科学習指導法～単元の課題を追求する思考ツールやICTを活用した協働学びを通して～」

単元名「南アメリカ州」

発表者 福岡県岡垣町立岡垣中学校　教諭　安田　拓未

(1)　研究概要

研究主題に迫るために実践者は、単元を見通した課題(「なぜ」「どうして」「どうしたらいいか」など)を社会科の固有の視点や考え方を働かせて追究させる中で、課題を解決する力、その理由を説明する力、それらをもとに議論する力の育成を図る社会科の学習について研究を行っている。具体的には、南アメリカ州の実践が紹介された。単元を貫く問いとして、「南アメリカ州の『熱帯林』の危機を救うにはどうするべきか考えよう」を設定し、開発と環境保全の二つの側面からメリット、デメリット調べさせ、問いに対する自身の意見を構築し、他の生徒と意見交流を行う。最後の自身の考えを再度まとめる単元となっていた。

(2)　質疑応答

・今回の単元で設定した問いは、生徒にとって当事者意識を持たせる切実な問いになっていたのか。

・生徒の意見を評価する基準はどのようになっており、それを授業のどの段階で示したのか。

・社会的な見方・考え方を生徒が自覚的に発揮している場面はどこか。

(3)　指導助言者より

社会的な見方・考え方は問いによって働く。社会的な見方・考え方を働かせることで、思考力・判断力・表現力が養われ、さらに見方・考え方を働かせて課題を解決する力が鍛えられるなど、相互に関連をしている。そのため、子どもたちの心を揺さぶる問いを設定し社会科授業を構想してほしい。

② 研究主題「主体的に地域の課題解決に参画しようとする力を育てる社会科学習指導～日本の諸地域での学びを地域に還元するパフォーマンス課題を通して～」

単元名「地域の在り方」

発表者 鹿児島県薩摩川内市立東郷学園義務教育学校　教諭　中野　正貴

(1)　研究概要

研究主題に迫るため、生徒が地域の課題を自分事として捉え、地域の課題や解決策について考えるなど地域の課題解決に自ら関わろうとする態度を育成することをめざし実践を行った。地理的分野「日本の諸地域」の学習において、東郷町で生活する住民の立場として、「各地方で学習した地域の課題解決策」を地域に伝えるパフォーマンス課題を、「大単元を貫く課題」として設定した実践が紹介された。東郷町が抱える課題をゲストティーチャーから教えてもらい、東郷町のあるべき姿を目指すために、日本の諸地域の学びから課題解決の工夫を学ぶ構成となっていた。またオンラインで実際に課題の解決に向けて携わっている公的機関の職員に講話をしてもらうなど、学校外部の人材とつながり学習を進めた。最後にこれまでの学習で学んだ内容を用いて、大単元を貫く課題について取り組み、自らの地域に存在する特色とその他の地域の特色を比較し、自らの地域における課題解決策についてまとめる活動を行い、単元を終えていた。

(2)　質疑応答

・大単元を貫く課題が「地域の方の思い・願いを実現」となっており、具体的ではないのではないか。

・生徒のまとめに対して評価はどのようにして行ったのか。

(3)　指導助言者より

単元を貫く問いに対して、机上の空論にならないよう丁寧に指導がなされている。特に、ゲストティーチャーの困り感から学習をスタートさせ、社会参画を実感させる工夫がなされていた。また各地方の学習においてGTに、講話を依頼するのはとても綿密な単元計画が必要になる。事前の単元計画の準備の大切さを改めて感じた。

③ 研究主題「よりよい未来の地域社会を問い続ける生徒の育成〜地域の課題解決を追究・探究する学習活動〜」
単元名「地域の在り方」
発表者 東彼杵町立東彼杵中学校　教諭　福田　純子

(1) 研究概要

研究主題に迫るために、実践者は「地域の成り立ちや現在の課題を明らかにし、地域の未来についてまとめよう」というテーマを設定し、社会の諸問題を身近に感じられる題材を開発した。生徒自ら課題を設定させ、探究する単元学習を行うことで、よりよい社会の在り方について主体的に問い続ける生徒を育成することができると考え、実践を行った。単元では東彼杵町が抱える人口減少に伴う課題を生徒に把握させ、その課題の解決を目指すための方策について生徒に検討をさせた。調べ作業を行う中で、町役場の方に協力を要請し、生徒の質問にも答えてもらい、生徒は課題解決のための提案を個々に考えた。その後、ICT を活用してプレゼンテーションを行い、単元を終えた。

(2) 質疑応答

・町役場の方が協力的に学習をサポートしてくれたとのことだが、実際に教室に入り生徒共に課題について考えることがあったのか。

(3) 指導助言者より

人口減少に関する課題は、よりよい社会をつくるためには必ず考えなければならない問いである。学びを学校の中で閉じてしまうのではなく、社会に開かれたものにし、学校の外にもその学びを広げることで幅広い意見を聞くことができる。単元設計のなかに外部の人材をつなげる有用性を示した実践となっていた。

4　所感

今大会の研究授業や実践発表では、福岡県の実践発表を除いて、「身近な地域の在り方」を検討する実践が紹介された。また地域の在り方について検討するために、その視点を日本の諸地域の学習から獲得し、大単元の最後に課題に対して追究していく流れとなっていた。学習者は学習する意義を感じながら日本の諸地域の学習に取り組むことができるように工夫がなされていた。また、学校外部の人材とつながりをもち、問いに対して共に考える過程が各実践で共通して行われており、同じ方向性を目指す佐賀県の中社研にとっても大いに参考となる研究大会となった。

一方で、社会科教育の目的に立ち返って考えると、検討すべき点があると感じた。それは、研究授業や紹介された実践の中には意見交流や質疑応答はあるものの、子どもたちが議論する場面をみることができなかった点である。それは個々が課題と感じた題材を個々で追究したとしても、そこに対立点が生じないからである。社会問題の多くは、価値観の違いから対立が起こっている。お互いが正しさをもって主張するからである。その対立の構図を読み取らせ、自身の考えを構築し、他者との議論を通し、自身が考える正解に近い答えを目指していくことがより意義の高い実践となりえるのではないかと感じた。ただその際は、県大会であげた課題と重なるが、単元の学習内容とパフォーマンス課題の関連性について、県中社研としてもその位置づけについては検討すべきであると感じた。

（地理的分野部長　川原　峻）

第56回九州中学校社会科教育研究大会　歴史的分野報告書

研究主題

「よりよい社会を問い続ける生徒の育成」

～自ら課題を設定し、追求・探求する学習を通して～

1　分野基調提案について

(1)研究主題との関連

現行の学習指導要領では、歴史的分野の目標を「社会的事象の歴史的な見方・考え方を働かせ、課題を追及したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を育成することを目指す。」とし、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の資質・能力の三つの柱を有機的に関連付けることで達成されることが示されている。

歴史的分野の学習を効果的に行うためには、本県がこれまで取り組んできた、単元を見通して、適切な課題を設けて学習を行う工夫、「課題把握」の場面での生徒が主体的に学べる資料・教材の工夫、対話的で深い学びができ、歴史的な見方・考え方を働かす「課題設定」「課題追及」の場面設定、これらを確実にすることが必要である。そして、これらを確実に行うことで、既習の概念的知識や技能を活用しながら、生徒の、学習課題に主体的かつ自律的に追求しようとする態度を育成することにつながり、延いては「よりよい社会を問い続ける生徒」の育成につながると考える。

学習を計画するにあたって、適切な資料を基に課題を設定する、根拠を明らかにしながら考察を深める、歴史的な見方・考え方を繰り返し働かせて、学ぶ経験と知識を習得させる活動を展開することが不可欠となる。

(2)歴史的分野における「よりよい社会を問い続ける生徒」とは

- 歴史の大きな流れの中から社会に見られる課題を把握して、問題意識を持つ生徒。
- 課題の解決に向けて、未来への選択肢からどのような未来を目指すべきか選択・判断することができる生徒。
- 現代の課題に照らし合わせて考え続ける姿勢をもち、よりよい社会の実現を視野に、課題を主体的に解決しようとする態度を持つ生徒。

なお、現代における具体的な課題の解決方法を考察する学習については、公民的分野の学習が担うところであるが、歴史的分野の学習において育まれたものが、公民的分野での課題意識、課題解決方法を考察する学習につながるだけでなく、その課題がどのような背景、原因から生み出され、どのような結果や影響があるのか、どのように展開、変化してきた推移があるのか等「歴史的な見方・考え方」を働かせて捉え、より現代社会の見方・考え方を広げたり、深めたりすることにつながることが期待できる。

(3)研究内容

本県では、次のような単元学習を行うことで研究主題に迫ろうとしている。

○自ら課題を設定し、追求・探求する単元学習。

単元計画の中で自ら課題を設定する場面をつくる。既習の知識や、資料、史料をもとに社会的事象への関心を高め、自ら課題、問いを設定することで、生徒が主体的に課題の追求探求に取り組み学習を深めることができる。

○社会科の見方・考え方を働かせ、追求・探求する単元学習。

単元で扱う各時代の人々の営みを、時期や推移、相互の関連などさまざまな視点や立場から見つめ、社会的事象が起こった経緯や背景、原因などを明らかにすること。また、歴史を大観して各時代の特色を捉え、他の時代と比較させたり、時代の転換点に着目させたりするなど、歴史的な味方、考え方を働かせて、課題を追求・探求する場面を単元計画の中に設定する。このような歴史的分野の学習を進めることで、よりよい社会について考察したり、選択・判断したりする際に必要な思考力、判断力、表現力を育成することができる。

○単元を見通す問いについて、追求・探求する単元学習。

生徒が主体的に学習を続け、時代の特色を踏まえながら歴史の大きな流れを理解するために重要なのが「単元を見通す問い」ではないかと本研究部会は考えた。各時間の問いの追求・探求を行うことで、「歴史的な見方、考え方」を働かせて複数の立場や意見を踏まえた考察や選択・判断ができるようになり、さらなる課題の追求・解決に向かう力を伸ばし、よりよい社会の実現を視野に、課題を主体的に解決しようとする態度が育まれることが期待できる。「単元を見通す問い」と各時間の「問い」を結び、単元学習の中で計画して繰り返し取り組むことで、1時間の授業に意味を持たせ、単元全体で「主体的で対話的」な「深い学び」構想し、実現させたい。

2　授業について

(1) 授業の概要（構想）

①生徒が主体的に学習に取り組むことができるような工夫

- 生徒が疑問をもちながら、解決のために主体的に追求・探求しようとする教材の開発。
- 生徒が興味・関心をもち、身近な地域の歴史上の課題に迫ることができる郷土資料を活用した教材の開発。
- 追求・探求すべき「単元を見通す問い」や「課題」を作り出す場面の設定。

②歴史的な見方・考え方を働かせることができるような工夫

- 「単元を見通す問い」と関連させた、各時間の「問い」「課題」の設定。
- 根拠を明らかにしながら考察を深め、対話をする中で、自分の認識を広げたり深めたりする場面の設定。
- 人々の思いに共感し、時代を比較して生徒が歴史を学ぶ意味や意義を実感することで、よりよい社会について考え、洗濯・判断を行う場面の設定。
- 単元の学習によって獲得した概念を活用して取り組むパフォーマンス課題の設定。

(2) 授業の実際

・まず、出島付近の道路の画像を電子黒板に提示し、道路の色が変わっていることに注目させて違和感を共有。生徒とのやり取りの中で江戸時代の窓口だったことに気づかせ、今回学習する単元の大観をつかませた。生徒とのやり取りが豊かで、生徒が興味や関心が高まっていく様子があった。(導入：7分)

・資料①…人口推移のグラフ。明治時代になると人口が急増している理由を問い掛けた。(明治時代に急増している部分は、［？］の紙で隠していた)

　生徒：「開国して人口が増えたのかも」、「産業が栄えて便利になった」、「住む場所が増えた」など

・資料②…下関戦争で列強が砲台を占拠している資料を見せ、当時の日本の状況を確認。

　生徒：「列強より、弱かった」、「このままだと、負けて植民地になるかも」など

・資料③…明治時代後半の風刺画を掲示し、風刺画を細かく読み取るワークシートを配布した。学び合いの授業形態で、生徒は自由に動いて複数人で取り組む生徒や個人で取り組む生徒に分かれた。

・なぜ、明治時代後半になると日本はそういう状況になったのかを追求できるための「単元を見通す問い」を生徒に考えさせた。その際、6つの「疑問詞」を提示し、取り入れるように声掛けをした。個人→班で作成した「単元を見通す問い」を黒板に貼り、それをグループ分けした。

・生徒の興味や関心を引き立てるような資料（出島付近の道路、人口推移のグラフ、風刺画）の工夫。生徒が「なぜだろう？」と疑問を抱くような「見方・考え方」に働きかけるような資料であった。

・3枚目の風刺画の資料は、今から学習する内容の結果を表したもので、生徒が「なぜ日本はこのようになったのだろう？」と疑問をもち、「単元を見通す問い」を作成するきっかけになったと感じる。

・生徒が個人でも「単元を見通す問い」を考えることができるような手立てとして6つの「疑問詞」を提示することは非常に効果的であると感じた。これまでの積み重ねもあったと思うが、すべての生徒が自分なりに「単元を見通す問い」を作成し、班活動に入ることができていた。

・教師側も話す時間を削り、班から出た「単元を見通す問い」をグループ分けする時のパントマイムのようなパフォーマンスも生徒が飽きずに授業に集中する工夫だと感じた。

(3) 質疑応答

[Q1]「子どもたちの問いを引き出したかった」と言われましたが、指導案の中には書いてなかった。本当の先生の狙いは「なぜ？」だったのか、「どのように発展したのか」のどちらだったのか？

[A1]指導案には別のことを書いているが、ここに持っていくためにレールを敷いてしまうと、子ども達の主体的な学びにならない。子どもたちの納得感が大事で、指導案には書いてはいるが、そこまでこだわっていない。そこには自由を持たせて、見通すことができればと思っている。

[Q2]単元を見通す問いを作らせる際に疑問詞を６つ出されたが、６つ（「いつ」「なに」「なぜ」「どのように」「だれ」「どこ」）の中でレベルがあるのか？本時の評価で「十分満足できる生徒姿」が多面的・多角的という問いを出した生徒だと思うが、「どのように」とか「なぜ」を出している生徒がそれに当てはまると思う。先生がどのように考えているか教えてください。

[A2]疑問詞の設定については、「だれ？」は「なぜ？」でも含まれると班の議論の中でも出ていた。今の2 年生はザビエルの登場あたりから、問を作らせることをさせている。何回かする中で、「まとめやすいのはこういう問いだ」と生徒たちの学びの中で導き出されているようである。

[Q3]熊本県では、生徒の問いを生み出す研究をしている。数名インタビューすると毎回このようにしていると答えていた。単元も見通す問い、パフォーマンス課題にもどれくらいの時間をかけるのか。時間を生み出す工夫やコツがあれば教えてください。

[A3] 3 節と 4 節をまとめて構想して 15 時間を予定している。生徒の理解具合、落ち度を見ながら進めていこうと考えている。毎回の節ごとに「問い」を作ると時間がかかるので、単元を大きくまとめて１つの「問い」を作っている。中には見通せないものもあるのが、基本的には教科書に合わせている。

[Q4]単元を見通す問いについて。生徒が立てた問いだから意欲的に取り組むとは思いますが、単元の途中で先生がもっとここで深めたいと思った時に、そのまま貫くのか？それとも修正するのか？また、もし修正するならどのようなやりとりで修正しますか？

[A4] 長崎県では「単元を貫く問い」ではなく、「単元を見通す問い」という形で研究を進めてきた。単元の最初に見通しをもって主体的にしていくために、この表現にしている。途中で変わるときもありえます。「これわかったやん」ってなった時には、子どもたちの問いに対す落ち具体を見ながら変えている。そうなった時には、「なんで変えるのか」を投げかけて、新たにどういう問いにしていくのかを生徒に納得感を与えながら、時間をかけてやっていく。生徒の考えを大切にしながら答える。

[Q5] ①『明治時代の「なぞ」を探す旅に出かけよう！』という学習課題に込められた意図は？②パフォーマンス課題の紙芝居について。なぜ紙芝居にしたのか？③個別最適な学びが言われる中で、パソコンを使った展開もあるのだが、普段どのようにタブレット端末を使っているのか。

[A5] ②紙芝居の意図…５枚作らせる。１枚目：明治維新、2 枚目：国際関係、3 枚目：立憲国家、4 枚目：日清・日露戦争、5 枚目：子どもたちの創造性におまかせ。ポイントが見て取れると考える。紙芝居にはストーリーがついてくるので、そこを表現することができているのか。③ＰＣは手段であって目的ではないので、今日の授業には使わない方が深まっていくと思った。普段は振り返りをＰＣで配信している。今回のパフォーマンス課題も PC を使ってスライドで作成させる予定。

～指導助言者より～

・本大会の研究主題「よりよい社会を問い続ける生徒の育成」は、今まさに求められる子どもの姿であり、社会的事象を直接取り扱う社会科だからこそ、その要としての役割を担っている。

・この研究主題を目指して、本研究では単元構想や授業づくりについて二つを留意点として研究を進めている。一つ目が「主体的に生徒が学習に取り組むための工夫」、二つ目が「生徒が歴史的な見方・考え方を働かせるための工夫」。この二つの根底にあるものは、「資質能力の育成に向けて主体的・対話的で深い学びの授業改善を実現するためにどのような教師の働きかけがあるのか」という授業者としての探求の視点。（つまり、主体的な学びを実現するための、教材の工夫や単元を見通す問いや課題の設定。）

・「問い」と「教材」の提示・設定・構成の仕方、ここに集約をされている本研究だと思う。何を示して、何に着目させて、何を考えさせるか。つまり、どのような社会的な見方・考え方を働かせるかに直結する。

・教師と生徒のそれぞれの視点。まずは、生徒が単元ごとの内容や時間のまとまりを見通し、身に着けるべき資質・能力を含めた学習の方向性を把握する。つまり、学習のゴールとプロセスを生徒と教師が共有する。教師の視点からは、単元の中で学習内容を関連付けて、多様な学習の要素を組み合わせるなどして単元を構想することで授業改善を実現する。主体的・対話的で深い学びは、必ずしもすべてが実現できるものではない。なので、単元全体を見通して、指導と評価の計画を立てることが必要。こういった視点をとりあげて研究を進めているところが素晴らしいと考える。

・公開授業の単元構想について。「学習内容」と「問い」に加えて、「教師の手立て」が明記されている。これによって、生徒が何に着目して、何を考えるか。どのような社会的な見方・考え方を働かせるかが明確に示されている。

・見方・考え方は、問いと教材によって働くと考える。そこから申し上げると、本時は四つの教材が使用されている。授業参観をして感じたことは、丁寧に一つ一つ資料を提示しながら、子どもたちの問いを引き出して、授業につなげていた。そうすることで、社会的な見方・考え方を働かせながら学習課題に迫っていけるように工夫している。

・時間的空間的に段階を踏んで、生徒の視点を広げていく配慮をされている。もう一つ加えるとするなら、最初の資料（出島）を示したときに、あえて視点を示さずに気づくことを生徒に問いかける。単元の導入であるとことを考えると、全員が参加できるように思ったこと、気づいたことを遠慮なく述べることができる配慮をなされると良いのかなと感じた。

・三つ目の資料（下関戦争）は既習事項の活用であり、四つ目のビゴーの風刺画が対になっている。三つ目の資料を使うことで、改めて明治政府が目指した国づくりを予想させたり、思い起こさせたりする働きかけになっている。その結果として四つ目の資料を示すことで、日本の列強入りを生徒がどう捉えるか。多面的・多角的な考察の幅を持たせる工夫がされていた。

・一方で、取り扱う資料や教材が多くなるほど、その役割は位置づけを明確に意図する必要がある。授業では明確にされていたため大丈夫だった。どうしても先生は社会科が好きなので、こんな資料があったとかで、資料ありきの授業に陥らないように注意しなければならない。

・支持的風土が育まれており、意見が出やすいクラスだと感じた。全員が参加できる工夫がされていた。問を引き出しながら丁寧に積み上げながらしていた。

・一点疑問で、いかに教師の手から学びを手放すか。教師が意図する学びの方向に持っていきたいのと、子どもたちの知りたい・学びたいとどう結びつけるか。そのバランスが難しい。

・ティーチャーとしての役割だけでなく、ファシリテーターとしての役割も必要だと思った。

3　実践発表について

地理的分野研究発表 『地域を支え、未来を拓く力』を育成するための社会科学習 〜自ら感じる地域の強みと課題を活用した実践を通して（2学年）〜 沖縄県那覇市立上山中学校　教諭　與儀光司

〜主題設定の理由〜

本県社会科教育研究会のテーマは「地域を支え、未来を拓く力」の育成であり、地域の強み（魅力）と課題について探求する活動は『指導要領』が示す目標と本県のテーマの実現のために重要であると考えた。そして学年の実態として授業に主体的に臨む学習態度のアンケート結果が低下していることを受け、互いの考えを交流させ、学びを深めることに課題があると分析した。この課題を踏まえて、社会科の授業において地域をよりよくしていくために、自ら課題を見つけ、周囲の意見や考えを分析し、自分には何ができるのかを考える探究活動を通して、地域を支えるための主体的な態度の育成を目指す。

〜研究の仮設〜

地域をよりよいものにするために自分にどのようなことができるのかを思考することで、地域を支えようとする主体的な態度の育成につながると考えた。その手段として、アンケートや思考ツールを用いた振り返りシートを活用して思考を整理し、表現する活動を実践することで、自己の成長を実感し、今後の学習においても意欲的に取り組むことができるだろう。

〜研究の実際〜

（1）アンケートの実施

地域の強み（魅力）と課題を生徒達がどのように考えているのかを捉えるため、アンケート調査を行った。一部抜粋。

Q.あなたは将来も沖縄に住みたい（いつかは帰ってきたい）と思いますか？			
思う 52.3%	どちらかといえば思う 25.7%	どちらかといえば思わない 15.6%	思わない 6.4%
暖かいから。故郷だから。料理や海が好きだから。他の県に住むことが恐い。家族がいるから。　など		いろんなところに簡単に行けない。県外の方が便利そう。県外の方が給料が高そう。　など	

アンケートから、住みたいと思わないと答えた理由として地理的な位置などが関係していることが分かった。こうしたことを生徒たち自身が地域の課題の一つとして感じていることと、まだ課題として捉えられていない生徒に気づき、考えてもらうための手立てとして生徒たちの意見や考えを可視化する活動を取り入れることが必要だと考えた。

（2）AIテキストマイニングの作成

地域の強み（魅力）と課題を考え、整理し、まとめる活動としてグループでオリジナルのテキストマイニングの作成を行った。作成方法としては付箋を利用し、メンバー同士が自分の考えや生活の中で実感する強みや課題を出し合った。その後、テキストマイニングでまとめ、グループだけでなく学年で共有した。

（3）学習前後を比較できる振り返りシート

単元を通した編世を可視化して、単元内の成長をみとる取り組みとして、川端裕介氏のOPPシートを参考に振り返りシートを作成した。近畿地方以後の振り返りから、自己の変容を一目で分かるように六角形のレーダーチャートを取り入れた。６つの項目には「自然環境」「伝統・文化」「農業・漁業」「工業」「観光」「自由設定」を設けて、それぞれを 10 点満点で表せるようにした。授業の前後で評価、比較して点数が変化して点についてなぜ変化したのか考えを書くことで考えを深め事故の変容を生徒自身が読み取ることができるようにした。６つの視点を与えることで、多面的多角的な視点から地域を考える力を養うことができると考えた。「自由設定」を設けたねらいは、生徒の興味関心に基づく視点を自由に設定することで、生徒が地域を考えるうえで何を重視しているのか意見を吸い上げることに生かせると考えた。

～研究の成果と今後の課題～

地域の課題について多様な事象を共有することができ、レーダーチャートを使ったことで地域を多面的・多角的な視点から考えることができた。

思考・判断・表現することに苦手意識がある生徒の中には、レーダーチャートやテキストマイニングの作成において自分の考えをもてなかったり、表現できなかったりする生徒もいた。地域の課題解決に向けて自己の考えを持てる生徒はいたが、実践に取り組むには発達段階を考えた上で難しいものもあった。

～指導助言者より～

・「沖縄県は好きですか」の問いに肯定的な評価をしたのが、89.9%。しかし、「あなたは将来も沖縄に住みたいと思いますか？」の問いに肯定的な評価をしたのが 78%。これを高いと捉えるべきか。
・好きだけど、住みたいとは思っていない。
・ふるさと教育に力を入れている学校で、同じようなアンケートをしたが、「住みたいか？」と聞かれたら下がった。その理由に地域の課題が見られる。
・AI が頻出度で判断するオリジナルの「テキストマイニング」が良かった。縦軸と横軸で分布を採るなど
・気になった点…レーダーチャート。６つの項目を１０点で評価する。何を評価するのか。理解度なのか興味関心なのか発展度合いなのか。話では理解度かな？そこには根拠が必要。子どもたちの感想には適当に書いているとかある。
・たくさん知られたが、理解度は低くなるという逆転現象が起きるのでは。根拠を示せるとよいと思う。
・追求解決しようとしている。社会だけでは、時間が足りないので、総合などをつかって教科横断的にしていくと良い。

歴史的分野研究発表

自他を認め合い、共に学び続ける生徒の育成
～西九州大学留学生をLPとした歴史的分野の授業実践を通して～

佐賀県小城市立小城中学校　教諭　江上哲平

～主題設定の理由～

少子高齢化が進み、日本は経済・社会を支えていくために海外からの人財を活用していく流れにある。佐賀県内においても在留外国人は令和6年の統計で約1万人となった。しかし、子どもたちはALT以外の外国人と交流した経験は少なく、外国人との関わりに不安を持つこどもも多い。

佐賀県中学校教育研究会社会科部会は、「社会に開かれた学び」をめざしており、支部内の教員同士でパフォーマンス課題の共有を行い、生徒と共に学ぶラーニングパートナー（以下、LP）の活用の工夫について特に力を入れている。

本研究では、1年生の歴史的分野の学習において、西九州大学短期大学部の留学生をLPとして、生徒たちが既習知識を活用して考えた自分の意見を留学生に説明する活動を行った。「伝える」とはどういうことかを生徒たちが考え、相手と通じ合う本当のコミュニケーション力が育まれるのではないかと考えた。

～研究の仮設～

生徒たちにパフォーマンス課題を留学生に説明することを意識しながら社会科を学ばせれば、生徒たちは、世界に視野を広げ、伝えるためのコミュニケーションのあり方を考え、説明活動に取り組む意欲と表現力が向上するだろう。

～研究の実際～

（1）小城・多久支部の取組と本研究実践のつながり

県の研究を踏まえて、小城・多久支部では、令和4年度より歴史的分野の研究を進めてきた。パフォーマンス課題を教員間で共有し、LPの活用の工夫について協議しながら、共通理解してきた。

（2）単元の学習

第1時～第5時の授業では、県が提案する『学び合い』を行った。すべての生徒が、それぞれの時間に学んだ「人類の発明」の重要性を理解しながら、最後に自分が最も重要だと思うものを選び、理由を留学生に説明することをめざした。

（3）留学生との交流授業の実際

初めて出会った外国出身の方に、突然授業で学んだことを説明することは難しい。そこで、総合的な学習の時間を利用し、出会いの場として留学生の紹介や勉強していること、ミャンマーとベトナムの政治や文化について説明してもらった。最初は緊張しているようだったが、「楽しかった」「嬉しかった」という感想が多かった。4人グループを作り、①説明者、②進行、③計時、④盛り上げの四つの役割を意識させた。留学生は生徒の説明を聞き、共感を示したり、自分の意見を返したりしていた。農耕が大事だと説明した生徒のグループでは、留学生の国の料理の話に発展していた。古代文明の文字の話から、ミャンマーの文字を教えてもらい、丸々とした文字に生徒たちが感心していた。これらの話は、この単元とは直接関係の無いことかもしれないが、このような経験が公民として資質・能力の基礎となっていくのだと思う。

～研究の成果と今後の課題～

今回の実践で、本校の生徒たちは日本で暮らす外国出身の方々を身近に感じることができるようになった。そして、留学生に説明する活動を通して、「コミュニケーションとは何か」を体感した。この授業の後、生徒たちは先生の話を聴く態度や授業の中での級友との交流の仕方が変わってきた。また、留学生との交流を意識して学習を進めたことで、多くの子どもたちの学習意欲が高まった。

今後、小城中学校は留学生とつながりながら学習を進めていく。２学期以降の社会科では、古代日本の文化を紹介する動画を作成して、留学生からフィードバックをもらう授業を計画している。これから私たちの周りには、外国出身の方が増えていくだろう。「日本人」と「外国人」とが共に学び、共に暮らしていく共生社会を見据えて、教室から「社会へ開かれた学び」をめざしていきたい。

～質疑応答～

[Q1] 近くに工場があって外国の人もいる。広い視野が獲得できる。困ったことは？

[A1] 九州大会があって、より背中を押していただいた。西九州大学からバスで来てもらっていた。時間割など学校全体で協力をしていただいた。

[Q2] LP の意義、他の可能性、チャンスとして近くに留学生がいる、パートナーだからお互いに得る物がある？深まったものがあれば。予想でもいい。

[A2] 交流授業の中でベトナムの文字の話が出ていた。日本は耳が聞こえない人たちが使える文字があるなど留学生も感心していた。熱い地域の学習でミャンマーからの留学生から服装などの質問に答えてくれた。LP について小城多久支部では、中学校をまたいで生徒同士の交流、世代が違う先生たちや親に聞く活動をしている。２年前同じ取り組み、校内の同じ教科の先生に発信した。文字のこと➔国語、英語の先生。天文学➔理科の先生。より高度なことを伝えてくれた。社会の内容でほかの強化の先生とのつながりが生まれた。

[Q3] これから外国人が増えてくるから、学んだことで交流することは大切。単発で終わってしまうと意味がないのかなと。今後、予定がありますか？

[A3] ２学期ではアジア州の学習で。日本の古代の説明動画を作って、留学生に送る。どんな感想が来るか分からないが、予定。文化発表会などでの交流を予定している。

～指導助言者より～

・生徒にとって学ぶ意義・目的が明確かつ具体的に示されているため、子ども達の意欲が高まる取り組みになっている。「誰に」「何を」伝えるのかなど重要なことが明確に示されている。生徒・留学生お互いにとって学びになるため、ぜひ継続して取り組んでほしい。

・単元を貫く問いについて、計画の構造が明確になっていて、単元の学習が進むにつれて「めあて」のレベルが段階的に上がっている。抽象的・概念的なもの➔政治体制・宗教とステップ踏みながら高まっていく。

・総合的な学習の時間も踏まえるなど、段階を踏んで丁寧にされている。歴史に関する説明➔広がって現在や社会を知る学習になっている。歴史を知ることが今を知ることにつながる学習を体現した授業である。

・全体としての気付き…キーワードとして「対話」と「共有」。過去との対話、生徒同士の対話を通して社会に開かれた学びになっている。過去を通して現在を知り、共有できている。気になった点…学習意欲が高まった生徒が 84.5%を高いと捉えるか。仮説の中でもう一つのねらいの表現力の向上について、どのような結果や成果があったのか。単元の指導と評価の基準などを教えていただけたらと思います。

歴史的分野研究発表

「よりよい社会を問い続ける生徒の育成」

～単元を見通した問いや郷土の歴史に直接触れるパフォーマンス課題設定の学習を通して～

長崎県新上五島町立上五島中学校　教諭　平田　貴裕

～主題設定の理由～

新上五島町教育研究会社会科部会では、「自ら社会に関わろうとする子どもを育む社会科学習のあり方」の研究テーマのもと、毎年、町内の史跡を巡りながらフィールドワークに取り組んできた。さらに、授業で生かすために、町の歴史研究家・町文化財保護課の職員等を講師に招き、説明を通して深く学習することにより、郷土の歴史を生かした授業作りに取り組んできた。

～研究の仮設～

単元をお見通した問を設定し、それらの解決に向けて知識・技能を高める課程において、個々の社会的事象の意味や意義に気づき・感じる力を育成できるだろう。さらに、郷土の史跡を用いたパフォーマンス課題に取り組むことを通して、社会的な見方・考え方を広げる力の育成につながるであろう。

～研究の実際～

６年連続で、生の資料や講話で授業を進めることを目的に、長崎歴史文化博物館との遠隔授業を続けてきた。講義は、江戸時代の長崎を中心としたオランダ・中国との貿易の様子、キリスト教の弾圧の様子を具体的に知る機会となっており、様々な資料に触れることができ、歴史学種への興味関心を高める有効な手立てとなっている。

～研究の成果と今後の課題～

生徒のレポートから、既存の理解や考えを更に広げ「新たに考え方を見直す機会ができた」、「言葉や石を繋げられるようにしていきたい」などの感想を持ち、郷土の正しい歴史観を学ぶことによって、「気づく・感じる」力を育成する機会となった。また、このことを踏まえて江戸時代を大観させる問い（振り返り）につなげたことで、学びを自分ごとに置き換えることができた生徒が増えた。

郷土の歴史を学ぶフィールドワークは永年継続していくことが望まれる。また、他の史跡も具体的な史実を基に単元を見通した課題やパフォーマンス課題の設定を増やしていくこと。単元を見通す問いの解決に向けて、見方・考え方を働かせるスキルが日々の授業の中で必要。特に、生きて働く「知識・技能」の習得、思考力・判断力・表現力等の育成、評価に生かし改善する力の育成が求められるため、問が適切であるか、学び方が適切であるかを教師自身で評価改善していく必要がある。

～質疑応答～

感想1：私が務める中学校から世界遺産が見える。１年生の総合学習で隠れキリシタン、捕鯨の歴史の学習をする。教科書には「平戸」という地名が６回ほどでてくる。自分たちのルーツ、「頑張って命とご先祖の知恵をつないでいるから"今"につながっているんだよ。」と子どもたちの自尊感情を高めている。

感想2：九州最北端の中学校。巌流島がみえる。港町がある。地元にある教材を使った授業。門司区では、開運の中心地だったところクローズアップして、郷土資料を使った授業をしている。

感想3：郷土の資料を使った授業をした方がいいんじゃないか。各地の資料を保存していこう。長崎本土からくる先生たちも使えるように残している。

～指導助言者より～

・ポイントは２番目の郷土の資料を使った単元を見通す問い。広げる力ってどんな力？社会的な見方考え方を自在に働かせることなのかと私の中で整理しているところ。

・実践に関して、郷土の魅力を社会科の授業にどう生かすか。そこで思い立ったのが、指導要領の A の項目の歴史との対話。（１）私たちと歴史。（２）身近な地域の歴史。そこのねらいを改めて確認すると、「身近な地域の歴史の特徴を多面的多角的に考察して表現すること。」をやっていきましょうとなっている。まさにねらいに沿った授業になっている。実際に取り上げる時に悩んだことで、例えば江戸時代の内容を学んだ後、特設で身近な地域を設けるのか。関連付けたつもりが、その時間だけ浮いているような手ごたえだった。ただ、GT（ゲスト・ティーチャー）を呼んだ方が良かったのかな。じゃあどうするかと思いついたのは、江戸時代と地域の歴史を結びつける。私たちの地域は、江戸時代どのような参勤交代のルートだったのか。どんな大名が支配していたのか、何藩だったのか。ということに触れながら生徒たちに問い・課題として示していくと、地域の魅力や歴史、興味関心を高めていけると思う。

・地域人材の有効な活用との対話を重視していけたら。人に限らず、生徒同士、資料。

・二つの項目にまたがる内容（地域の歴史と江戸時代）。本学習において身に付けさせたい力を明確にしておく必要がある。教師自身だけなく、生徒も。どのように単元の計画を進めて、単元を見通す問いの答えとして何が書けるようになってほしいのか明確に。

・地域の題材や強みを生かした教材、未知の事象の出会い、再発見は社会科の学習の醍醐味。これをどうプロデュースするのかが教師の指導によるところ。どのような教材・事象を出会わせるか。そこが授業作りの面白さ、単元構造の楽しさだったりする。

４　所感

公開授業では、生徒が自ら「単元を見通す問い」を設定するする場面があり、「見方・考え方」のアプローチの一つとして、疑問詞を活用されていた部分が基調提案と合致していると感じた。

沖縄県那覇市立上山中学校や長崎県新上五島町立上五島中学校の実践発表から、郷土（佐賀県）の歴史について整理しておく必要があると感じた。社会的な見方・考え方は「問い」と「教材」によって働くと指導助言でもあったように、佐賀県の歴史に関する教材を授業に取り入れることで見方・考え方を働かせるとともに、地元（佐賀県）を誇りに思える生徒の育成にもつながってくると考える。小城中の留学生との学習や新上五島町のフィールドワークの学習など数年続けている取り組みが多く、令和９年度の全国大会に向けて日頃の研究の積み重ねを各地区でも取り組むこと、続けることが今後必要だと思う。

第56回　九州中学校社会科教育研究大会（長崎大会）公民的分野報告

期　日　令和6年11月15日（金）
会　場　長崎大学教育学部附属中学校
文　責　公民的分野部長　鶴　勝己

1　公民的分野基調提案について

(1) 研究主題との関連

公民的分野の学習は,「私たちと現代社会」を導入として「現代社会の見方・考え方」の基礎となる枠組みを理解し,「私たちと政治」「私たちと経済」「私たちと国際社会」という構成になっている。その展開にあたっては,社会的事象の地理的及び歴史的な見方・考え方を踏まえ,「現代社会の見方・考え方」を働かせて現代の社会的事象の意味や意義,特色や相互の関連を社会生活と関連付けて多面的・多角的に考察させ,よりよい社会の構築に向けて,現代社会の諸課題の解決策を複数の立場や意見を踏まえて根拠に基づいて,主体的に考えさせることが大切である。

そのためには,適切な学習課題を設定し,その課題追究のための枠組みとなる多様な視点（概念）に着目させ,「現代社会の見方・考え方」を働かせながら,課題追究をしたり,解決策を構想したりする活動を展開していきたい。

(2) 公民的分野における「よりよい社会を問い続ける生徒」とは

社会的事象に関心をもち,現代社会の諸課題を自分事としてとらえ, 解決に向けて主体的に考えを深め,望ましい社会の在り方を選択・判断できる生徒

(3) 研究内容

○ 自ら課題を設定し,追究・探究する単元学習 ○ 単元を見通す問いについて,追究・探究する単元学習 ○ 社会科の見方・考え方を働かせ,追究・探究する単元学習

現代の社会的事象を直接の学習対象とする公民的分野では,「社会科の見方・考え方」＝「現代社会の見方・考え方」を働かせ,学習課題を,政治,法,経済など関わる多様な視点から捉え,課題解決のための選択・判断に資する概念や理論などと関連付けて追究・探究する場面を設定し,よりよい社会のあり方について考察できるように,授業をデザインし,展開していく。

授業をデザインし,展開していく上で特に意識したことが次の３つである。

①身近な題材や資料を出発点とする学習課題の設定

生徒にとって身近な「人」「データ（数学)」「現象」を題材する → 自分事として捉える

②「現代社会の見方・考え方」を働かせる土台となる知識,概念や理論の確実な習得

知識や概念,理論を身近な題材や資料と結びつける → 確実な理解・習得→「現代社会の見方考え方」を働かせる土台を確かなものに

③考えを深める話し合いを深める活動の充実

根拠を元に,互いに見方・考え方を交換する場の設定,別の視点からの問いかけ → 協同的な学びによって,主体的な解決策の構成へ

2　授業について

(1) 授業の概要

各自（班）で考えた「２０年後の時津町に必要な企業」について発表し，意見交換することで他者の考えも参考にしつつ，自分の考えをまとめることをねらいとする。生徒一人一人が未来の時津町を思い描き，考えを述べることから，課題を自分事として，捉える態度を養いたい。さらに全体での意見交換を通して，経済活動を多様な視点から考える力や自分の考えを具体的かつ論理的に説明する力を向上させたい。このような指導を継続することで，望ましい社会の在り方を主体的に考える姿勢を育てていく。

めあて

２０年後の時津町に必要な企業について発表し，暮らしを豊かにする企業について考えよう

本時の展開

１．前時の振り返り　２．学習課題の確認
３．自分たちが考えた企業の発表
①教育関係　②製造業・工業関係　③農業関係
④商業関係　⑤飲食業関係　⑥老人養護施設関係　の６班
企業を考える際に必要となる視点【消費者，労働者，持続可能性】
４．仲間が考えた企業の評価　５．振り返り

(2) 研究の実際

感想　パワーポイントなどを活用し，リアクションも大きくするなど，生徒の懸命に伝えたいという気持ちが伝わるプレゼンであった。ただし，それだけで終わってしまい，一般的な発表会のようなものであり，そこが残念であった。時間の関係もあると思うが，発表を受けた上での質疑応答などをしていくことで，授業の中身や生徒の思考力・判断力・表現力も向上していくと感じた。

(3) 質疑応答

・評価が難しかったのではないか。
　→ 授業前後の変容が分かるようにすればよかった。
・カリキュラムでの工夫はあったか。
　→ かなり急いで授業を進めた。実際，裁判の三権分立に関する箇所は，後日，行うことにしている。
・単元構成について，知識習得とパフォーマンス課題とにかけた時間はどれくらいか。
　→ 知識習得については５時間，パフォーマンス課題に関しては２時間。

(4) 指導助言者より

時間については欲張りすぎていたのではないか。また，株式会社などとの学びが薄かったと感じる。消費者・労働者・持続可能性を同列に並べることは難しかったと思う。質疑応答があったり，地域の方に聞いてみたりすることがあってもよかったかもしれない。

また，今回のような授業を年に何回行うことが理想であるだろうか。構想する授業の課題として，「活動あって学びなし」（活動主義）を起こさないことである。今回は，そこを起こさせないために行われた授業であり，知識と知識とをつなげることで，思考・判断・表現をさせることにつながり，その中で客観的（実証的）事実と主観的（解釈的）価値の両方がある授業ではなかったのかと思う。

3　実践発表について

(1) 実践の概要

民主主義の担い手に必要な資質・能力を育む社会科の探求 ～社会的な見方・考え方を働かせる「問い」を通して～ 発表者：熊本県熊本市立清水中学校　教諭　山下　大輝

令和４年度熊本大会での公開授業の実践発表詳細は令和４年度九州大会報告書にあります

（ⅰ）研究の視点　１．目標：何ができるようになるのか　　２．方法：どのように学ぶか
３．内容：何を学ぶか

（ⅱ）研究の実際

１．目標－単元設定の工夫－

第１次：課題を把握させる段階　　第２次：課題を追究させる段階

第３次：課題を解決させる段階

２．方法－生徒の実態や問いを活かす学習－

生徒の実態や予想から学習課題を設定することで，生徒が自分事として単元全体を見通すため，「問い」が生まれやすくなり，自分の消費と社会で起こる問題の関連に気づくことができていた。

３．内容－サーキュラーエコノミー型の社会の実現と３つの経済主体の関係性－

サーキュラーエコノミー型の社会の実現と３つの経済主体（家計・企業・政府）の関係性について学習させることで，様々な社会的な見方・考え方を働かせながら，消費者の一人として消費に関わる問題の解決に関わり，消費者が企業や政府を動かしてよりよい持続可能な社会の形成に主体的に参画しようとする態度の育成につながったと感じる。

社会について問い続ける力を育成する社会科学習のあり方 発表者：大分県日田市立南部中学校　教諭　中島　大介

（ⅰ）研究内容

１．問い続ける力を育成する学習過程の工夫　　２．生徒が関心を持ち続ける学習課題の設定

・ＯＰＰ（One pape portfolio）シート（振り返りシート）の活用

（ⅱ）実践

めあて【私たちが大人になっても住み続けたい日田市になるための政策を提案しよう！】

展開　１．本時のめあての確認　　２．本時の学習内容の確認

３．各自で考えた住み続けたい日田市にするために必要なことの説明（ロイロノートの活用）

（分野）【市民協働】【福祉】【産業振興】【生活基盤】【教育・文化】【環境】【その他】

４．３について，「効率」と「公正」などの視点から考察し，班の考えを整理する

５．本時のまとめ

成果　○　自分と異なる意見に出会ったり，自分の案に対する客観的な評価を得たりすることによって，最初に持った考え（まとめ①）が揺さぶられ，より深い思考へと導かれる。

○　思考の活性化によって深い思考がなされれば，より高次な理論に支えられた「まとめ②」が導き出される。

課題　●　「まとめ①」→「まとめ②」という学習過程（間に思考の活性化）がすべての単元において有効であるという検証はできていない。

●　「問い続ける力」が育つ道筋について，今後も研究を進めていかなければならない。

よりよい社会を問い続ける生徒の育成～生徒が起業構想する単元学習を通して～

発表者：長崎県諫早市立真城中学校　教諭　井田　将吾

（ⅰ）単元を見通す問い【企業は何のためにあるのだろう】

（ⅱ）起業構想シート・企業評価シート

起業構想シート

（　　）組（　　）番　氏名（　　　　　　　）

【1時間目】（教p136～139）

①何を生産しますか。

②従業員はどのくらい必要ですか。（労働力）

③起業するのに必要なものは何ですか。

	必要なもの	金額
(例)		円
1		円
2		円
3		円
4		円
5		円
6		円
7		円
8		円
	合計	円

【2・3時間目】（教p152～155）

①資本金をどうやって準備しますか。

②どうしたら資本金を集めることができますか。

【4時間目】（教p134～135）

作った商品はどうしますか。（流通の方法）

【5時間目】（教p148～149）

自社商品の価格はどのように決めますか。

【6時間目】（教p150～151）

同業他社（ライバル企業）との競争に勝つためにどうしますか。

【7時間目】（教p130～133）

顧客との間でトラブルを起こさないようにするためにどうしますか。

【8時間目】（教p142～145）

①どのような労働制度で雇いますか。（年功序列？成果主義？／労働条件）

②労働者が働きやすい職場にするために，どのような工夫をしますか。（福利厚生）

【9時間目】（教p140～141）

どのようにして，地域や社会に貢献していきますか。

②企業のセールスポイントは何ですか。

各時間の終わりに，起業構想シートに「どのような会社をつくりたいか」「資本金はどのように準備するか」など，その日に学習したことを踏まえながら記入した。さらに単元を見通す問いとした「企業は何のためにあるのだろう」を毎時間投げかけた

資料２　企業評価シート

【　　　　　　　】さんの企業評価シート　1＝工夫が必要　4＝良い

(1)商品(財・サービス)は売れそうか。	(2)企業は実現しそうか。
(3)働きやすい職場になりそうか。	(4)地域や社会、SDGsに貢献できそうか。

※出資金額は、すべての評価が終わってから入力します。

	名前	(1)	(2)	(3)	(4)	出資金額	(1)～(4)の評価を踏まえて、良かった点・改善点（出資する人の視点で書きましょう）
(例)	井田 将吾	4	2	3	3	100,000 円	(1)…たくさんの人が必要としているため、みんなの役に立つと思う (2)…従業員が多すぎると思う。最初は少ない人数からが良いと思う
1						円	
2						円	

（１）商品は売れそうか

（２）企業は実現しそうか

（３）働きやすい職場になりそうか

（４）地域や社会，ＳＤＧｓに貢献できそうか

の４つの観点で評価を行い，評価に応じて，出資金額を決めさせた

成果　○　起業構想をすることで，「市場の働きと経済」の学習を生徒の身近なものにすることができた。

課題　●　机上の空論になってしまった。

4　所感

基調提案において，「望ましい社会の在り方を選択・判断できる生徒」となっており，公民的分野においてもそのような生徒の育成に励む姿が見られた。研究授業では，研究内容にもあった，授業をデザインし，展開していく上で意識した３点のうち，③考えを深める話し合い活動の充実においても，研究授業の前段階までは十分になされていたと思う。ただ，実際に公開された授業は，一方的な発表会のようなものになってしまい，果たして，どこまで望ましい社会の在り方を選択・判断できる生徒の育成ができたのか疑問は残る。やはり，生徒同士の質疑応答や教室以外との交流があることで，より考え方や捉え方が深まり，本当の意味での望ましい社会の在り方を選択・判断できる生徒の育成につながっていくと感じた。

実践発表においては，ＯＰＰシートや企業構想シートなど，ワークシートの工夫が参考になった。１枚のワークシートで，その単元で学んだこと（学ぶこと），その単元での生徒のゴールの姿，その単元を通して生徒がどのように変容したことがわかりやすくなっているところは本県でも参考にしてよいと思った。

令和９年度には全国大会が佐賀で行われる。公民的分野に関しては，授業開始時期がどうしても６～７月からなるため，令和９年度はまとめの時期と考えていかなければならない。よって，来年度より授業実践の積み重ねを佐賀県全体で行ってきたい。そのためには，各地区において，パフォーマンス課題をまとめたものや生徒の認知過程やパフォーマンスを評価する判断規準を共有し，課題の把握と課題の修正を図る過程が分かるものの作成などもお願いしたい。

各支部研究経過及び実績報告

※今年度は、著作権等の面より、ワークシートや生徒の作品、写真を掲載しておりません。ご理解のほどよろしくお願いいたします。

※今年度は、分野ごとに整理して掲載しています。

〈佐賀市支部〉

支部長　福岡　浩彰（富士中）

1．研究主題（研究テーマ）

「社会に開かれた中学校社会科の学びをめざして」

～学びのＳＴＥＡＭ化・学びの個別最適化・新しい学習基盤の確立を通して～

2．主題設定の理由

佐賀市では「社会に開かれた中学校社会の学びをめざして～学びのＳＴＥＡＭ化・学びの個別最適化・新しい学習基盤の確立を通して～」を研究主題として、単元を貫く問いの設定、議論を取り入れること、教師の指導力向上や社会科の授業が教室内にとどまらず、社会と開かれたものとすることを研究の重点として取り組んでいる。また、その取り組みをデータベース化して、どの学校の教員もその活用ができるような手立てをとってきた。また、学習指導要領の趣旨に沿った学習評価となることを目標に、主体的・対話的で深い学びの視点からの学習過程を改善するために、指導と評価の一体化した単元と授業づくりを行っている。

学習指導要領のめざす「生きる力」を育成するには、今後も社会科教育において、社会科の授業をよりよい社会のあり方を考える場とし、社会問題をパフォーマンス課題として設定して学びを進める必要がある。また、学び方の裁量権や学びの評価について社会を構成する幅広い人からの評価にする必要がある。このようなねらいから今年度の研究主題を設定した。

3．研究内容

（１）各分野で研究授業及び授業研究会を実施する

（２）単元を貫く問い（パフォーマンス課題）、活動内容、評価、ラーニングパートナー（LP）関係の蓄積

（３）観点別の評価と評定の検証

4．研究の経過

（１）公民的分野の授業提案　　　　・・・１１月２０日　東与賀中学校　杠　一恵教諭

（２）歴史的分野の授業提案と研究協議・・・１１月２７日　鍋島中学校　　脇山和也教諭

（３）地理的分野の授業提案と研究協議・・・１２月　６日　城南中学校　　米倉直矢教諭

5．研究の成果と課題

各学校が単元を貫く問いの研究を深めて単元のまとまりを意識した授業作りに取り組み、各学校で単元の見通しや評価方法を生徒と共有する単元シートを活用している。教師が生徒に身につけさせたい資質・能力を念頭に置いて授業を進め、その成果は支部の自由研究作品の内容にもその成果が顕著に表れていた。

「学びのＳＴＥＡＭ化」については、単元のまとめとして、社会問題をパフォーマンス課題に設定する学校が多くなっており、そのパフォーマンス課題をどう実社会に向けてアウトプットしていくかが課題である。そのために表現活動になるように教師が学習のゴールの意識を高め、実践を積み重ねる必要がある。「学びの個別最適化」については、全国大会に向けて『学び合い』を軸として研究を深めている。全員が達成できる学習課題（めあて）を提示し、生徒自らが評価できるように評価基準を明確にしている。「学びの個別最適化」の課題は、授業研究会で授業した内容を佐賀市内の各学校で、先行事例を積極的に取り入れて挑戦する教師集団となるように支部内の連携を強化しなければならない。

佐賀市支部では、授業研究会で本年度より従来の指導案でなく、できるだけ「社会科学びのデザインシート」を活用して、研修を深めた。この「社会科学びのデザインシート」では、単元の問い、小単元のめあて、評価基準に視点を当てた研修が行うことができた。今後、研究を進めるにあたり、授業者の負担を軽減させるとともに授業研究にいつでも取り組むことができる環境を整える必要がある。

3年1組（29名）社会科（公民分野）授業参観デザインシート	
日時　11月20日（水）3校時	場所　3年1組教室　指導者　教諭　杠　一恵

1　単元名と単元計画

単元名	単元　第1章　市場経済　［全15時間］ 第1・2節　私たちの生活と経済　消費者と経済〔全6時間〕教科書p 107～126		
単元（6時間）を通した学習課題：10年後に一人暮らしをする場合、消費において大切にする基準を考えながら、シミュレートすることができる。			
第1・2節の時間配当		1時間ごとに全員が達成をめざす学習目標（めあて）	評価規準
1	p 107～114	経済活動における「分業の必要性」と「お金の役割」について説明することができる。	知① 思①
2	p 115～116	需要と供給の曲線のグラフの読み取りを理解し、入試問題を解くことができる。	知②
3	p 117～118	家計の支出の変化やクレジットカード払いの危険性を、資料をもとに説明することができる。	知①
4【本時】	p 119～120	同じ商品でも価格が違う理由を「流通」の経路をもとに自分の言葉で説明することができる。	知① 思①
5	p 121～124	消費者としてトラブルにあったときの対処法を、状況に応じて説明することができる。	思①
6	p 107～126	10年後に一人暮らしをする場合、消費において大切にする基準を考えながら、シミュレートすることができる。	思① 主①

2　評価規準

	本単元（6時間）の評価規準		
	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取組む態度
具体的な内容／単元末の評価	①身近な消費生活を中心に経済活動の意義について理解している。 ②市場経済の基本的な考え方について理解している。その際、市場における価格の決まり方や資源の配分について理解している。	①対立と合意、効率と公正、分業と交換、希少性などに着目して、個人や企業の経済活動における役割と責任について多面的・多角的に考察し、表現している。	①市場の働きと経済について、現代社会に見られる課題の解決を視野に主体的に社会に関わろうとしている。
	A・B・C	A・B・C	A・B・C

3　本時における『学び合い』のポイント

(1)　めあて、課題づくりについて

単元計画、振り返りシートに単元の学習内容と学習課題をまとめ、毎時間のめあてを明確にし、教師が説明する時間を短くする。また、「10年後に一人暮らしをする場合、消費において大切にする基準を考えながら、シミュレートすることができる。」という問いを設定することで社会に開かれた学びを意識した。

(2)　導入での語りについて

「今日のニュース」からスタートし、それを授業の語りにつなげていく。また、生徒が思考や対話をする時間の確保をするために語りの時間を短くするようにする。生徒に多くの裁量権（個別や協働）を与え、「集中することができる環境を自分で作る」ことを意識させ、生徒同士が主体的につながるよう促す。

(3)　『学び合い』協働の場面について

机間指導を行い、生徒のつぶやきや質問を学級全体で共有できるように教師の声掛けを工夫する。クラス全体で支援が必要な生徒の情報を視覚的（黒板にネームプレートを貼る）に共有しながら、協働の場面を活発にしていく。

さらに、全員達成に向けて授業後半の協働の場面を活発にさせるために、生徒たちにはめあての説明を3人以上（男女混合）とし、ファシリテートの視点ではめあての達成人数や残り時間を明確にしていく。

2年5組（40名）社会科（歴史的分野）学びのデザインシート	
日時 令和6年11月27日（水）5校時	場所 2年5組 教室 指導者 教諭 脇山 和也

1 単元名と本単元の評価基準

単元名	第5章 開国と近代の日本の歩み 1節 欧米における近代化の進展 2節 欧米の進出と日本の開国 ※『新しい社会 歴史』p150～166 東京書籍

本単元（時間）の評価規準（ルーブリック）			
	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
具体的な内容／単元末の評価	□欧米諸国が近代化（産業革命・市民革命）を経て，アジアやアフリカへ支配を進めた理由を理解している。 □開国による幕府や諸藩の動向，人々の生活への影響を理解している。	□欧米諸国の近代化やアジアやアフリカへ支配を進めた理由，開国による影響を説明できる。 □欧米諸国が近代化（産業革命・市民革命）を経て，アジアやアフリカへ支配を進めた背景をふまえ，日本の近代化に必要なことを考察し，まとめることができる。	□単元を貫く問いを通して，当時の欧米諸国や国内の動向について多面的・多角的に考察し，日本が近代化し，欧米諸国に対抗するために必要なことを，級友と意見交換を行い，考えを深めることができている。

2 単元計画

単元（全8時間）を通した学習課題：欧米諸国に対抗するために日本の近代化に必要なことは何だろう。			
時間配当		1時間ごとに全員が達成を目指す学習内容目標（めあて）	備考
1	1時間 P150～151 P158～159	イギリスでおこった政治の変化と産業革命による影響を説明できる。	
2	1時間 P152～153	フランスでおこった革命の影響を説明できる。	
3	1時間 P151 P156～157	アメリカとロシアがどのように発展したのか説明できる。	
4	1時間 P160～161	世界情勢の変化によって，日本がどのような影響を受けたか説明できる。	
5 ［本時］	1時間	欧米諸国に対抗するめ，日本の近代化に必要なことは何か，判断することができる。（1次判断）	
6	1時間 P162～163	開国したことが日本に与えた影響を説明できる。	
7	1時間 P164～165	どのようにして江戸時代が終わって明治時代になったのか説明できる。	
8	1時間	単元まとめ（2次判断）	

3 本時の学習展開(5/8時 本時)

	学習活動	教師の指導・支援	評価
導入	1 これまでの学習内容を振り返る。	○電子黒板を使って,これまで単元で学習してきた内容を確認していく。	
	2 めあてを確認し,本時の学習活動の見通しを持つ。	○本時のめあて「欧米諸国に対抗するため,日本の近代化に必要なことは何か,判断することができる。」を確認する。	
展開	3 「欧米諸国に対抗するため,日本の近代化に必要なこと」についてキーワードや単元のプリント,教科書等をもとに自分の考えをまとめる。	●事前にPCで行ったアンケートをもとに,整理したキーワードを確認する。 ●単元を貫く問いについて,意見をまとめるよう指示する。 ○書けていない生徒へ声掛けし,手掛かりとなる資料を説明したり,ヒントを与えたりする。 ○時間以内に意見文を作成することを意識させるよう適宜時間を知らせる。	・既習事項を教科書や資料集、単元のワークシートを確認しながら,活かすことができているか。 [観察(知理)] ・自分の考えをまとめようとしているか。[観察(主態)]
	4 自分の考えをもとに級友と意見交換を行い,自分の意見と比較しながら自らの考えを深める。	●まとめた意見をもとに,級友と交流し,意見交換するように指示する。 ○交流の際の対話の仕方について示す。 ○ファシリテーターとして,個と個をつなげるように,声掛けし促す。 ○最低2人以上交流で関わるように促す。	・積極的に『学び合い』を行っているか。 [観察(主態)] ・級友と意見交換を行い,めあてを追究することができているか。 [観察(主態)]
	5 意見交換をふまえ,意見を再構築させる。 A クラス(級友の考えをふまえ,意見をまとめることができている。) B クラス(自分の考えをまとめることができている。) C クラス(未記入。)	●意見交流した結果をもとに,自分の意見を再構築するように指示する。 ○書けていない生徒へ声掛けし,意見交流した内容からどのようにまとめていくか,ヒントを与える。	・「日本が欧米諸国に対抗するために必要なこと」をまとめることができたか。 [ワークシート(思判表)]
終末	6 学びの履歴を記入し,学んだことを自分の言葉でまとめる。	○本日の学習をふまえ,今後探求したいことを学びの履歴に自分の言葉でまとめさせる。 ○今後の予告をする。	

2年4組（35名）社会科（地理的分野）授業参観デザインシート	
日時　　12月6日（金）5校時	場所　2年4組教室　指導者　教諭　米倉　直矢

1　単元名と単元計画

単元名	単元　関東地方　[全3時間] 第3章第4節・第6節　『中学生の地理』　教科書P238～249　帝国書院	
単元（全3時間）を通した学習課題：関東地方の過密・過疎問題の解決策を提案することができる。		
時間配当		1時間ごとに全員が達成をめざす学習内容目標（めあて）
1	P238～239, 240～241,	全員が,「なぜ東京の建物の多くは縦に長くつくられているのか？」を説明することができる。
2［本時］	P242～243 244, 245	全員が, 東京大都市圏における過密問題とその解決策を提案することができる。
3	P246～247 248～249	全員が, 関東地方の山間部における人口減少と高齢化問題の解決策を提案することができる。

2　評価規準

	本単元（3時間）の評価規準		
具体的な内容／単元末の評価	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
	○さまざまな資料を活用し, 関東地方の人口の特色と変化を読み取り, そこにおける課題について理解している。 ○さまざまな産業の発達とその特色について理解している。	○関東地方における地域の広がりや地域内の結びつき, 人々の対応などに着目し, そこで生じる課題と関連付けて多面的・多角的に考察し、表現している。	○関東地方の都市問題や山間部の過疎化問題における対応策を資料から読み取り, 自分の言葉で説明できる。
	A・B・C	A・B・C	A・B・C

3　本時における『学び合い』のポイント

（1）導入での語りについて

① 首都、東京における人口や経済の一極集中とそこにおける課題についての確認を行う。(3分)

② 東京大都市圏の拡大とそこにおける課題について資料をもとに確認をし, めあての確認をする。(5分)

（2）かかわり方が苦手な生徒（個別）に対するファシリテーションの手立て

① MKは, 学び合いで集中力を欠きやすいため, 考える手がかりとなる資料に注目するよう声かけを行う。また, 学び合いが停滞している時に他の生徒へつなげる声かけを行う。

② KRは, 分からないことを声に出しやすいため, 適切な声かけを行い, 考える上での手助けをする。

（3）　上位層に対する学習の深まりを目指す手立て

① ワークシートに作成した説明文を見ずに, 答えを引き出すように説明することを全体に伝える。

（4）低位層に対する基礎的・基本的学習内容の定着のための手立て

① 個人学習の前にパワーポイントを使った前時の復習と本時の学習内容の確認を全体で行う。

② 黒板に掲示している解答例を参考にして考えてもよいことを伝える。

③ 本時の基礎的な内容の復習を全体で行う。

（5）全員達成にむけたまとめの語り

①　学習における基本的な問題と対策に触れ, 基本的語句や内容を定着させる。

② 『学び合い』活動において積極的に仲間を助けようとする姿勢がみえた生徒を紹介する。

鳥栖・基山地区

令和6年12月24日（水）

1．研究テーマ

社会に開かれた中学社会科の学びを目指して
～LP（ラーニングパートナー）を活用した表現活動と学習基盤の確立～

2．主題設定の理由

昨年度から鳥栖地区では、3年間にわたって地理的分野の研究を行う内の3年目になった。そのため、大枠のテーマとしては県のテーマである「社会に開かれた中学校 社会科の学びをめざして」を踏襲し、サブテーマに示している3つの柱を年度ごとの 重点目標として設定することにした。今年度は、ラーニングパートナー（以下LP）の活用に焦点を当て生徒にとって、教室で授業を受けるだけでなく、教室の枠を超えたパフォーマンス課題の設定に取り組む。その中で、保護者や他教科の教員といったLPやタブレット型端末などの教育機器を活用し、課題に対して自らの意見を構築し発表する表現活動を通して、自ら進んで課題解決に取り組もうとする学びに向かう姿勢を身に付けさせたい。また、こうした実践を各学校で積み重ねていき、地区内で共有することを通して、次年度以降の研究につなげていきたい。

3，研究の経過

6月6日（木）　第1回 地区社会科研修会

【内容】研究テーマの決定　・公開授業実施校の決定：鳥栖西中学校

8月26日（月）　第2回 地区社会科研修会

【内容】支部長・理事研修会報告・公開授業の検討
公開授業 鳥栖西中学校　（11 月 21 日）

11月21日（木）　令和6年度　鳥栖地区社会科公開授業

【内容】公開授業参観・授業研究会・各校の取組状況

今後の予定：3月頃に第3回 地区社会科研修会実施

4，研究の成果と課題

鳥栖西中学校では「しらげタイム」という生徒間で交流する活動を行っている。公開授業において、生徒達は緊張した表情をみせることなく、スムーズな話し合い活動、表現活動ができた。授業展開では３～４人の班を作り、班員の持ち寄った企画書を聞きながらよりよい起業について考えることができた。既習知識を使うと共に、班員の意見を合併させたりよりよい社会にむけて考えさせたりすることで、地域活性化の取組を提案できるよう工夫がなされた。 その後に行われた研究会では、次のような意見が出された。

・生徒が安心して発表に取り組むことができていた。
・事業者・提案者として、生徒が発表すること。GoogleFoam を使った投票を通して、客観的に評価する活動ができていた。
・LP の活用にもまだ課題は残るが、保護者や他教科の先生と近畿地方について話し合うことで生徒達が当事者として考えることができた。
・LP の活用方法については、生徒が学びに向かうことができるように設定することが難しい。

これらの意見を踏まえ、「学習基盤の確立について」の協議では、調べ学習を踏まえた表現活動だけにならないようにしていく。具体的には知識理解のための活動である小テストの実施やタブレット端末を活用した復習、調べ学習の充実化。授業後の生徒へのフォローの手段方法を日々校内の社会科教員同士で話し、生徒のためによりよい学習基盤を構築していくことが求められる。

社会科学習指導案

令和６年11月21日第５校時
２年４組教室　43名
指導者　教諭　塩見　里奈

1　鳥栖・基山地区中学校社会科研究テーマ

「社会に開かれた中学校社会科の学びをめざして」
～ＬＰ（ラーニングパートナー）を活用した表現活動と学習基盤の確立～

2　単元名　地理的分野　第３部第３章第３節　近畿地方

3　単元の目標

近畿地方の特色をＰＲする活動や環境保全に向けた取り組みについて説明する活動を通して、近畿地方の地域的特色を大観し理解するとととともに、近畿地方の課題について多面的・多角的に考察し、持続可能な地域社会の構築の在り方について表現する。

4　単元について

（１）教材観

近畿地方には、歴史的な碁盤目状の町並みや多くの文化財が点在する。テレビなどで観光地として取り上げられるため、イメージしやすいと考える。また、歴史の授業で学習する文化財も多く、親しみやすい。

現在の近畿地方の景観は、都市化の波に逆らいながら保存、継承された結果である。阪神淡路大震災の被害を受けた地域では、歴史的町並みは破壊され、復興に伴い都市の拡大、近代化が進められていった。

近畿地方における古都の保存継承の歴史と都市の発展は、相反する点も多い。これらに注目することで、近畿地方に住む人々の努力や歴史的背景を学び、観光都市の将来像を想像する。

（２）生徒観

本学級は、学習に対する生徒一人ひとりの意欲が高く、話し合い活動も活発にすることができる。しかし、既習事項が定着していないことが課題として挙げられる。また、授業中に教師の指示がすぐに通らないことや、学習活動への取り組みに時間がかかること等、学級全体での一斉の活動に支障をきたす課題も見られる。

10月実施の実力テストの結果は、校内平均27.9に対し本学級の平均は29.4であった。大問別得点率に着目すると、「地形・気候・人口」は比較的得点率が高いが、「資源・産業・結びつき」「日本の地域的特色」は得点率が低い傾向にある。既習事項と結びつけて、因果関係について深く思考することができていないのではないかと考えられる。

（３）指導観

本学級では、プリントなどの個別学習に取り組ませる時間を設けた後に、班活動を設定する。また、学級全体への一斉指導の工夫が必要である。一つの活動を簡単なルールのもとで短めに展開することや、ＱＵ検査の結果で承認得点の低い生徒たちが活躍したり認められたりする場面を意識して設定することが必要である。さらに、班活動の手順をわかりやすくするために、本校の課外活動で行っており、生徒に馴染みのある「しらげタイム・しらげトーク」の手法も取り入れる。このような指導方法を取り入れ、学習基盤を確立させたい。

学習内容については、地形や気候、人口の観点と産業の特色の因果関係について理解させる必要がある。既習事項や生徒がイメージしやすい近畿地方の観光資源に関する内容をベースに、学習の連続性を実感させながら本単元の学習内容を理解させたい。

さらに、研究テーマの主題「社会に開かれた中学社会科の学びをめざして」にもあるように、生徒たちにはグローバル化やＡＩの発達をはじめ、日々急速に変化する現代社会を生き抜くための力が求められている。そのために、学びの場を学校から地域社会へと広げ、社会で活躍するための資質能力を身に付けさせたい。今回はそのファーストステップとして、生徒が個人で考えた近畿地方を活性化させる事業案を、級友に加えてＬＰ（本単元では保護者や教師を指す）から助言をもらう。学びを社会と共有することで、教科を越えた広い視野で思考を深めさせたい。

5　単元の評価規準と単元計画

（１）単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
・近畿地方について、その地域的特色や地域の課題を理解している。	・自然環境や歴史的景観の保全に着目しながら、そこに住む人々の生活や産業の変化などとの関係について、多面的・多角的に表現している。	・近畿地方について、よりよい社会の実現を視野に、そこで見られる課題を主体的に追究しようとしている。

（２）単元計画

1．近畿地方の自然環境　・・・１時間
2．琵琶湖の水が支える京阪神大都市圏　・・・１時間
3．阪神工業地帯と環境問題への取り組み・・・１時間
4．古都京都・奈良と歴史的景観の保全　・・・１時間
5．環境に配慮した林業と漁業　・・・１時間
6．もし修学旅行先が近畿地方だったら　・・・１時間
7．単元テスト　・・・１時間
8．単元のまとめ　・・・２時間（本時９／９）

6　本時の授業

（1）目標

近畿地方を発展させる事業について話し合う活動を通して、近畿地方の強みや課題に着目し、経済発展と環境保全の双方の視点から多面的・多角的に考えることを通して、持続可能な地域社会の構築の在り方について表現することができる。【　思考・判断・表現　】

（2）展開

過程	学習活動と内容	形態	教師の指導・支援
導入	1　前時の学習の振り返りをする。 2　めあて・ながれを確認する	斉	1　前時の振り返りを行い、本時の学習内容を確認する。 2　再確認できるようめあて・ながれを板書する。
	めあて：自然環境や歴史的景観の保全を行いながら、近畿地方の産業を発展させる事業を提案しよう！		
展開	3　意見交換し、近畿地方を発展させる事業案を班で１つつくり上げる。	斉 ↓ G	3-(1)　スライドで教師の見本を提示する。 3-(2)　班活動を円滑に進めるために、活動時間を予め伝える。また、司会者・計時・書記・発表者を指定する。 3-(3)　班活動を円滑に進めるために、しらげタイム・しらげトークと同じ流れで進めるよう指示を出

			す。 3-(4)　レーダーチャートを使い、視点①強み、視点②利益、視点③保全はすべて２以上になるような事業案を出すよう指示する。 3-(5)　ＬＰからのアドバイスを取り入れるよう促す。また、事業案を組み合わせたり、１つの事業案を膨らませたりするよう助言する。
	4　班から１つの事業案を提案し、全体で班の意見を共有する。	斉	4-(1)　全体で考えを深めるために、事業案を書いたミニホワイトボードを黒板に貼り、班で出た意見を共有する。 4-(2)　経済発展と環境保全が相互に及ぼす影響に気づかせる。

> ＜評価規準＞
> 近畿地方を発展させる事業について話し合う活動で、近畿地方の強みや課題に着目し、経済発展と環境保全の双方の視点から多面的・多角的に考えることを通して、持続可能な地域社会の構築の在り方について表現することができる。
> 【 思考・判断・表現 】（ ワークシート ）
> Ｂ：経済発展と環境保全の相互関係をとらえることができた生徒には、他の生徒にアドバイスさせる。
> Ｃ：経済発展と環境保全の相互関係をとらえることができない生徒には、机間支援の際に、提案した事業案を進めていくデメリットも考えるよう促す。

まとめ	5　自分の班以外で、近畿地方を活性化させる事業案として最もふさわしいと思う事業案に投票する。また、その班に投票した理由を簡単に答える。またふり返りを書く。	個 ↓ 斉	5-(1)　Formsを使って、集計する。 5-(2)　ＬＰや級友からの意見を取り入れて事業案を考える経験を通して気づいたことや考えたことをFormsに記入させる。 5-(3)　最も多く支持された事業案が選ばれた理由をいくつか読み上げ、経済発展と環境保全が相互に及ぼす影響に気づかせる。
	6　次時の内容「中部地方」について知り、見通しをもつ。	斉	6　次時の内容を伝え、見通しをもたせる。

7　板書計画

めあて　自然環境や歴史的景観の保全を行いながら、近畿地方の産業を発展させる事業を提案しよう！

ながれ
1．班で１つの事業をつくりあげる。
2．発表
3．Forms で投票
4．ふり返り

視点
①強み
②利益
③保全

1	2	3	4	5
6	7	8	9	10

≪　唐津・東松浦支部　≫

研究員　野口　純一

1 研究主題（研究テーマ）

社会に開かれた中学校社会科の学び　～社会問題の対話的考察を通して～

2 主題設定の理由

学習指導要領に掲げられている「主体的・対話的で深い学び」に関して、平成２８年中央教育審議会答申で「ある事柄に関する知識の伝達だけに偏らず、学ぶことと社会とのつながりをよい意識した教育を行い、子供たちがそうした教育のプロセスを通じて、基礎的な知識・技能を習得するとともに、実社会や実生活の中でそれらを活用しながら課題を発見し、その解決に向けて主体的・協働的に探究し、学びの成果等を表現し、更に実践に生かしていけるようにすることが重要である」としている。また、これからの社会は「予測困難で不確実、複雑で曖昧」な時代が到来する。そのような時代を生きていく現在の子どもたちは、公民として社会の諸課題について自ら考え、表現することで社会へ参加していく力を身につけることが必要になる。

その「社会とのつながりをより意識した教育」やこれからの時代を生き抜く力を身につけることを実現するためには社会科の授業の中で次のようなことに取り組むべきであると考える。現実の社会で起こっている問題の理解と分析、問題に対して行われている政策に対する評価、政策の修正案の作成、別の政策を立案する、といったことである。そのための学びは、教室の中だけでしか問われず、教室の中だけで完結してしまうような閉じられた学習ではなく、「問いの内容」「人との繋がり」「学習成果の発信」は社会とつながり、社会に開かれた学習活動を創造していくべきである。

今年度の唐津地区社会科部会では、令和９年度の全国大会発表に向けて、これまで地歴公民の３分野に部会に分かれていた組織を地理的分野のみに一本化した。そこで地区の社会科教員全体として研究を進めることによって、研究主題に沿った実践を積み重ねていくこととした。

3 研究の内容

(1) 現実の社会問題を取り扱い、各単元でパフォーマンス課題を設定する。
(2) 単元シート（単元計画表）の作成・提示によって単元を通した学習を生徒に意識させる。
(3) ラーニング・パートナーの設定・活用

4 研究経過

(1) 4月19日　唐津地区教科等部会
(2) 7月9日　唐津地区社会科主任会…今年度の地区の研究主題・研究内容についての協議
(3) 9月12日　唐津地区社会科主任研修会…研究授業指導案検討会・意見交換
(4) 11月12日　唐津地区中社研研究授業（西唐津中学校　日巻教諭）
「新鳥栖駅～武雄温泉駅に新幹線を通すべきか」
(5) 2月中旬　唐津地区社会科主任会…今年度の研究の成果と課題、来年度の研究について

5 研究の成果と課題

(1) 研究授業（西唐津中学校日巻教諭実践）について

① 研究授業の内容

11月12日に唐津地区の研究授業として西唐津中学校第２学年にて日巻教諭が実践を行った。地理的分野における中国・四国地方の学習を交通や通信を中核として単元が構成されていた。本実践では、単元を貫く問いとし

て「新鳥栖駅～武雄温泉駅に新幹線を通すべきか」を設定し、生徒たちとともに考察を行った。授業者は、単元を貫く問いを考察するために、9つの資料を生徒が読み解きやすいようにまとめ、提示していた。それによって、問いの論点となる課題を生徒が理解しやすくなり、議論が活発に行われていた。生徒の意見からはインバウンドや子育て世代を視点とした考えや将来への見通し、費用面の負担、在来線の有効活用など課題を克服しようとする考えが多く出ていた。そして、それらの意見は、授業終末においてラーニング・パートナーの意見を聞くことでより深められるよう工夫されていた。

② 研究授業の成果

本実践で設定された単元を貫く問いは、佐賀県に住む市民として考える必要性のある問いであった。実際のところ、国と佐賀県や JR 九州、長崎県の意見は対立しており、互いの要求のすり合わせに難航している。当然、新幹線が通ることになれば、佐賀県への影響も大きくあり、生徒たちが生活する唐津市も観光面などで変化が生じるだろうと考えられる。本実践での問いを深く考察するためには、複数の立場に立って考えることが重要である。そのため、考察・議論の際に生徒の立つ立場を指定しなかったことで議論を活発にさせることができたと考えられる。

また、本実践ではラーニング・パートナーとして、授業実践校の校長（鳥栖市育ち、武雄市在住)、2学年主任（嬉野市在住）の2名を設定していた。本来、ラーニング・パートナーは問いを生徒と共に考察する必要性のある人材が適切であると考える。本実践によれば、2名の LP は新幹線開通の影響を大きく受ける地域に住む人物であるため、問いである社会的課題の当事者の1人として考えることができるだろう。ラーニング・パートナーの活用について本実践では、有効にその存在を活用し、対話的な学習を行うことができたと考える。

③ 研究授業の課題

本実践の課題としては、「社会に開かれた」という視点で改善の余地があると考えられる。本実践においては、実際の社会問題を授業の中に持ち込み、生徒と共に考察・議論を行うことができた。しかし、その議論は教室の中でのみ行われ、LP も校内の学校職員が設定されていたため、学習の成果としての生徒の考えは未だ学校内部に留まっている。これを社会に開かれたものへと高めるためには、いくつかの方策が考えられる。例えば、LP として学校外部の人材を設定することで、学校共同体と実社会の別の共同体との協働を図ることや生徒の考えを社会へ発信することである。そうすることによって、社会との結節点が生まれ、「社会に開かれた」社会科授業へと近づくのではないかと考える。来年度以降の地区での課題として取り組んでいきたい。

(2) パフォーマンス課題の設定について

今年度唐津地区の研究方針として、地区内の各学校でパフォーマンス課題を設定した授業の実践をお願いしていた。アンケート調査を行った結果、各学校の実践の程度に差はあるものの、「アフリカ州が持続可能な発展をするために私たちは何をすべきか」「日本国憲法第9条を変えるべきか」「社会保障費の増加に対応するため消費税を上げるべきか」など現実の社会問題を単元を貫く問いとして設定し実践を重ねてもらっている。来年度は、各学校で実践されたパフォーマンス課題を地区で共有し、課題の検討や議論の方法について研究を行いたい。

(3) 単元シート（単元計画表）の作成・提示について

パフォーマンス課題の設定と同様、単元シート（単元計画表）の作成・提示も地区の研究内容としてお願いをしていた。アンケート調査によると、多くの学校で作成・提示が行われていたことが分かった。来年度もこの実践を継続したい。しかし、パフォーマンス課題の評価基準の設定については今後の課題として残るため、来年度地区として研究を重ねていきたい。

第２学年２組　社会科学習指導案

生徒数　２３名
指導者　教諭　日巻　宏章

１　単元名　交通や通信を中核とした考察

２　単元について

○　単元観について

本単元は、交通網の発達による人々の結びつきの変化と、それに関連する産業や生活の変化を様々な視点から考察し、プラス面やマイナス面を捉えながら、交通・通信網を整備することの意義を考える単元である。また、交通網の発達によって生まれたプラス面の影響を人々がどのように発展させてきたのか、また、マイナス面の影響をどのように克服しようとしてきたのかに目を向けていく単元でもある。さらに、「正統的周辺参加」を学習の中核に置くと、最終的には、身近な地域に照らし合わせ、自分たちが住む地域の交通・通信網に着目することが大切になってくる。そして、より良くしていくためには、何が効果的かを考えていく活動の中で、多面的・多角的な考察や判断を発揮していくことが必要になる。

よって、本単元は、学習指導要領、地理的分野の目標「（２）地理に関わる事象の意味や意義、特色や相互の関連を、位置や分布、 場所、人間と自然環境との相互依存関係、空間的相互依存作用、地域などに着目して、多面的・多角的に考察したり、地理的な課題の解決に向けて公正に選択・判断したりする力、思考・判断したことを説明したり、それらを基に議論したりする力を養う」に迫ることができる単元である。

○　生徒観について

本学級の生徒は、前回の単元で「自然環境を中核とした考察」を学習した。そして、単元を貫く問いで「唐津市沖洋上風力発電誘致事業」について、環境保全、漁業、住民生活などの視点から考察した。この活動を通して、多面的・多角的に考察したり、課題の解決に向けて公正に判断したり、議論したりすることを経験した。

本単元では、単元を貫く問いである「新鳥栖駅～武雄温泉駅に新幹線を通すべきか」という問いを、学習で得た知識や様々な資料を活用しながら、考察する。

単元に入る前に、アンケートをとった結果、「九州新幹線西九州ルートでは、新鳥栖駅と武雄温泉駅のあいだが繋がっていないことを知っていますか」という質問に対して、「知っている」と答えたのは全体の１１％であった。このようなアンケートの結果から、生徒たちは「九州新幹線西九州ルート問題」にあまり関心をもたず、身近なものと捉えることができていないと考える。

したがって、本単元の学習を通して、交通網の整備が住民生活や経済、財政に大きな影響を与えることであり、交通網の整備事業は一人一人が自分なりの意見を持ち、多面的・多角的な視点をもって、整備事業に参画していくことが大切であるということに気づかせることが必要である。

○　指導観について

交通網を整備することによって生まれる影響のプラス面やマイナス面に気付き、それらを踏まえて、自分たちが生活する地域で起きている問題を考えさせ、地理的な課題の解決に向けて公正に選択・判断したりする力、思考・判断したことを説明したりする力を養いたいという思いから、「新鳥栖駅～武雄温泉駅に新幹線を通すべきか」という単元を貫く問いを設定した。

しかし、「九州新幹線西九州ルート問題」は混迷を極めている。フリーゲージトレイン開発の頓挫や並行在来線問題、佐賀県の財政負担など様々な問題が複雑に絡み合い、国・長崎県・ＪＲ九州と佐賀県の間で意見の相違が生じている。

加えて、国・長崎県・ＪＲ九州がフル規格での新幹線整備という態度を硬化する一方、佐賀県は、フリーゲージトレインの開発が頓挫した以上、新幹線を整備する必要はないという態度を崩さない。また、佐賀空港ルートや、有明沿岸道路ルートなど、ルート変更に関する新しい提案が佐賀県からなされるなど、最善解を導くための話し合いは難航している。

よって、中学生が考える問題としては難易度が高いと言える。しかし、問いの設定をシンプルにし、

選択肢を設定したり、資料を精選して充実させたり、ラーニングパートナーを招いたりすることで、中学生でも自分たちなりにこの問題を考察し、自分の意見を持つことが可能になると考えた。

まず、問いを「県内に新幹線を通すべきか考えよう」という形にし、選択肢を「通す」・「通さない」の二つにした。また、九州新幹線西九州ルートを整備することで生まれる影響の良い面や悪い面を、新聞記事やネット上の記事、教科書の記述から精選し、生徒たちに提示する。また、単元内で学習した中国・四国地方で本州四国連絡橋が与えた影響も事例資料として活用する。そうすることで、生徒たちが根拠づけて自分の意見を作ることができると予想している。

これまで「九州新幹線西九州ルート」を整備するための試行錯誤の中で、国やJR、佐賀県、そして県民、市民、コメンテイターから様々な案が登場してきた。そのうち、「フリーゲージトレインの開発」や「ミニ新幹線の導入」、「並行在来線の上下分離方式」、「佐賀県の建設費負担軽減」、「観光列車ふたつ星in九州の充実」など、この問題を解決するうえでキーポイントとなる案は、必要に応じて紹介していく。そして、佐賀県はどの案をもって国・JR・長崎県との妥協点を見出すかを考えることにつなげていきたい。その活動を通して、「効率と公正」、「持続可能」という視野に立って考察していく力も養っていきたい。

3　単元の目標

(1)　交通・通信網の整備によって生まれる影響を知る。【知識及び技能】

(2)　交通・通信網の整備に関わる地域の問題を考察する中で、多面的に考察する力を養う。【思考力、判断力、表現力】

(3)　地域の問題を考察し、議論する中で、将来の主権者としての自覚を芽生えさせる。【学びに向かう力、人間性等】

4　単元の評価規準

知識・理解	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
交通・通信網の整備によって生まれる影響を理解している。	交通・通信網の整備に関わる地域の問題を考察し、根拠に基づいて自分の意見をつくることができる。	意欲的に調べ、身につけた知識や資料を用いて共同的に学習している。

5　単元の指導計画（全7時間）

(1)　第一次　交通や通信を中核とした考察　～中国・四国地方を事例地域として～・・・4時間

(2)　第二次　九州新幹線西九州ルート問題の考察・意見作成・・・・・・・・・・2時間（2／2本時）

(3)　第3次　九州新幹線西九州ルート問題のそれぞれの意見共有・・・・・・・・・・・・1時間

6　本時の学習

(1)　目標

交通・通信網の整備に関わる地域の問題をグループのメンバーと共同して考察し、根拠に基づいて意見発表できる。

(2)　展開（□…評価　●…達成不十分な生徒への指導）

過程	学　習　活　動	形態	指導上の留意点
導入	1　本時のめあてを確認する	CW	○　話を聞く姿勢を整えさせる。
	めあて　九州新幹線西九州ルート問題に対する自分たちの考えを発表しよう。		
展開	2　前時を振り返る	CW	○　パワーポイントスライドを用いて、視覚的に振り返ることができるようにする。
	3　グループのメンバーと話し合い、グループで「通す」、「通さない」のどちらかを選び、選んだ理由を書く。	GW	○　良い面だけではなく、悪い面をどのように対処していくかも記述するよう伝える。
	4　意見発表する。	CW	○　話を聞く姿勢を整えさせ、参考になる意見をメモするよう伝える。
	5　ほかのグループの意見を踏まえたうえで、最終的な自分の意見を書く。	PW	【評価の観点】 B　資料から根拠づけて、自分の意見を書いている。 ●　友人の意見を参考にさせる。
終末	6　ラーニングパートナーの話を聞く。	CW	○　本校校長（鳥栖市育ちで、現在は武雄市在住）による話。 ○　２学年主任（嬉野市在住）
	まとめ 交通網を整備することで生まれる影響には良い面と悪い面がある。住民一人一人がしっかり考え、参画し、最善の決定をしていくことが大切である。		

≪神埼支部≫

支部長 原田 浩臣

1.研究主題

「社会に開かれた中学校社会科の学びをめざして」
～学びの STEAM 化と学びの個別最適化を柱として～

2.主題設定の理由

今後の予測困難な社会の変化に対応するためには、単なる知識の取得ではなく、さまざまな情報を収集し、それらの情報を多面的・多角的に考察し、それをさまざま形で表現していくことが必要不可欠である。こうした潮流を背景に、現行の学習指導要領(平成 29 年告示)では資質・能力を育成するという方向性が打ち出された。

これを受けて、神埼支部では、歴史的分野における、①パフォーマンス課題の設定、②生徒一人一人の個別最適化のあり方を研究の柱に据え、研究を行ってきた。また、昨年度に引き続き、県の社会科部会がすすめる「学びの STEAM 化」について模索している。生徒一人ひとりの学びの機会を保障し、さまざまな意見に触れさせることで、多面的・多角的に物事を考える態度を育成することに努めたい。

3.研究内容

(1)パフォーマンス課題の設定について(歴史的分野)
・どのようなパフォーマンス課題を設定するべきか
・パフォーマンス課題を設定しにくい歴史的分野をどうするべきか

(2)生徒一人ひとりの個別最適化について
・どのような手法を用い、一人ひとりの個別最適化された学習を保障するべきか

4.研究経過

第1回 社会科研究主任会(7月12日 千代田支所)
第2回 社会科研究主任会&授業検討会(12月19日 脊振中学校) ＊神埼地区 NIE 研究発表会も兼ねる

5.研究の成果と課題

成果

(1)パフォーマンス課題とその評価について
・設定方法やルーブリック評価について、教員間での情報共有ができた。

(2)学びの個別最適化について
・昨年同様、ベネッセのドリルパークや Kahoot!などのICTを有効にすることができた。
・学びの個別最適化に向けた授業形態や教師の役割、振り返りの方法についての情報共有ができた。

(3)その他
・今年度は神埼地区 NIE 研究発表会を行ったため、次年度の研究(公民的分野)、さらには全国大会に向けて NIE を取り入れた研究をしてはどうか、というアイデアにつながった。

課題

・地区の研究について、地区内のすべての社会科教員が共通認識を持つことができていない。よって次年度は全員に周知する場や機会を年度当初に設けたい。

<文責 神埼中学校 横尾 健斗>

第２学年社会科学習指導案

日　時：令和６年１２月１９日(木)５校時
場　所：２年生教室
授業者：教諭　古川　久美子

１　単元名　第５章　２節　欧米の進出と日本の開国

２　単元について

○教材観

本単元は、学習指導要領(５)のイ「開国とその影響、富国強兵・殖産興業政策、文明開化などを通して、新政府による改革の特色を考えさせ、明治維新によって近代国家の基礎が整えられて、人々の生活が大きく変化したことを理解させる。」ことをねらいとしている。特に開国とその影響については、欧米諸国のアジア進出と関連付けて考察し、幕府が対外政策を転換して開国したことと、その政治的及び社会的な影響を踏まえ、それが明治維新の動きを生み出したことに気付くことが重要であると考える。近代社会を成立させた欧米諸国のアジア進出により、日本は欧米諸国と不平等条約を結び開国へ影響を与えたこと、開国の影響で人々の生活が大きく変化したこと、尊王攘夷運動で国内での幕府への批判や明治新政府による新しい国づくりの思想の広がりなどを、江戸幕府の滅亡までの流れと関連づけて捉えられる単元である。

○生徒観

本学級の生徒は１２名と少人数であるが、社会的事象に関心を持ち、課題に熱心に取り組む姿勢が見られる。また、学び合い学習時には、積極的に教え合うことで主体的に学習に取り組んでいる。しかし、お互いに知識を伝達するだけの教え合いで終わっている場面や間違いを恐れて教師に答えを求める生徒も見られ、課題に対しての考えが深まっていない面も見られる。歴史的資料を読み取り考えをまとめたり、学習したことから自分の意見を記述したりすることが不得手な生徒も多い。本時の課題を主体的に追求し、他者の考えを取り入れ、自分の考えを深め表現できるようにしたい。

○指導観

・本単元の指導にあたっては、「単元を貫く問い：四人の人物の中で江戸幕府滅亡に大きな影響を与えた人物を探り、新聞記事を書こう」を設定する。アヘン戦争以降の江戸幕府から幕府滅亡までの歴史的事象の中で、「ペリー・井伊直弼・坂本龍馬・徳川慶喜」の四人の人物に焦点をあて、それぞれの人物が関わった歴史的事象やその影響を探求していく。その中で、江戸幕府滅亡に一番大きな影響を与えた人物を決定させることで、課題を主体的に取り組ませる。また、学び合い学習やグループでの話し合い活動を行うことで、他者の意見を取り入れた深い学びにつなげていく。

・神埼市のNIE研究を活用し、「単元を貫く問い」に対する自分の考えを新聞記事にまとめて提出させることで、自分の意見や考えを伝えようとする表現力や発信する活動を取り入れる。毎時間のワークシートでは、四人の人物を中心に構成し「５Ｗ１Ｈ」に沿って人物・庶民・幕府などの様々な立場に焦点をあて、インタビュー形式で歴史的事象を多面的・多角的に考察する活動を行う。

○研究主題との関連

本校の研究主題である「深い学びを促す、個に応じた学習指導の在り方～一人一人の学ぶ力を伸ばす指導の工夫～」に関わって、ワークシートで基本的な知識を習得する場面と、様々な資料に基づいて歴史的な見方・考え方を働かせて導く課題を設定する。その課題について、学び合い学習やグループでの話し合い活動を行うことで、自身の考えと他者の意見を取り入れた深い学びを促す授業となるよう支援する。

３　単元の目標

・アジア諸国の動きや開国とその影響などを基に、欧米諸国が近代社会を成立させてアジアへ進出したことや、人々の生活が大きく変化したことを理解する。【知識・技能】
・幕末の政治や社会の変化などに着目し事象を相互に関連づけるなどして、アジア諸国の動きや明治維新について近代の社会の変化を多面的・多角的に考察し表現する。【思考力・判断力・表現力】
・「単元を貫く問い」に対する予想を立て、四人の人物の中から江戸幕府滅亡に大きな影響を与えた人物を決定し、新聞記事形式で自分の考えを発表する。【主体的に学習に取り組む態度】

4　単元計画

時	学習活動	評価の視点 知	 思	 態	評価規準 ●学習改善に用いる評価　○評定に用いる評価
1	「単元を貫く問い：四人の人物の中で江戸幕府滅亡に大きな影響を与えた人物を探り、新聞記事を書こう」を考えよう。	●		●	●アヘン戦争から幕末までの年表を完成し、これからの学習の見通しを持つ。 ●四人の人物の中から江戸幕府滅亡に影響を与えた人物を予想し、自分なりの意見を表現することができる。
2	「欧米の侵略によって、中国とインドはどのように変化したかを説明できる」について、資料を活用して考察しワークシートに記入する。	●	●		●イギリスのアジア進出によって起こったアヘン戦争やインドの大反乱を理解している。 ●欧米諸国のアジア進出の理由や、アジア諸国がどのように変化したかを表現している。
3	「ペリー来航に関わる出来事とその影響を理解し、ペリーの影響度を探ろう」について、ペリーが来航した理由や影響について５Ｗ１Ｈを活用してインタビュー形式でワークシートに記入する。	●	●		●日本の開国のきっかけや、日米修好通商条約の内容を理解している。 ●ペリー来航の理由について５Ｗ１Ｈを活用して考察し、開国した理由や条約を結んだ外交関係について表現している。
4	「井伊直弼の政策、桜田門外の変、開国による日本社会への影響を取材し、国内の変化について説明できる。」について、教科書資料を活用しワークシートに記入する。	●	○		●尊王攘夷運動や桜田門外の変、開国後の貿易の様子を理解している。 ○開国による政治や経済の影響を、資料を活用して表現している。
5	「坂本龍馬と徳川慶喜にインタビューし、江戸幕府倒幕までの流れを説明できる」について、5W1Hを活用して二人の人物についてまとめ、資料を活用し倒幕までの流れをワークシートに記入する。	●	●		●薩長同盟や大政奉還など、江戸幕府滅亡までに起こった主な出来事を理解している。 ●長州藩や薩摩藩の動きや徳川慶喜の新政府への考えを、多面的に考察し表現している。
6 本時	「江戸幕府滅亡に大きな影響を与えた人物の新聞記事（あたま）を作成しよう。」について、見出し・リード記事・資料を判断・表現し、タブレットを使って新聞記事を作成する。		●	●	●江戸幕府滅亡に大きな影響を与えた人物についてのリード記事を作成し、取り上げる歴史的な事象について、適切な概要や見出しをつけることができた。 ●作成した新聞記事について他者と意見交換を行うことで自分の考えを深め、課題を主体的に追及しようとしている。
7	「江戸幕府滅亡に大きな影響を与えた人物について新聞記事を完成させよう。」について、記事の完成とその人物を選んだ理由を含む編集後記を作成する。		○	○	○新聞記事の中に、歴史的事象を多面的に考察した結果を表現している。 ○人物から選んだ理由について、主体的に自分の意見を表現し発信している。

5　評価規準

ア　知識・技能	イ　思考・判断・表現	ウ　主体的に学習に 取り組む態度
○アジア諸国の動きや開国とその影響などを基に、欧米諸国が近代社会を成立させてアジアへ進出したことや、人々の生活が大きく変化したことを理解することができる。 ○新聞のリード記事に、歴史的事象について５Ｗ１Ｈを活用した内容を説明している。	○幕末の政治や社会の変化などに着目し事象を相互に関連づけるなどして、アジア諸国の動きや明治維新について近代の社会の変化を多面的・多角的に考察し表現している。 ○新聞記事に、歴史的事象を関連づけて四人の人物から一人を決定した理由を説明している。	○「単元を貫く問い」に対する予想を立て、四人の人物の中から江戸幕府滅亡に大きな影響を与えた人物を決定し、新聞記事形式で自分の考えを発表している。 ○単元を通して身に着いた視点やこれからに生かしたいことを記入している。

単元を貫く問い「四人の人物の中で江戸幕府滅亡に大きな影響を与えた人物を探り、新聞記事を書こう」

6　本時の学習（6/7）

(1) 本時の目標

・江戸幕府滅亡に大きな影響を与えた人物の新聞記事（あたま）を作成しよう。

(2) 本時の評価規準

・江戸幕府滅亡に大きな影響を与えた人物についてのリード記事を作成し、取り上げる歴史的な事象について、適切な概要や見出しをつけることができる。　【思考・判断・表現】

・作成した新聞記事について他者と意見交換を行うことで自分の考えを深め、課題を主体的に追及しようとしている。　【主体的に取り組む態度】

（3）本時の展開

過程	学習活動	形態	指導上の留意点（○）と評価（●）
つかむ	1. 前時までの復習を行う。 2. 本時のめあてを確認する。	全体	○前時までの流れと、「単元を貫く問い」を把握している。
	めあて：江戸幕府滅亡に大きな影響を与えた人物の新聞記事（あたま）を作成しよう。		
	3. ランキングと、その人物を1位にした理由をクラス全体で共有する。		○四人の人物をランキングし、1位を選んだ理由を電子黒板で提示し学級全体で共有する。 四人の人物：　ペリー　井伊直弼　坂本龍馬　徳川慶喜
考える	4. ランキングで選んだ人物をもとに、新聞記事を作成しよう。 ・人物を選んだ理由（決め手）の中の歴史的事象から一面のあたまの記事を選ぶ。 ・リード記事は、5W1Hを使い、歴史的事象の原因・理由、経過、結果、影響について簡潔に書く。 ・見出しは10文字程度で考える。 ・新聞資料はどの場面を切り取るかをイラストや文章で表現する。	全体 個人	○タブレットを利用して新聞記事を作成する。 ○佐賀新聞社の多久島先生との授業を思い出せるよう、新聞記事の作り方を配付し説明する。 ○リード記事を決定できない生徒には、人物を決定した際の理由（決め手）から、メインとなる記事を選ばせるよう支援する。 ○記事づくりがうまくいかない生徒には、友だちの記事作成を参考にしたり相談したりするよう生徒同士をつなぐ。
深める	5. 作成した新聞記事について意見交換を行う。 ・生徒2名、参観している先生方1名以上に、自分の新聞記事を説明し、質問や意見、アドバイスを聞く。	全体	○意見交換前と後を比較できるようデータのコピーをさせ、訂正するワードを開かせておく。 ○お互いにアドバイスをもらい、リード記事や見出しを深めさせる。 ○意見交換の中で得た意見やアドバイスは、メモを取るか、PCでの修正に反映させる。
	●江戸幕府滅亡に大きな影響を与えた人物についてのリード記事を作成し、取り上げる歴史的な事象について、適切な概要や見出しをつけることができた。【思考・判断・表現】 A：リード記事に5W1Hを取り入れ、魅力的な見出しや資料を表現することができた。 C：リード記事に5W1Hを取り入れているかをチェックしアドバイスを行う。		

まとめる	6. 代表者は、新聞記事を全体の前で発表する。 ・新聞記事の紹介（見出し、リード記事、資料）と、アドバイスをもらって修正した箇所を発表する。 7. 次時で、新聞記事の「かた」「はら」「編集後記」を書くことを指示する。	全体	○電子黒板に作成した新聞記事を提示させながら発表させる。 ○見出しや記事の深まりがわかるよう、前後のデータを比較させる。 ○選んだ理由（決め手）の残りについて記事を作成し、新聞を完成させることを伝える。 ○佐賀新聞社の「維新新聞」を紹介し、新聞記事を完成させることを伝える。 ○佐賀新聞の NIE 授業の成果をアウトプットする作業であることを伝える。

授業研究会資料

○本時の授業に至るまで

・課題に対しての考えが深まっていない面や歴史的資料を読み取り考えをまとめたり、学習したことから自分の意見を記述したりすることが不得手な生徒も多い。

・「単元を貫く問い：四人の人物の中で江戸幕府滅亡に大きな影響を与えた人物を探り、新聞記事を書こう」を設定し、課題を主体的に取り組ませる。

・毎時間のワークシートでは、四人の人物を中心に構成し「５Ｗ１Ｈ」に沿って人物・庶民・幕府などの様々な立場に焦点をあて、インタビュー形式で歴史的事象を多面的・多角的に考察する活動を行う。

○本時について

・「江戸幕府滅亡に大きな影響を与えた人物の新聞記事（あたま）を作成しよう。」について、見出し・リード記事・資料を判断・表現し、タブレットを使って新聞記事を作成する。

《 小城多久支部 》

支部長　藤田　浩巳（小中一貫校芦刈観瀾校）

1　研究主題

「　社会に開かれた学びを行う社会科授業づくり　」

2　主題設定の理由

県中社研の研究主題である「社会に開かれた中学校社会科の学びをめざして」を受けて、小城・多久支部では、一昨年度より３年間にわたって歴史的分野の学習に関する研究を行ってきた。研究の具体的な内容としては、現実社会の社会問題等を取り入れたパフォーマンス課題づくり、パフォーマンス課題解決に向けて生徒に裁量のある学習活動、テキスト、自分、他者等との対話のある学習活動、教室から社会へ拡張する市民や市民社会との協働的な学びの機会の創出があげられる。これらを意識した授業実践を積み重ねていくことで、現行の学習指導要領にある「主体的・対話的で深い学び」や社会科の目標である「公民的資質の基礎を養う」ことにせまるものであると考えた。

また、今年度においては、九州中社研研究大会（長崎大会）の研究発表や、県中社研研究大会（小城・多久大会）の開催にむけて、指導案検討等の研修の機会を例年よりも多く設け、歴史的分野に限らず各分野の授業実践の充実を図って来た。

3　本年度の研究の実際

・第１回研修会（　5月14日　）　～ 県中社研研究主題についての研修及びその後の活動の確認

・第２回研修会（　7月 4日　）　・第３回研修会（　8月 7日　）　・第４回研修会（　8月26日　）

・第５回研修会（ 地理的分野　9月13日、歴史的分野　9月 9日、公民的分野　9月 9日 ）

・第６回研修会（ 10月 1日 ）　～各校の研究の経過報告及び学習指導案検討等（第2～6回研修会）

・県中社研研究大会（ 小城・多久大会・10月31日 ）

～ 地理的分野 公開授業　　芦刈観瀾校　　鶴　康徳 教諭

～ 歴史的分野 公開授業　　東原庠舎中央校　　久冨　和範 教諭

～ 公民的分野 公開授業　　三日月中学校　　丸田悠翔 教諭

・九州中社研研究大会（ 長崎大会・11月15日 ）

～ 研究発表「自他を認め合い、共に学び続ける生徒の育成」　小城中学校　江上 哲平 教諭

4　成果と課題

一昨年度より進めてきた研究を継続し、支部内の共通理解・共通実践につなげることができた。特に、パフォーマンス課題の設定の工夫や、ラーニングパートナーや他者との意見交流の有効性等を共有することができた。また、県大会が開催されたことで地理的分野や公民的分野の授業研究にも取り組むことができた。

来年度より支部内においては地理的分野の学習を中心に、更に活発な実践交流と議論が求められる。実践のデータベース化や、ラーニングパートナーの活用を含む「学びのネットワーク」の充実へとつなげていきたい。

《 文責　櫟村　哲也（牛津中学校）》

◇ 九州中社研研究大会（ 長崎大会・11 月 15 日 ）研究発表原稿より一部を引用

単元名	1節　「世界の古代文明と宗教のおこり」　全８時間
単元を貫く問い（パフォーマンス課題）	なぜ私たちは現代のような便利で豊かな生活を送っているのだろうか。人類の出現から古代文明までを学び、最も大きな要因（人類の発明）は何だったのか、考えよう！

第７時　留学生に説明しよう！　授業展開　（７月１０日実施）

	学習内容及び学習活動	形	教師の指導・支援	当日の様子
導入	1. 18名の留学生が入室し、挨拶 2. アイスブレイク(部屋の四隅)	全	・アイスブレイクでは、楽しみながら他者への関心を高める質問を行う。	写　真
	「　なぜ私たちは現代のような便利で豊かな生活を送っているのだろうか。人類の出現から古代文明までを学び、最も大きな要因（人類の発明）は何だったのか！？ 留学生に説明しよう！　」			
展開	3. グルーピング。4人グループの中に、留学生を2人ずつ配置する。 4. 留学生に対して生徒が一人1分程度の説明をし、留学生は聞いた説明に対して質問したり、自分の考えを伝えたり、自由に交流する。 5. 時間になったら、留学生が隣の班へ移動し、メンバーを変えて交流する。(1グループ約8分、合計3回の交流活動。)	G	・生徒には、①説明、②進行、③計時、④盛り上げの役割を意識させる。 ・留学生には、わからない言葉があれば質問したり、生徒の声が小さければ聞き返したりするよう促す。 ・生徒には、相手に伝わるように話すスピードや言葉を考え、資料を提示しながら自分の考えを伝えるように促す。 ・机間移動しながら、活動を見取り、グループチェンジの時に気づきを伝える。	写　真 写　真
まとめ	6. 生徒と留学生の双方から、授業の感想を発表する(発表を聴く)。	全	・本時の学習活動の良かった点(話の聞き方・話し方、協力、新たな気づき等)を価値づけ、今後の学習や生活につなげる。	写　真

留学生との交流を意識して学習を進めたことで、多くの子どもたちの学習意欲が高まった。生徒・留学生の双方が、互いに意見交流していく中で自分の考えとは違う多様な意見にふれ、価値観を広げ、歴史的・社会的事象への認識を深めた。

今後も、この交流を継続し、留学生とつながり続けながら学習を進めていく。２学期以降の社会科の学習では、歴史的分野のパフォーマンス課題として、古代日本の文化を紹介する動画を発信し、留学生からフィードバックをもらう授業を計画している。共に学び、共に働き、共に暮らしていく共生社会を見据えて、教室から「社会に開かれた学び」をめざしていきたい。

《 伊万里・西松浦支部 》

支部長　宮崎　武司（有田中）

1　研究主題（研究テーマ）

『　社会に開かれた中学校社会科の学び　』
～「見方・考え方」を働かせた個別最適な学びの実現を通して～

2　主題設定の理由

本支部では、令和３年度から令和５年度まで『社会に開かれた中学校社会科の学びをめざして』～ラーニング・パートナー（LP）との関わりを通して～を研究主題として取り組んできた。その中で、当事者やその問題を解決する人とともに学びを深め、生徒の学びに対する主体性や意欲は高まり、LPとの学習前と学習後では生徒が考える意見にも変容が見られ、中学校社会科の求める資質・能力を育成につながったと考える。（令和５年度九州大会宮崎大会にて啓成中田雜教論発表）

今年度からは、県中社研のテーマを踏まえ、地区のテーマを『社会に開かれた中学校社会科の学び』～「見方・考え方」を働かせた個別最適な学びの実現を通して～と設定し、昨年までの公民的分野で積み上げた成果を活用し、歴史的分野で見方・考え方を繰り返し働かせながら、深い学びにつなげていきたいと考えた。

3　研究の内容

(1)　研究授業及び授業研究会を実施する。
(2)　『学び合い』など、個別最適な学びを実現する授業実践を行う。
(3)　単元の見通しや評価方法を生徒と共有する単元シートの作成

4　研究課程

(1)　伊万里・西松浦地区教育研究会社会科部会（　６月　５日　有田中　）年間計画、研究の構想
(2)　伊万里・西松浦地区教育研究会社会科部会（　７月　９日　有田中　）研究主題の決定、授業者の決定
(3)　伊万里・西松浦地区教育研究会社会科部会（１０月２４日　南波多郷学館）指導案検討
(4)　伊万里・西松浦地区教育研究会社会科部会（１１月２６日　南波多郷学館）研究授業　松永佑規教諭
(5)　伊万里・西松浦地区教育研究会社会科部会（　１月２２日　有田中　）振り返り、次年度の確認

5　研究の成果・課題

(1)　成果
①　生徒が自らの選択で学習を進め、自分なりの意見を持ち寄り、交流することで学びを深めていた。
②　研究授業・授業研究会を行ったことで、個別最適な学びに向けた授業形態や教師の役割、振り返り方法などについて意見交換ができ、

(2)　課題
①　生徒に単元の見通しをもたせるためと評価方法・評価規準等を生徒と共有するための単元シートを開発する。そして、単元シートを地区内で共有する。
②　社会科の「見方・考え方」を働かせる視点の持ち方・持たせ方等の教師の手立てについて理解を深める。
③　講師を招聘し、地区内社会科教員の指導法改善、及び指導技術の向上を図る。

《　文責　渕上　徳郎（啓成中）》

第８学年社会科学習指導案

日　時　令和６年11月26日（火）
場　所　８年教室　（生徒数27名）
指導者　教諭　　松永　佑規（Ｔ１）
大宅　武男（Ｔ２）

1　単元名　　欧米の進出と日本の開国

2　単元とその指導

本単元は，歴史的分野の内容（1）「近代の日本と世界」の中項目（ア）「欧米における近代社会の成立とアジア諸国の動き」を指導内容として構成したものである。本単元では、欧米諸国における産業革命や市民革命、アジア諸国の動きなどを基に、工業化の進展と政治や社会の変化などに着目し、近代の社会の変化に関する課題を追及したり解決したりする活動を通して、欧米とアジアとの関係が変化する中、なぜ江戸幕府は滅亡したのかを理解する単元である。

本学級の生徒は，男女ともに仲が良く、普段の授業でも男女関係なく発表や活動ができている。地理・歴史それぞれに関する興味・関心には個人差があるものの，出された課題や問題には一生懸命理解しようという姿勢が見られる。しかし、グループでの活動になると中には級友に任せきりでなかなか活動が手につかない生徒も見られるため、自らが課題を追及して、解決する場を設けることが必要とかんがえる。

指導に当たっては、個別最適な学びのある授業を展開するために「ジグソー法」を取り入れ、複数の資料（教科書、学習用ＰＣ、Ｔ１、Ｔ２との会話等）から適切な情報を読み取らせたうえで、課題を追究したり解決したりする活動を行い、それぞれの課題に対する答えを、自分の言葉でまとめ、その答えをクラス全体で発表、共有することで「思考力・判断力・表現力」の育成を図りたい。

3　単元の目標

(1)　アジア諸国の動きなどを基に、欧米諸国が近代社会を成立させてアジアへ進出したこと、開国とその影響などを基に、人々の生活が大きく変化したことを理解する。【知識・技能】

(2)　工業化の進展と政治や社会の変化などに着目して、事象を相互に関連付けるなどして、アジア諸国の動き、明治維新について、近代の社会の変化の様子を多面的・多角的に考察し、表現する。【思考・判断・表現】

(3)　アジア諸国の動き、明治維新について、そこで見られる課題を主体的に追究、解決しようとする態度を養う。【主体的に学習に取り組む態度】

4　単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
アジア諸国の動きなどを基に、欧米諸国が近代社会を成立させてアジアへ進出したこと、開国とその影響などを基に、人々の生活が大きく変化したことを理解している。	工業化の進展と政治や社会の変化などに着目して、事象を相互に関連付けるなどして、アジア諸国の動き、明治維新について、近代の社会の変化の様子を多面的・多角的に考察し、表現している。	アジア諸国の動き、明治維新について、そこで見られる課題を主体的に追究、解決しようとしている。

5　指導計画（5時間扱い）

第1次　欧米のアジア侵略・・・1時間　　第2次　開国と不平等条約・・・1時間

第3次　開国後の政治と経済・・1時間　　第4次　江戸幕府の滅亡・・・・1時間

第5次　なぜ江戸幕府は滅亡したのか・・・1時間（本時）

6　本時

(1)　目標

開国による日本への政治的及び社会的な影響や江戸幕府の政策の変化について理解するとともに、江戸幕府が滅亡した原因を複数の視点や立場から自分の考えも合わせて説明できる。

(2)　展開

段階	学習活動	指導内容（○）　指導上の留意点（・）　評価（◆）	T2の動き
導入	1．前時までの学習を復習する。	・江戸幕府が滅亡したことに着目させる。 ・生徒の意見を拾い、めあてにつなげる。	
展開	めあて　約260年も続いた江戸幕府は、なぜ開国からわずか数十年で滅亡したのか説明しよう。		
	2．幕府・藩・民衆のそれぞれの動きや立場で考えさせながらワークシートにまとめる。（個）	・教科書やこれまでのワークシートや授業で使用したＰＰを学習用ＰＣに入れ、様々な資料を配布しておく。 ・配布された資料を適切に読み取り、個人または協力してまとめられるように配慮する。 ・自分で書いた出来事の言葉を使って、なぜ幕府が滅亡したのか文章でまとめさせる。	・資料読み取りができていない生徒への支援を行う。 ・良い意見を取り上げ、共有につなげる。
	3．グループで意見交換。（協）グループごとにホワイトボードに記入して学級で考えを共有する。	◆江戸幕府がなぜ滅亡したのかについて、班やクラスの意見を参考にして、自分の意見をまとめることができているか。【思考・判断・表現】（評価：ワークシートへの記述内容）	
	4．個人で考えたことを再考して説明する。（個）		
	まとめの例　開国の影響が1番大きいと思う。理由は、開国したことでこれまでの鎖国体制がくずれ、欧米諸国との関わり増えたことで、長州藩や薩摩藩を中心に倒幕運動が広まっていったから。		
まとめ	5．振り返りを書く。	・幕府が滅亡し、新しい政治が始まることを考えさせて、次の明治維新につなげる。	

令和６年度　鹿島・嬉野・藤津地区中社研　研究のまとめ

≪鹿島・嬉野・藤津支部≫

支部長　土岐　洋二（吉田中）

１　研究主題（研究のテーマ）

『社会に開かれた社会科学習の創造 ～パフォーマンス課題を生かした学びを社会に開く学習～』

２ 主題設定の理由

昨年度から地区のテーマを県中社研の研究テーマに則り、「社会に開かれた社会科学習の創造～パフォーマンス課題を生かした学びを社会に開く学習～」としている。これまでの外部アクターに限らず、学校の教員や保護者、異学年の生徒など様々な人物を協働できるLPととらえ、授業での学習を教室に留まらせることなく、社会へ発信していくことを目指す。また、現実社会で起こっている実際の問題を、パフォーマンス課題として授業に取り入れることで、生徒は学習内容により切実感をもち、課題解決に向き合うことができると考える。単元末には、学習課題に対する自分なりの納得解を意見文やレポートにまとめる活動を取り入れ、社会へ発信することを意識させたい。

３ 研究計画

各学校で研究主題である、パフォーマンス課題を設定した授業展開を行う。１１月に支部の代表者による研究授業と授業研究会を行い、研究テーマにせまる授業の進め方や課題について話し合う。

４　研修過程

9月　6日	鹿島・嬉野・藤津支部教育研究会社会科部会	藤津地区教育会館
11月 29日	鹿島・嬉野・藤津支部教育研究会　中学校社会科部会研修会	鹿島市立東部中学校

５　実践内容

各学校で以下のようなパフォーマンス課題を設定し実践を行った。（主な実践例）

公民	人権と日本国憲法	憲法９条は改正すべきか否か？
	これからの人権保障	防犯カメラを前にプライバシーの権利をどこまで主張できるだろう？
	国の政治の仕組み	自分が有権者なら、どの政党に一票を投じるか？
	地方自治と私たち	太良町の財政について見直してほしいところを意見文にしよう！

６　成果と課題

パフォーマンス課題を設定した単元計画・授業展開を行ったことで、生徒は学習課題をより身近なものとしてとらえ、主体的に授業に取り組むことができた。単元末に意見文を作成した際には、多種多様な考えが出てきて、生徒はその意見をもとに協働することで多面的・多角的な視点から自分の考えを練り直し、深めていた。また、授業中に発言の機会が少ない生徒の中にも、しっかりとした自分の考えをもち、根拠に基づいて意見文を書くことができる生徒が存在することに教師側が気づくことにもつながった。

課題として挙げられたのは、個別最適な学びの在り方についてであった。ICTを活用した取り組みなども見られたが、クラスや生徒の実態によっては、学びの裁量権をすべて生徒に与えるのではなく、ペア活動、班活動、協働する相手に条件を付けることも必要ではないかという意見が出た。生徒の偏った交友関係だけで協働を行っても、それ以外の意見に触れる機会が少なくなり、考が深まっていない様子も見られた。本年の成果と課題について地区内の社会科教員で共有し、来年度の実践につなげていきたい。

〈文責　多良中学校　中島　浩太郎〉

第２学年社会科（地理的分野）学習指導案

日　　時　令和６年１１月２９日（金）５校時
場　　所　２年１組　教室
指 導 者　教諭　陣内　将希

1　単元名
「中部地方」（社会科　中学生の地理『帝国書院』）

2　単元について
(1)　教材観
本単元は、中学校学習指導要領の〔地理的分野〕の内容Ｃ「日本の様々な地域」の（３）「日本の諸地域」に基づいて設定している。本単元では産業を中核とした考察の仕方を通して、中部地方の地域的特色や地域的課題を地域の広がりや地域内の結び付きなどに着目して多面的・多角的に考察し、理解させることになっている。中部地方は、東海・中央高地・北陸と３つの地域区分に分けることができる。それぞれの気候と地形の特徴の違いから、行われてきた農業や工業の特徴がそれぞれ異なっている。また、交通網の発達により、それぞれの地域で産業を発展させてきている。様々な地域的特色が見られる中部地方では、そこでの自然環境や交通・通信と産業が深い関係をもっていることや、産業の振興と環境保全の両立などの持続可能な社会づくりが地域の課題になることについて多面的・多角的に考察させることができると考えている。産業を中核とした考察の仕方を基にして学習することは中部地方の地域的特色をおさえるのに適した教材である。

(2)　生徒観
本学級の生徒は31名で４月のアンケートによると、「社会科は好きですか？」という質問に対し、半数の生徒が「好き」、「少し好き」であった。また、「授業で友達と話し合う活動は好きですか？」という質問に対し、約90%の生徒が「好き」、「少し好き」であった。しかし、根拠に基づいて記述や発表できる生徒が少ないため、思考・判断・表現の能力を引き上げる必要がある。そのために、主張の根拠となる部分を表などにまとめたものを参考にして話し合いの活動を行うようにする。また、既習事項として、中部地方に日本アルプスが存在していること、近畿地方や中国・四国地方でも中部地方同様に気候によって３つに区分できることを学習している。これは、中部地方での自然環境の特徴や中部地方の地域区分へとつながるものである。

(3)　指導観
本単元の目標を達成するために、本単元のパフォーマンス課題を「中部地方の産業の魅力をCanvaで紹介しよう！」と設定する。そして、本単元を３つの視点から学習することができるように整理している。１つ目に自然環境の視点である。自然環境を気候と地形からどのような自然環境の特徴があるか、また、どのような課題が見られるかを考えさせたい。そして２つ目に農業の特徴の視点、３つ目に工業の特徴の視点から３つの地域で産業がどのように発展してきたかを考えさせたい。この３つの視点を学習する中で基本的な知識を身につけさせるとともに相互に関係し合っていることを理解させたい。また、単元のまとめでは、パフォーマンス課題に取り組ませる際に、評価規準の提示や、単元シートの見返しによってこれまで学習したことをふまえて表現させるようにしている。

3　単元の目標
・中部地域について、その地域的特色や地域の課題を理解する。【知識及び技能】
・産業を中核とした考察の仕方で取り上げた特色ある事象と、それに関する他の事象や、そこで生ずる課題を理解する。【知識及び技能】
・中部地方において、産業を中核となる事象の成立条件を、地域の広がりや地域内の結び付き、人々の対応などに着目して、他の事象やそこで生ずる課題と有機的に関連付けて多面的・多角的に考察し、表現する。【思考力，判断力，表現力等】
・中部地方について、よりよい社会の実現を視野にそこで見られる課題を主体的に追究、解決しようとする態度を養う。【学びに向かう力，人間性等】

4　単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
・中部地方について、その地域的特色や地域の課題を理解している。 ・産業を中核とした考察の仕方で取り上げた特色ある事象と、それに関する他の事象や、そこで生ずる課題を理解している。	・中部地方において、産業を中核となる事象の成立条件を、地域の広がりや地域内の結び付き、人々の対応などに着目して、他の事象やそこで生ずる課題と有機的に関連付けて多面的・多角的に考察し、表現している。	・中部地方について、よりよい社会の実現を視野にそこで見られる課題を主体的に追究、解決しようとしている。

5　指導と評価の計画（5／6時間）

次数	時数	学習内容	本時の目標	評価規準
1	1	単元の導入 パフォーマンス課題 ○中部地方の産業の魅力を Canva（キャンバ）で紹介しよう！ 中部地方の自然環境 めあて ○中部地方の３つの地域の自然環境の特徴と課題を（気候）と（地形）から考え、産業の発展にどのような影響を与えているか考えよう。	・中部地方が気候や地形の特色から東海・中央高地・北陸の３つの地域に区分されることを理解する。	・中部地方の自然環境の視点から地域的特色があることやそこで見られる課題を理解している。 【知】
	2	東海で発達するさまざまな産業 めあて ○東海の（農業）や漁業はどのように発展していったか（気候）と（地形）の視点で考えよう。	・東海の自然環境を生かした農業の発展を理解する。	・東海の自然環境と関連付けて農業を発展させたことを理解している。【知】
	3	中京工業地帯の発展と名古屋大都市圏 めあて ○東海の（産業）がどのように発展していったか考えよう。	・東海の工業の発展を理解する。	・東海の自然環境や農業の特徴と関連付けて工業を発展させたことを理解している。【知】
	4	内陸にある中央高地の産業の移り変わり めあて ○内陸の（産業）がどのように発展していったか考えよう。	・中央高地の自然環境を生かした、農業と工業の発展を理解し、中央高地の産業の魅力を表現する。 ・中央高地の産業がどのように発展したかを多面的に表現する。	・中央高地の農業の特徴と工業の特徴を理解している。【知】 ・中央高地の産業がどのように発展したかを交通網の発展や自然環境の特徴などから多面的に表現している。【思】
	5	雪を生かした北陸の産業 めあて ○なぜ、（北陸）は世界でも有数の豪雪地帯にもかかわらず、（産業）を発展させることができたのか理解し、北陸の産業の（魅力）を表現しよう。	・北陸の自然環境を生かした農業と工業の発展を理解し、北陸の産業の魅力を表現する。	・北陸の産業の魅力を自然環境、農業、工業と関連付けながら表現している。【思】
2	6	単元のまとめ パフォーマンス課題 ○中部地方の産業の魅力を Canva（キャンバ）で紹介しよう！	・中部地方の産業の魅力を自然環境の特徴、農業の特徴、工業の特徴と関連付けて表現する。 ・主体的に中部地方で見られる産業の特徴を学習したことをふまえて、自ら追究しようとする。	・中部地方の産業の魅力をこれまで学習したことをふまえて、産業の魅力を Canva に表現している。【思】 ・佐賀県では見られない中部地方の魅力を主体的に追究し、表現しようとしている。【主】

6　本時の学習

(1)　目標

・北陸の自然環境を生かした農業と工業の発展を理解し、北陸の産業の魅力を表現する。

【思考力，判断力，表現力等】

(2)　展開

過程	学習活動	指導上の留意点（○）評価（◆）	備考
導入	1　北陸の自然環境を振り返る。 ・特徴：冬に降水量が多い →（雪）が多く積もる ・課題：（交通）への影響が出る	○北陸の雨温図を提示し、空欄に当てはまる語句を考えさせることでどのような気候の特徴があったか想起させる。	pp 資料
	2　自然環境が農業と工業にどのような影響を与えているか予想する。	○十日市の雪が積もった画像を提示し、自然環境と農業、工業のつながりを持たせ、本時の学習する内容（北陸の農業と工業）の見通しを持たせる。	
	3　本時のめあてを確認する。		pp 資料
	めあて　なぜ、（北陸）は世界でも有数の豪雪地帯にもかかわらず、（産業）を発展させることができたのか理解し、北陸の産業の（魅力）を表現しよう！		
	4　本時の学習の流れをつかむ。	○活動内容と時間を提示する。	
展開	5　雪による生活や農業、工業への影響を考える。 ○教科書を見てSTEP1とSTEP2の空欄の穴埋めを個人で行う。	○個人作業の際に、机間指導を行う。	
	○班で互いにSTEP1とSTEP2で書いた語句を確認し合う。		
	○説明を聞いて農業と工業がどのように発展したかを理解する。	○生徒が興味を引くような画像を提示させることでSTEP3でどのようなことを調べたいか関心を持たせる。	pp 資料
	6　北陸の産業の魅力が何かをタブレットを使って調べる。 ○STEP3を行い、農業や工業の中でさらに自分で調べたいことを調べる。 ・北陸ではお米を原料としてどのような食品がつくられているか ・北陸（新潟県・富山県・石川県・福井県）の伝統的工芸品を調べてみよう	○北陸の産業の魅力を深堀りさせるために取り組ませる。また、調べ学習中は机間指導を行う。	タブレット(Canva)
終末	7　本時の学習を振り返る。 ○本時のまとめを行う。 ・ワークシートまたはCanvaに北陸の魅力をまとめる。 ・隣の人と紹介し合う。	◆北陸の産業の魅力を自然環境、農業、工業と関連付けながら表現している。 〔ワークシートまたはCanvaの記述内容〕 →キーワードや例を提示して理解を促す。	タブレット(Canva)
	○単元シートに北陸の農業の特徴と工業の特徴をまとめる。 ・農業の特徴（特産品） ・工業の特徴（工業製品）	○農業と工業の特徴を自分の言葉でまとめさせるために、東海、中央高地でどのように書いたのか見返しながら記入させる。	
	○次時の学習内容を知る。 ・次時の単元のまとめでCanvaに中部地方の産業の魅力を表現することを知る。		

≪杵島支部≫

支部長　貞松　弘人（白石中）

1　研究主題（研究テーマ）

集団で思考する授業づくりの工夫

～一人一人の思考を深め、広げるための対話的な学習の工夫を通して～

2　主題設定の理由

生徒の公民資質の向上を目指すためには、話し合いや学び合い等の対話的な学びの中で、互いに自分の考えを出し合うとともに、それぞれの考えについて批判や反論、賛同や修正などの様々な立場から意見を交流させることを通して、生徒一人一人が元々自分がもっていた考えを深め、広めるようにすることが必要である。しかし、実際の活動の状況を見ると、グループや全体で自分の意見を発表することはできるものの、それぞれの意見に対して批判したり修正したりして意見を深めたり高めたりするところまでは至っていないことがほとんどである。その背景としては、学習の土台となる、互いに自分の考えを主張し、それを批判し合えるという「学び合いの風土」ができていないことが要因の１つであると考えられる。また、パフォーマンス課題が生徒にとって自分事として追究すべき課題になっているのかと言うことも大きな問題である。生徒が主体的に追究したいと思えるような課題を設定することができれば、生徒はその課題に対して自分なりの思いをもつことができ、さらにはそれとは異なる考えが合った場合には、議論を通して考えを深めたいという思いが出てくるのではないかと考えられる。

そこで、杵島支部では研究主題を「集団で思考する授業づくりの工夫」と設定し、一人一人の思考を深め、広げるための対話的な学習の在り方について地区内各中学校において授業実践を通した研究を進めるとともに、生徒が主体的に自分事として取り組むことができるパフォーマンス課題を見いだすように取り組みたいと考え、研究を進めた。

3　研究の内容

(1) 日常的に対話的な学びを継続することでの「学び合いの風土」づくり

日頃の授業の中に、継続的、系統的に話し合ったり学び合ったりする場面を設定することで、生徒一人一人が互いに意見を出し合い、その中で他者の意見を批判や反論、賛同や修正をすることが当たり前の活動だということを認識させる。

(2) 多様な対話的な学びの在り方の実践

グループや全体での話し合い活動の中で、意見発表と質疑応答、意見に対する評価、論題に対する議論など多様な対話的な学びの場面を設定することで、一人一人の意見を深め、広げることができるような対話的な学びにするように実践する。

(3) ラーニングパートナーの積極的な活用

教員、保護者、地域の専門家などをラーニングパートナーとして積極的に活用することで生徒だけでは思いつかないような意見をもらうことが可能となり、個人の考えを深め、高めることに有益であると考える。

(4) 振り返りの工夫

対話的な学びの後で自己の考えがどのように広まった、又は深まったのかを振り

返りの中で考えさせることで自己の考えの変容に気づくことができるようにする。

(5) 自分事として生徒が主体的に追究できる、パフォーマンス課題の構築

年間の実践を通して、効果があったパフォーマンス課題、または、うまくいかなかったものについてはどのような工夫が必要かなどをまとめて、よりよいパフォーマンス課題となるようにしていく。

4 研究の経過

(1) 令和６年６月５日　杵島地区社会科研究会全員研修会(会場：白石中学校)

本地区の社会担当教員が一同に介し、本年度の研究主題や研究の方向性を決定すると共に本年度の地区社会科研究会としての年間活動について共通理解を図った。

(2) 令和６年９月13日　杵島郡社会科研究会主任研修会(会場：江北中学校)

各学校の社会課主任で、本地区で毎年実施している夏期作品展の作品の審査及び、作品の展示、さらに後半で実施する予定の授業研究会（授業校は大町ひじり学園）についての検討を行った。

(3) 令和６年９月27日　杵島郡社会課主任研修会（会場：江北中学校）

夏期作品展の作品撤収及び授業研究会についての検討を行った。

(4) 令和７年１月実施予定　杵島郡社会科研究会授業研究会(会場:大町ひじり学園)

5 研究の成果と課題

○日常の授業の中で継続的・系統的に話し合ったり学び合ったりする対話的な学びの場面を取り入れることで、当初はぎこちなかった意見を出し合ったり、相手の意見に対して批判・反論、賛同・修正するようなことが自然にできる生徒が増えてきた。

○公民的分野においては、意見交換や議論をするような題材が多く見られ、各学校の実態に応じて多様な学習活動を設定することができた。

○ラーニングパートナーの積極的な活用については、保護者や教員をラーニングパートナーとしてパフォーマンス課題に対する意見をもらうということはできたが、それをその他専門家に意見をもらったり、いろいろな単元で実施したりすることなどについては十分にできておらず課題が見られる。

○振り返りの中で対話的な学びを通して自分の考えの変容に気づく生徒が見られ、効果を感じるが、じっくりと自分の考えを見直すことを継続的に行うことが困難であるなどの課題も感じる。

○生徒の興味・関心の多様化もあり、なかなか多くの生徒が自分事として取り組むパフォーマンス課題を見いだすことは難しかった。その中でも「未成年者のＳＮＳの利用制限」「ドナーカードの所持を義務化」「投票率を高めるためのアイディア」「死刑制度の是非」などについては多くの生徒が積極的に取り組むことができた。ただ、まだまだ論題と自分自身の生活のなかの距離感があることはあり、なぜこの課題を追究すべきなのかということを指導者と生徒が共有するような活動を取り入れるなどの工夫が必要であると考えている。

武雄支部

支部長　記伊　善弘

1　研究主題(研究テーマ)

「主体的・対話的で深い学び」の実現のための授業改善

～「個別最適な学びと協働的な学び」の実現～

2　主題設定の理由

武雄支部では、さまざまな社会課題の中から社会参画につなげ、「主体的・対話的で深い学び」につながるよう、授業改善を行っている。今年度は、主体的・対話的で深い学びの実現に向けて、個別最適な学びと協働的な学びの実現を付け加えた研究主題を設定した。

3　研究の内容

(1)社会参画につながる「主体的・対話的で深い学び」の設定

(2)生徒間の対話的な意見交流の場の設定

4　研究経過

6月13日(木)武雄市教育研究会社会科部会

8月23日(金)研究授業指導案検討（公民的分野）

12月12日(木)提案授業、授業研究会(武雄中：浪瀬　大樹　教諭)

5　成果と課題

成果については以下のとおりである

・タブレットの活用は財産になると思う。新しい教育の方向性が出ているように思う。

・研究授業の中では、生徒が主体的に学ぶことができていた。

課題については以下のとおりである。

・生徒が何を学んだかが分からなくなり、評価も難しくなる。個別最適な学びをしていくうえで、学習内容が薄くなることは避けなければいけない。ゴールの姿を明確にして何を学ぶのかを考えてみることが大切になってくる。

・協働的な学び、個別最適な学びが目的にならないようにしなければいけない。

・個別最適化を図る際に、様々な選択肢が必要になってくる。ワークシートの準備や、誰と取り組むかなど、自分で選んで主体的に取り組むことができるようにしなければならない。

文責　　鶴田　創也（山内中学校）

第３学年４組　社会科学習指導案

令和６年１２月１２日(木)場所：３年４組教室
指導者 浪瀬　大樹・児童(生徒)数：４１人

１　単元名

３節　市場経済の仕組みと金融
１．市場経済と価格の決まり方

２　単元について

(1)　教材観

シミュレーションゲームとして「ラーメン屋を開店させる」ことに取り組み、取り組みの中で、経済の仕組みや見方・考え方を解説する。ラーメン屋を開店させる資金、環境、材料、人材など、様々な観点から準備を進める中で、意思決定の機会を設け、経済活動が様々な条件の下での選択を通じて行われていることを体験する。また、身近な事柄も景気、金融、政府活動とつながっており、関連付けていく。

(2)　児童観（生徒観）

３年３組の生徒は、これまでの公民の学習で身近な事例を例に出しながら学習を進めてきた。積極的に自分の意見を述べることができる生徒が多く、グループ活動を活発に行うことができる。本時では、シミュレーションゲームを通して意思決定を行い、他者参照を行いながら自分の意見を自分で選択することに取り組んでもらいたい。

(3)　指導観

身近な消費生活を中心に経済活動の意義を理解させるとともに、価格の働きに着目させて市場経済の基本的な考え方について理解させる。また、現代の生産の仕組みのあらましや金融の働きについて理解させるとともに、社会における企業の役割と社会的責任について考えさせる。その際、社会生活における職業の意義と役割及び雇用と労働条件の改善について、勤労の権利と義務、労働組合の意義、及び労働基準法の精神と関連付けて考えさせる。

３　単元の目標

(1) 身近な体験を通して市場経済の基本的な考え方を理解できる。(知識・技能)
(2) 市場経済の基本的な考え方から、経営に関する意思決定を行うことができる。
(思考・判断・表現)
(3) 協力して経営シミュレーションに関わり、意思決定を行うことができる。
(学びに向かう力・人間性等)

4　単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
ラーメン店経営のシミュレーション活動を通して、市場経済の基本的な考え方について理解することができる。	意思決定とその結果の関係を体験し、個人や企業の経済活動における役割と責任について多面的・多角的に考察し、表現している。	市場の働きと経済について、現代社会に見られる課題の解決を視野に主体的に社会に関わろうとしている。

5　単元の指導計画（全３時間）

時	学習目標（■）、学習活動	指導上の留意点（・）と評価（■）
1	■市場経済の基本的な考え方について理解する。 ・財団法人　日本経済教育センター作「ラーメン屋経営シミュレーション」をもとにシミュレーションゲーム（１年目）を実施する。 ・ラーメンの価格、アルバイトの有無、環境対策について選択（意思決定）したことと、その根拠をスプレッドシートに記入する。	・個人経営を想起させるために、「ラーメン屋」に代替して実施する。 ・開店資金、借入金について説明する。 ・価格設定、アルバイトの雇用における経費、環境対策の経費と影響は選択の根拠となる説明資料を準備する。 ・１年目のシミュレーション結果から、市場経済の基本的な考え方について説明する。
2 本 時	■市場経済において、社会事象の変化による影響や人的・物的資源の配分について考える １学習課題を確認する。 ２経営シミュレーションゲームを体験する。 ・前時の活動を振り返り、２年目の経営方針を立てる。 ・経営方針による結果の違いを比較する。 ３ゲームの結果から、学習課題について考えたことをまとめる。	・外的要因として、異なる「出来事カード」を各班に提示する。 ・必ず根拠となる考えのもとに経営改善のための選択をするように指示する。 ・各班のデータをクラウド上で共有する。 ■様々な社会事象に応じた市場における価格の決まり方や人的・物的資源の配分のはたらきについて考察することができる。（振り返りシート）
3	■「家計」「企業」「財政」のかかわりを理解し、個人や企業の経済活動における役割と責任について考える。 ・市場経済における「家計」「企業」「財政」のそれぞれの役割を整理し、関係図を作成する。 ・財政の果たす役割と必要性について考えをまとめる。	・前時までの活動から疑問点、課題点を取り上げる。 ・市場の働きにゆだねることが難しい諸問題を例示する。 ■身近な現代社会の課題と財政の役割について関連させながら、考えることができる。

《三養基支部》

支部長　田中　克三（中原中）

1　研究主題（研究テーマ）

『社会に開かれた中学校社会科の学びをめざして』

～学びの多様なアクセスを可能とする授業実践を通して～

2　主題設定の理由

県中社研は、「社会に開かれた中学校社会科の学びをめざして」を研究主題とし、学びの STEAM 化と学びの個別最適化をサブテーマとして研究を推進している。

三養基支部では、この研究主題を踏襲し、「社会に開かれた中学校社会科の学びをめざして」を研究主題とした。また、既存の教材はもちろんのこと、ICT 教材や LP を活用するなど、生徒が様々な方法で学びに向かえるようにし、「学びの裁量権」を保障する授業実践ができることをめざしてサブテーマを「学びの多様なアクセスを可能とする授業実践を通して」とした。

3　研究の内容

（１）既存の学習材や ICT、LP の活用

（２）「学びの裁量権」を保障する『学び合い』（個別最適な学びの授業実践）

（３）自己の考えの再構築と振り返り活動の充実（単元シートの作成）

4　研究経過

（１）令和６年５月２９日　第１回三養基地区社会科主任研修会（中原中）

（２）令和６年 12 月 13 日　第２回三養基地区社会科主任研修会（中原中）研究授業及び授業研究会

5　研究成果と課題

研究授業は、公民的分野の「私たちの経済」のまとめとして、「日本の世界幸福度ランキングを向上させるために、経済面からどのような対策をするべきか」というパフォーマンス課題に対して、意見文を作成することを目標として、学習が行われた。グループワークや学び合いが円滑に行われ、互いの意見を認め合いながら意見文を作っていたところに協働性がみられた点や、パフォーマンス課題が興味を持ちやすいものであったことやルーブリックが明確であった点などが成果としてあげられた。

LP の活用の仕方や、学び合いにおけるメンバーの構成の仕方などが課題としてあげられた。

社会科学習指導案

日　時　令和6年12月13日（金）5校時
指導学級　3年2組 30名
指導場所　3年2組教室
指 導 者　村岡　裕一郎

1　単元　第4章　私たちの暮らしと経済

2　本時の目指す生徒の姿

●本時の中で特に高めたい生徒の姿

・問題意識や目標・ねらいをもち、どうすればうまくいくか学び方を自分で工夫（調整）する生徒	
・未知のことやより詳しいことを学ぶ面白さや楽しさを味わう生徒	
・「できなかったことができるようになる」、「難しい課題を解決する」ために粘り強く挑戦できる生徒（α）	○
・「多様性や考えの違いを尊重することができる」、「互いのよさを認め、協働することができる」、「優しさや思いやりをもって他者と接することができる」生徒(β)	○

●達成するための手立て（単元及び本時）

○用いた教材、題材の意図　※LP（ラーニングパートナー、ともに学んでいく人と定義する）

・オープンエンドになる課題を設定する。オープンエンドになる課題の設定によって、教科書だけで留まるのではなく、実際に今後生徒が直面するであろう、大人でも解決が困難な課題について、社会における熟達者であるLPとともに問題を解決していくことが可能となり、「難しい課題を解決する」ために粘り強く挑戦する（α）場面の設定につながると考える。現在、日本は政治や経済の停滞により、いつの間にか賃金上昇が他の先進国と比較し低いことがわかった。追い打ちをかけるように、円安や増税など生活が困窮化しつつある一面を持つ。「世界幸福度ランキング」で、日本の幸福度ランキングの低さについて一時世論で話題となった。幸福度をあげるためにどのような取り組みが必要なのかを、学習する内容に合わせ、検討させていきたい。なお、「幸福度ランキング」の指標は6つ存在するが、学習内容に合わせるため、3つの視点に絞り（①GDP、②社会的支援、③人生の選択の自由度）日本経済や企業、政府の働きかけに結び付けていきたい。

○課題解決のプロセス・方法、3つの授業プロセスをどう取り扱って生徒の主体的な学びの育成につなげるか

・課題発見・情報収集について：課題発見では、「単元を貫く問い」を設定し、各時間の学習度に、振り返りだけでなく、自分が興味を持ったもしくは、疑問に思ったことを記載させる。「単元を貫く問い」を単元の最後の時間に設定し、単元を貫く問いだけでなく、自分で興味もしくは疑問に思ったことを調べてもよい。情報収集では、各時間に学びの履歴を確実にこなし、パフォーマンス課題に対し、自分の意見文、LPからのコメント、また、パソコンを使ってキーワードを基に、情報を収集することも可能とする。

本時は、キーワードを基に情報収集を行う活動をする生徒の姿が見られ、自分の考え（履歴）や他者の考え（履歴）、ネット上の情報を活用し、意見文を作成する姿が予想される。

・問題解決について：毎時間『学び合い』を取り入れ、「誰一人見捨てない」を合言葉に学習を促している。わからないところを、自分で調べるもの、わかっている人に聞くなど、個別最適化を目指し、終わっていない生徒と終わっている生徒の関わりを教員側でも促していきたい。時間内にみんなができるようにする。

本時は、諸資料を基に、パフォーマンス課題に対する自分の考えをまとめ、他者との意見交換を通して多様性や考えの違いを尊重することができる（β）生徒の育成につながり、最終的に自らの考えを作成もしくは再構築する活動する姿が見られると予想される。

・振り返りについて：毎時間、教師側でまとめをせず、自分の言葉で各時間のまとめやふりかえりをしている。パフォーマンス課題に取り組んだのち、再構築するように教師側で促す。

○A～Cの活用方法

A:協働学習：毎時間、協働学習として『学び合い』を行っている。『学び合い』を通して互いのよさを認め、協働することができる、優しさや思いやりをもって他者と接することができる（β）生徒の育成につながると考える。

B:タブレット：現在タブレット活動を行っていない。現在「学びの履歴」や「パフォーマンス課題」を紙媒体で書かせているが、データによる管理を行おうと計画している。

C：インターネット：パフォーマンス課題を扱う際、教科書の領域を超えた内容を扱うことが多いため、インターネットで調査できるようにしている。

3　単元設定の趣旨

(1) 教材観

中学校学習指導要領解説社会 第2章 第2節 3(2)内容B「私たちと経済」で「特に、経済に関する内容の学習については、なぜそのような仕組みがあるのか、どのような役割を果たしているのかということを理解できるようにしたり、経済活動が我々の社会生活にあらゆる面で密接な関わりを持っていることを踏まえたりしながら、今日の経済活動に関する諸課題について着目し、主権者として、よりよい社会の構築に向けて、その課題を解決しようとする力を養うことが大切である」とある。

世界幸福度ランキング（世界幸福度報告 2024）について、日本は 143 か国中 51 位という報告がなされた。これは、GDP、社会的支援、健康寿命、人生選択の自由度、他人への寛容さ、腐敗認識度の6項目に対して調査を取りその平均値をランキング化したものである。ここでは、GDP・社会的支援、人生選択の自由度の 3 つに着目する。2023 年に日本の名目国内総生産（GDP）がドイツに抜かれ 4 位となった。これは、円安の進行、物価高の長期化による個人消費の低迷、中小企業の賃金が上がらない等の実体経済の弱さが出た形である。

この単元では、1 節にて「消費生活と市場経済」、2 節「生産と労働」、3 節「市場経済の仕組みと金融」を学習する。この中で、経済活動の意義について消費生活を中心に学習し、価格の決定や市場経済の基本的な考え方について学ぶ。また、個人や企業の経済活動における役割と責任、職業の意義と役割や雇用や労働条件について多面的・多角的に考察することを通して、現代の生産や金融などの仕組みや働きを理解できるようにする。単元を貫く問いを設定し解決策を検討する学習過程にすることで、本単元で学んだ知識や技能を発揮でき、思考・判断・表現力を高めることができると考える。

(2) 生徒観

３年２組は、学び合いではみんなで協力して課題に取り組もうとする。課題に対して、「①見通しを持つ」を行い、教科書を中心に取り組み、わからないところは級友と一緒に活動し解決する。また、ワークシートを通して「②多様な情報を収集する」をほとんどの生徒が行うことができるようになってきた。伝え合いの時間には級友との関わりを通じて「⑦多面的にみる多角的にみる」ように促してきた。授業の最後には「⑬要約する」ことで授業中に学んだことを自分の言葉で表現する力が向上している。しかし、課題が困難と感じた生徒には、課題が終わった級友の説明を聞かず、解答を写すだけに終わることがある。また意見文作成の際「⑪自分の考えを形成する」ことに時間がかかる。また、伝え合いの後、他者の意見を参考に「⑫新たなものを創り上げる」ことが困難である。よって、「幸福度ランキング」に着目し、複数の視点の中から 1 つ以上選び級友らとともに調査することを通して、各々意見文を作成させる。そして級友との意見交換を通して再構築し、意見を深めさせたい。

(3) 指導観

指導にあたっては、単元の導入で、「世界幸福度ランキング」に触れる。数年前からの変化から、来年度はどうなるかを予想させる。なぜ低下しているのかのキーワード（円安や物価高等）を出し、原因に対して視点をもって改善策の予想を生徒とともに検討し、単元の見通しを持たせたい。各学習を通して、個人消費の改善策や賃金上昇の提案等を簡潔にまとめさせ、パフォーマンス課題の際、「②多様な情報を収集する」や伝え合いの中「⑦多面的にみる多角的にみる」を通して、最後に「⑫新たなものを創り上げる」の活動を通し複数の視点から改善策を検討させたい。

4　単元の目標　パフォーマンス課題

『日本の「世界幸福度ランキング」を向上させるために、経済面からどのような対策をするべきか』

知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
・国民の生活の向上と経済活動との関わりについて理解を深めるとともに、諸資料から現代の社会的事象に関わる情報を効果的に身に付けることができる。	・現代の社会生活と関連付けて多面的・多角的に考察したり、経済活動に見られる課題について公正に判断したり、思考・判断したことを説明したりすることができる。	・日本経済に見られる課題の解決について、主体的に追究、解決しようとする。

5　単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
・市場経済の基本的な考え方について理解している。その際、市場における価格の決まり方や資源の配分について理解している。 ・現在の生産や金融などの仕組みや働き、勤労の権利と義務、労働組合の意義及び勤労基準法の精神について理解している。	・対立と合意、効率と公正、分業と交換、希少性などに着目して、個人や企業の経済活動における役割と責任について、多面的・多角的に考察し、表現している。 ・社会生活における職業の意義と役割及び雇用と労働条件の改善について多面的･多角的に考察し、表現している。 ・市場の働きに委ねることが難しい諸問題に関して、国や地方公共団体が果たす役割について、多面的・多角的に考察し、表現している。	・市場の働きと経済について、現代社会にみられる課題の解決を視野に主体的社会にかかわろうとしている。 ・国民の生活と政府の役割について、現代社会にみられる課題の解決を視野に主体的に社会にかかわろうとしている。

6　単元の指導と評価計画　（全 13 時間　本時 12／13）第４章　私たちの暮らしと経済

時間	めあて【主な評価の観点】	3つの授業プロセス						A協働学習 Bタブレット Cインターネット	主に活用するNJK１６スキル
		単元			本時				
		[illegible]	問題解決	振り返り	[illegible]	問題解決	振り返り		
1	経済活動における「資源の効率的な分配」とはどんなことか自分の言葉で説明できる。【主体的】	○			○	○	○	A・C	⑥関連付ける ⑬要約する
2	10 年後の一人暮らしのシミュレーションをすることができる。【思・判・表】		○		○	○	○	A・C	④比較する ⑬要約する
3	価格はどのようにして決まるのか「需要」と「供給」のグラフを使って説明できる。【知・技】		○		○	○	○	A	⑮変換する ⑬要約する
4	流通経路による価格の違いと消費(支出)の仕方について、事例をもとに説明できる。【思・判・表】		○		○	○	○	A	⑥関連付ける ⑬要約する
5	企業競争がある場合とない場合の消費者への影響と消費者としての身の守り方を説明できる。【知・技】		○		○	○	○	A	⑥関連付ける ⑬要約する
6	単元テストで 80％取ることができる。【知・技】			○	○		○	A	⑬要約する
7	企業の活動の目的と目的を達成するためのシステムについて資料をもとに説明できる。【思・判・表】		○		○	○	○	A	⑥関連付ける ⑬要約する
8	１か月後の需要と供給の関係を見越して，みんなが資金を増やせる賢い株式購入をできる。【思・判・表】		○		○	○	○	A・C	⑥関連付ける ⑬要約する
9	日本銀行は日本経済の中でどのような役割を担っているのかが分かる。【知・技】		○		○	○	○	A	⑥関連付ける ⑬要約する
10	労働者を守っている法律と労働環境の変化を資料から読み取って説明できる。【知・技】		○		○	○	○	A	⑥関連付ける ⑬要約する
11	景気の変動やグローバル化が企業や私たちの生活にどんな影響を与えているか説明できる。【知・技】		○		○	○	○	A・C	⑥関連付ける ⑬要約する
12	単元を貫く問いについて、自分の考えを持ち相手に説明し、意見文を作成することができる。【思・判・表】【主体的】		○	○	○	○	○	A・C	⑦多面的に見る多角的に見る ⑮自分の考えを形成する ⑯新たなものを創り上げる
13	単元テストで 80％取ることができる。【知・技】			○	○		○	A	⑬要約する

7　本時の学習

(1)　本時の目標

みんなが『日本の「世界幸福度ランキング」を向上させるために、経済面からどのような対策をするべきか』に対し、自分の考えを持ち相手に説明し、意見文を作成できる。

(2)　本時の過程

プロセス		学習活動	NJK16 スキル	指導上の留意点
課題発見	導入	1　前時の確認をする。		・今まで学習したものを各々が書いた履歴を基に振り返る。
		2　本時のめあてを知る。	①　見通す。	・本時のめあて、授業の流れを説明し、生徒に見通しをもたせる。
		めあて：みんなが『日本の「世界幸福度ランキング」を向上させるために、経済面からどのような対策をするべきか』に対し、自分の考えを持ち相手に説明し、意見文を作成することができる。		
情報収集	展開	3　めあてに対して、意見文を作成する。 	⑧理由付ける。（原因や根拠を見つける）	・視点とキーワードを提示し、意見文の作成法を説明する。 ・視点を各々決定させ、学び合い活動を通して意見文を作成させる。（α） ・教科書や授業プリント、履歴だけでなく、キーワードを参考に、インターネット検索してもよいことを伝える。
問題解決		4　伝え合いで、自分の意見を述べ、他者の意見を聞く。 	⑦多面的に見る多角的に見る。	・伝え合いの中で、自分の考えを級友に２名以上説明させる。（β）
		5　他者の意見を基に、意見を再構築する。	⑫新たなものを創り上げる。	・伝え合いの中で、他者の意見でいいものがあれば、自分意見に反映させてもよいことを伝える。
振り返り	まとめ	6　履歴に記入し、本時を振り返る。	⑯変化をとらえる。	・最終的な考えを述べ本時の課題に関して気づいたこと等をまとめさせる。
		Bの評価基準 ○級友の意見を参考にして１つ根拠をもって意見文を作成することができる。 （ワークシート記述）【思考・判断・表現】 ○対策を示した意見文を作成することができる。 （ワークシート記述）【主体的に学習に取り組む態度】 ●達成不十分な生徒への指導：意見文作成の時間だけでなく、伝え合いの時間を踏まえて意見文を作成できるようにする。また、キーワードを掲示し、イメージしやすい環境を整える。		

本時の評価基準（ルーブリック）

評価	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
A	・伝え合いの時間を通して、自らの意見を再構築することができる。 ・級友の意見を参考にして２つ以上、根拠をもって意見文を作成することができる。	・複数で意見交換をしつつ、意見文を作成することができる。 ・自らの意見文を作成したら、終わっていない級友を助けに行くことができる。
B	・級友の意見を参考にして１つの根拠をもって意見文を作成することができる。	・対策を示した意見文を作成することができる。
C	・根拠をもって意見文を作成することができていない。	・対策を示した意見文を完成させることができなかった。

Cの生徒への指導：意見文作成の時間だけでなく、伝え合いの時間を踏まえて意見文を作成できるようにする。また、キーワードを掲示し、イメージしやすい環境を整える。

令和６年度　佐賀県中学校教育研究会社会科部会　業務報告

令和７年　２月　14 日（金）

月	日	曜	会の名称	業務内容	場所	備考
5	21	火	第１回幹事･研究部長研修会	◇令和６年度　業務・予算案について ◇令和６年度　第１回支部長・理事・研究員研修会及び総会・研修会について	教育センター	
6	24	月	第１回支部長・理事研修会及び総会	◇令和６年度 業務・予算案審議 ◇令和６年度の研究について	教育センター	
7	16	火	第１回研究員研修会および夏季研修会	◇令和６年度の研究について ◇九州大会長崎大会　歴史的分野　プレ発表 小城中学校　江上　哲平　先生 ◇講演 佐賀大学大学院学校教育学研究科 野田　英樹　准教授	東与賀農村環境改善センター	52名参加
8	5	月	第２回幹事･研究部長研修会	◇令和６年度　県中社研教育研究大会「小城多久大会」について ◇令和６年度　九中社研長崎大会について	鍋島中学校	
10	31	木	令和６年度　県中社研教育研究大会「小城多久大会」	◇研究授業、授業研究 ◇研究発表及び研究協議	芦刈観瀾校 （地理的分野） 東原庠舎中央校 （歴史的分野） 三日月中学校 （公民的分野）	8名 17名 11名
11	14	木	九中社研理事会	◇令和６年度 九中社長崎大会について	サンプリエール長崎	
11	15	金	第 56 回九中社研長崎大会	◇研究授業、授業研究 ◇研究発表及び研究協議	長崎大学教育学部附属中学校 （地理的分野、公民的分野） 長崎市立西浦上中学校 （歴史的分野）	24名

12	17	火	第３回幹事・研究部長研修会 第２回研究員研修会	◇第２回 研究員研修会の持ち方の確認 ◇九中社研長崎大会報告、令和７年度九州大会発表支部の確認 ◇研究部報告と各支部の研究経過報告 ◇研究会報について	教育センター	
1	14	火	第４回幹事・研究部長研修会	◇令和６年度業務・会計報告について ◇令和６年度並びに７年度の研究について ◇令和７年度の推薦図書について ◇第２回支部長・理事研修会について	教育センター	
1	31	金	幹事研修会	◇令和６年度　会計監査	中原中学校	
2	14	金	第２回支部長・理事研修会	◇令和６年度業務・会計報告について ◇令和７年度九州大会発表支部の確認 ◇令和６年度並びに７年度の研究について ◇令和７年度の推薦図書について	東与賀農村環境改善センター	

佐賀県中学校教育研究会社会科部会会則

第 1 条 本部会は佐賀県中学校教育研究会社会科部会という。

第 2 条 本部会の事務局を部会長指定の場所におき，各市郡に支部を設ける。

第 3 条 本部会は，佐賀県下中学校の教師および本会の趣旨に賛同するものをもって組織する。

第 4 条 本部会は，佐賀県中学校の社会科教育の研究を促進し，県下社会科教育の発展向上に寄与し，会員相互の親睦を深め，あわせて，全国の社会科教育研究者及び教育者と密接な連絡を図ることを目的とする。

第 5 条 本部会は，前条の目的を達成するため，次の事業を行う。
1.研究会　2.講習会　3.その他，本会の目的にかなう諸種の事業

第 6 条 この会に次の役員を置く。

1.部会長	1名	5.幹　事	若干名
2.副部会長	1～2名	6.研究部	8名
3.支部長	各支部1名	7.監　査	2名
4.理　事	各支部1名	8.顧　問	若干名

第 7 条 1．部会長・副部会長は支部長会において選出し，理事会にはかり，総会の承認を受ける。
2．部会長は本部会を代表し，会務を総括する。
3．副部会長は部会長を補佐し，部会長事故あるときは代行する。
4．支部長・理事は各支部で選出し，支部および本部会の活動を促進する。
5．幹事は部会長の委嘱とし，本部会の事業・庶務および会計の事務にあたる。
6．研究部は部会長の委嘱とし，社会科教育の研究活動促進にあたる。研究部は全体の部長・副部長及び地理・歴史・公民の各分野の部長・副部長から組織される。
7．監査は理事会で推薦し，部会長が委嘱し，会計を監査する。
8．顧問は理事会で推薦する。
9．役員の任期は1年とする。ただし，再任を妨げない。

第 8 条 本会は次の会議を行う。
1.総会は毎年1回開き，①役員の承認　②会則の変更　③その他重要なる事項を決定する。但し，必要に応じて臨時に開くことができる。
2.支部長会は，部会長が必要に応じて召集し，会の運営の審議に当たる。
3.理事会は総会に次ぐ決議機関で，部会長これを召集し，総会より委任された事項その他の運営に当たる。

第 9 条 本会の経費は，会費・補助金および寄附金およびその他の収入をもってあてる。

第 10 条 本部会の会計年度は，毎年4月1日に始まり，翌年3月31日で終わる。

附　則
1.本部会の会則は本部会成立の日よりこれを実施する。［ 昭和４０年4月1日設立 ］
2.本部会会則施行上必要な細則は別に定める。

◎ 県中社研地区別研究分野並びに九中社研発表分担表 （令和２年５月　改訂）

★地区別研究分野 ［◎九中社研発表　△九中社研授業］

	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	令元	2	3	4	5	★6	7	8	9	10	11	12
鳥栖	歴	◎→	→	公	→	→	地	→	→	公	→	→	歴	◎→	地	→	→	公	→	→	地	→	◎→
三養基	歴	→	→	公	→	◎→	地	→	→	歴	→	→	→	地	→	→	公	→	◎→	歴	→	→	→
神埼	歴	→	→	公	→	→	地◎	→	→	地	→	→	公	→	歴	→	→	公	→	◎→	地	→	歴
佐賀	歴◎	→	→	公	→	△→	地	→	→	公	◎→	→	歴	→	→	地	→	◎→	公	△→	歴	→	→
小城・多久	公	→	→	地◎	→	→	歴	→	◎→	地	→	公	→	◎→	歴	→	◎→	地	→	→	公	→	→
鹿・嬉・藤	地	→	→	歴	→	△→	公	◎→	→	歴	→	地	◎→	→	公	→	→	歴	→	→	→	◎→	地
杵島	地	→	→	歴	→	◎→	公	→	→	歴	→	→	地	◎→	→	公	→	歴	→	→	→	地	→
武雄	地	→	→	歴	→	→	公	→	→	歴	→	◎→	地	→	公	→	→	歴	→	◎→	公	→	→
唐津・東松浦	公	→	◎→	地	→	◎→	歴	→	地	◎→	→	公	→	歴△	→	→	地	→	→	◎→	公	→	→
伊万里・西松浦	地	→	→	歴	◎→	→	公	→	→	歴	→	地	→	公	→	◎→	歴	→	地	→	→	公	→
九社会場	熊本	宮崎	福岡	鹿児島	大分	佐賀	熊本	宮崎	長崎	福岡	鹿児島	沖縄	大分	佐賀	熊本	宮崎	長崎	福岡	鹿児島	佐賀	沖縄	大分	熊本
九社授業						佐賀市								唐津						佐賀市			
発表	佐賀郡	鳥栖	唐津	多久	西松浦	唐津 杵島 三養基	神埼	鹿・嬉・藤	小城	唐津	佐賀市	武雄	鹿島 嬉野 藤津	杵島 鳥栖 多久		伊西	小城	佐賀市	三養基	唐津 武雄 神埼		鹿島 嬉野 藤津	鳥栖
分野	地	歴	公	地	歴	全	地	公	歴	地	公	歴	地	全	※	公	歴	地	公	全	※	歴	地
県大会場			佐賀市			鹿・嬉・藤			伊西			鳥三神					小多			全国			

※は前年度の九中社研佐賀大会の研究まとめ等を紙上で報告

★各分野担当地区

	R2	R3	R4	R5	★R6	R7	R8	R9	R10	R11	R12
地理	鹿・嬉・藤 杵島 武雄 伊万里・西松浦	三養基 鹿・嬉・藤 杵島 武雄	鳥栖 三養基 杵島	鳥栖 三養基 佐賀	鳥栖 佐賀 唐津・東松浦	佐賀 小城・多久 唐津・東松浦	小城・多久 唐津・東松浦 伊万里・西松浦	小城・多久 唐津・東松浦 伊万里・西松浦	鳥栖 神埼 伊万里・西松浦	鳥栖 神埼 杵島	鳥栖 鹿・嬉・藤 杵島
歴史	鳥栖 三養基 佐賀	鳥栖 佐賀 唐津・東松浦	神埼 佐賀 小城・多久 唐津・東松浦	神埼 小城・多久 唐津・東松浦	神埼 小城・多久 伊万里・西松浦	鹿・嬉・藤 杵島 武雄 伊万里・西松浦	鹿・嬉・藤 杵島 武雄	三養基 鹿・嬉・藤 杵島 武雄	三養基 佐賀 鹿・嬉・藤 杵島	三養基 佐賀 鹿・嬉・藤	三養基 神埼 佐賀
公民	神埼 小城・多久 唐津・東松浦	神埼 小城・多久 伊万里・西松浦	鹿・嬉・藤 武雄 伊万里・西松浦	鹿・嬉・藤 杵島 武雄 伊万里・西松浦	三養基 鹿・嬉・藤 杵島 武雄	鳥栖 三養基 神埼	鳥栖 三養基 神埼 佐賀	鳥栖 神埼 佐賀	小城・多久 武雄 唐津・東松浦	小城・多久 武雄 唐津・東松浦 伊万里・西松浦	小城・多久 武雄 唐津・東松浦 伊万里・西松浦

★県大会　会場

	S58	61	H2	5	10	12	15	17	22	25	28	R1	3	★6	9	12
鳥栖 三養基 神埼				○								○				
佐賀	○								○						全国	
小城・多久					○									○		
鹿・嬉・藤		○								○						
杵島 武雄							○									○
唐津・東松浦						○		○					九州			
伊万里・西松浦			○								○					

★九州大会　発表担当支部

	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	令元	2	3	4	5	★6	7	8	9	10	11	12
鳥栖		歴												歴									地
三養基						公													公				
神埼							地													公			
佐賀	地										公							地					
小城									歴								歴						
多久				地										公	なし						なし		
鹿・嬉・藤								公					地									歴	
杵島						歴								地									
武雄												歴								歴			
唐津・東松浦			公			地				地										地			
伊万里・西松浦					歴											公							

★九州大会各県発表分野

Ｈ２４年度大分大会第２回理事会にて変更

		佐賀	熊本	宮崎	長崎	福岡	鹿児島	沖縄	大分	
４６回	(H26)	地	全	歴	公	地	公	※	歴	
４７回	(H27)	公	歴	全	地	公	歴	※	地	
４８回	(H28)	歴	公	地	全	歴	地	※	公	
４９回	(H29)	地	地	公	歴	全	公	※	歴	
５０回	(H30)	公	歴	歴	公	地	全	※	地	
５１回	(R1)	歴	公	地	地	歴	※	全	公	
５２回	(R2)	地	地	公	歴	公	歴	※	全	
５３回	(R3)	全	歴	歴	公	地	地	公	※	
５４回	(R4)	※	全	地	地	歴	公	公	歴	
５５回	(R5)	公	※	全	歴	公	歴	地	地	
５６回	(R6)	歴	公	※	全	地	地	歴	公	長崎大会
５７回	(R7)	地	地	公	※	全	公	歴	歴	福岡大会
５８回	(R8)	公	歴	歴	公	※	全	地	地	鹿児島大会
５９回	(R9)	全	公	地	地	歴	※	歴	公	全国大会
６０回	(R10)	※	地	公	歴	公	地	全	歴	沖縄大会
６１回	(R11)	地	公	歴	公	地	歴	※	全	大分大会
６２回	(R12)	歴	地	全	地	歴	公	公	※	宮崎大会
６３回	(R13)	公	歴	※	全	公	地	歴	地	長崎大会
		佐賀	熊本	宮崎	長崎	福岡	鹿児島	沖縄	大分	

令和６年度　役員一覧

★ 本部役員・研究部役員

役職	氏名	学校名	役職	氏名	学校名
会長	吉村　典浩	玄海みらい学園	研究部長	山岡　貴秀	附属
副会長	加藤　吾郎	国見	研究副部長	鶴　勝己	田代
副会長	福岡　浩彰	富士	地理部長	川原　峻	鏡
事務局長	村岡　裕一郎	中原	地理副部長	横尾　健斗	神埼
事務局次長	岡山　慎司	鍋島	歴史部長	深井　純	基山
庶務	御厨　勇佑	神埼	歴史副部長	小田　勉	鹿島西
会計	佐保　明尚	昭栄	公民部長	鶴　勝己	田代
会計補佐	杠　一恵	東与賀	公民副部長	梅村　智生	伊万里
監査（支部長）	田中　克三	中原	監査（理事）	川崎　朗	白石

佐賀県教育センター　研修員

角田　梓	本谷　正三郎

★ 支部役員

支部	支部長		理事		研究員	
鳥栖	中山　孝史	基里	福田遼太郎	基里	井上　颯真	鳥栖
三養基	田中　克三	中原	吉田　直史	上峰	竹川　満	三根
神埼	原田　浩臣	千代田	坂田　州永	千代田	横尾　健斗	神埼
佐賀市	福岡　浩彰	富士	片渕　智史	富士	三根　頌平	金泉
小城・多久	藤田　浩巳	芦刈	靏　康徳	芦刈	擽村　哲也	牛津
鹿島・嬉野・藤津	土岐　洋二	吉田	江口　成子	吉田	中島　浩太郎	多良
杵島	貞松　弘人	白石	川崎　朗	白石	内田紗耶香	白石
武雄	記伊　善弘	川登	永松　美紗	川登	鶴田　創也	山内
唐津・東松浦	吉村　典浩	玄海みらい学園	杵嶋　彩音	玄海みらい学園	野口　純一	佐志
伊万里・西松浦	宮崎　武司	有田	田雑　拓	啓成	渕上　徳郎	啓成

佐賀県中社研研究の歩み（平成１４年度以降）

年度	研究テーマ	会長名
14	「新しい時代を創る社会科学習のあり方」 ー多様な学習の展開とその評価の工夫を通してー	宇曽 正規
15	「新しい時代を創る社会科学習のあり方」 ～基礎・基本の定着を図る評価及び学習展開の工夫を通して～	碇 峯雄
16	「新しい時代を創る社会科学習のあり方」 ～基礎・基本の定着を図る評価及び学習展開の工夫を通して～	碇 峯雄
17	「時代が求める公民的資質の育成を考える」 ～価値判断能力の育成をめざして～	中村 美喜雄
18	「時代が求める公民的資質の育成を考える」 ー価値判断能力の育成をめざしてー	中村 美喜雄
19	「時代が求める公民的資質の育成を考える」 ー価値判断能力の育成をめざしてー	中村 美喜雄
20	「社会とのつながりを深め、参加する社会科学習の創造」 ー集団で思考する授業を通してー	大草 重幸
21	「社会とのつながりを深め、参加する社会科学習の創造」 ー集団で思考する授業を通してー	大草 重幸
22	「社会とのつながりを深め、社会参画を目指した社会科学習」	御厨 秀樹
23	「社会とのつながりを深め、社会参画を目指した社会科学習」	御厨 秀樹
24	「社会とのつながりを深め、社会参画を目指した社会科学習」	下川 孝廣
25	「社会とのつながりを深め、社会参画を目指した社会科学習」	下川 孝廣
26	「社会とのつながりを深め、社会参画を目指した社会科学習」	下川 孝廣
27	「社会とのつながりを深め、社会参画を目指した社会科学習」 ～社会科で行うアクティブラーニングとは～	下川 孝廣
28	「社会とのつながりを深め、社会参画を目指した社会科学習」 ～学校外部のアクターとのネットワーク～	大石 達弘
29	「社会とのつながりを深め、社会参画を目指した社会科学習」 ～学校外部のアクターとのネットワーク～	大石 達弘
30	「社会に開かれた社会科学習の創造」	貞包 浩洋
令和元	「社会に開かれた、中学校社会科の学びをめざして」 ～ラーニング・パートナー（LP）との協働を通して～	貞包 浩洋
2	「社会に開かれた中学校社会科の学びをめざして」 ～学びの STEAM 化，学びの個別最適化，新しい学習基盤の確立 を通して～	貞包 浩洋
3	「社会に開かれた中学校社会科の学びをめざして」 ～学びの STEAM 化，学びの個別最適化，新しい学習基盤の確立 を通して～	貞包 浩洋
4	「社会に開かれた中学校社会科の学びをめざして」 ～学びのＳＴＥＡＭ化と学びの個別最適化を柱として～	貞包 浩洋
5	「社会に開かれた中学校社会科の学びをめざして」 ～学びのＳＴＥＡＭ化と学びの個別最適化を柱として～	貞包 浩洋
6	社会に開かれた中学校社会科の学び～「見方・考え方」を働かせた個別最適な学びの実現を通して～	吉村　典浩
7		

九州中学校社会科教育研究大会のあゆみ

回	開催年	開催県	大会主題
1	昭和41年	大分	社会認識を深める教材のとらえ方
2	昭和42年	佐賀	思考力を高める効果的な学習指導
3	昭和43年	長崎	社会科における授業の効率化
4	昭和44年	熊本	教材価値の再検討とその効果的指導法
5	昭和45年	宮崎	探求的な能力を育てる学習指導過程の研究
6	昭和46年	福岡	思考を深める社会科学習
7	昭和47年	鹿児島	社会認識の育成をめざす教材の再構成とその指導
8	昭和48年	大分	創造性を培う社会科学習のあり方
9	昭和49年	佐賀	主体的な学習を通して思考力を高める指導のあり方
10	昭和50年	熊本	社会科学習における概念の形成と指導
11	昭和52年	宮崎	社会科学習における概念の形成と指導
12	昭和53年	福岡	社会科における教材精選の視点に立った指導計画の展開
13	昭和54年	鹿児島	教材内容を精選し、社会事象についての社会認識をどう深めるか
14	昭和55年	大分	自ら考え、生き生きとした学習をめざす社会科指導のあり方
15	昭和56年	佐賀	自ら考え、わかる喜びをめざす社会科学習のあり方
16	昭和58年	熊本	自ら考え、わかる、できる社会科学習
17	昭和59年	宮崎	わかる社会科学習の創造
18	昭和60年	福岡	社会的見方考え方育成の視点からみた教科書活用の再吟味
19	昭和61年	鹿児島	自ら学習の主人公となり、社会のしくみを把握できる生徒を育成するにはどう すればよいか
20	昭和62年	大分	楽しい授業を展開するための魅力ある教材づくり

回	開催年	開催県	大会主題
21	昭和63年	佐賀	生き生きと活動する社会科学習のあり方
22	平成2年	熊本	追求する喜びの中に基礎・基本を身につける社会科学習のあり方
23	平成3年	宮崎	変化する社会に主体的に生きることができる力を育てる社会科学習の創造
24	平成4年	福岡	自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応する能力を育てる社会科学習の創造
25	平成5年	鹿児島	社会の実現に問いかけ、ともに学び生きていく力を育てる社会科学習はどうある るべきか
26	平成6年	大分	国際社会に主体的に生きる人間の育成をめざした社会科学習のあり方
27	平成7年	佐賀	社会の現実に学び、自ら考え、判断し、表現できる生徒の育成をめざす社会科 学習の創造
28	平成8年	熊本	自ら学ぶ喜びを味わい、社会的な生き方を求め続ける社会科学習の創造
29	平成9年	宮崎	「地域」に根ざした社会科「テーマ」学習
30	平成10年	福岡	豊かな学力を育てる社会科学習指導
31	平成11年	鹿児島	社会の現実と自分自身を問い直し、ともに学び、ともに生きていく力を育てる 社会科はどうあるべきか
32	平成12年	大分	現実を見つめ、未来を拓く社会科学習のあり方
33	平成13年	佐賀	新しい時代を創る社会科学習のあり方
34	平成14年	熊本	基礎・基本の定着を図り、生きて働く力を育む社会科学習の創造
35	平成15年	宮崎	社会について考え続ける力を育成する社会科学習の創造
36	平成16年	福岡	基礎・基本の確実な定着を図る社会科学習の工夫
37	平成17年	鹿児島	21世紀に生きる市民として、社会の現実から、ともに学び、ともに生きてい く力を育てる社会科はどうあるべきか
38	平成18年	大分	基礎・基本の定着を踏まえた発展学習のあり方
39	平成19年	佐賀	時代を求める公民的資質の育成を考える
40	平成20年	熊本	確かな学びを育む社会科学習
41	平成21年	宮崎	社会について考え続ける力を育成する社会科学習の創造

回	開催年	開催県	大 会 主 題
42	平成 22 年	福岡	豊かな学力を育てる社会科学習指導
43	平成 23 年	鹿児島	地域を見つめ、未来を生きる力を育てる社会科教育とは
44	平成 24 年	大分	よりよい社会を形成する力を育てる社会科学習
45	平成 25 年	佐賀	社会とのつながりを深め、社会参画を目指した社会科学習
46	平成 26 年	熊本	未来を拓く力を育む社会科学習の創造
47	平成 27 年	宮崎	社会について考え続ける主体を育む社会科学習の創造 ～対比関係に基づく「問い」と「応答」を通して～
48	平成 28 年	長崎	社会の形成に積極的に参画する力を育む社会科学習
49	平成 29 年	福岡	社会的な見方・考え方を統合的に働かせ、公民的資質の基礎の育成を目指す社 会科学習の工夫 ～様々な思考ツールを活用した探求的な活動を通して～
50	平成 30 年	鹿児島	地域と世界をつなぐ授業の創造　～「深い学び」となる「主体的・対話的学び」の可能性を探りながら～
51	令和元年	沖縄	『地域を支え、未来を拓く力』を育む社会科学習
52	令和２年	大分	社会について問い続ける力を育成する社会科学習のあり方
53	令和３年	佐賀	社会に開かれた中学校社会科の学びをめざして　～学びの STEAM 化，学びの個別最適化，新しい学習基盤の確立を通して～
54	令和４年	熊本	民主主義の担い手に必要な資質・能力を育む社会科の探求　～社会的な見方・考え方を働かせる「問い」を通して～
55	令和５年	宮崎	社会について考え続ける主体を育む社会科学習の創造
56	令和６年	長崎	「よりよい社会を問い続ける生徒の育成」～自ら課題を設定し、追究・探究する学習を通して～
57	令和７年	福岡	

あとがき

日々研鑽に励んでおられる県下会員の先生方のご協力を得て、本年度第56号の研究会報を発行することができ、深く感謝申し上げます。
日々教科指導だけでなく、学年・学級経営や生徒指導に励まれる会員の皆様のおかげで学校生活において例年通りもしくはそれ以上の活動を実践されていることと思います。

令和６年度研究主題『社会に開かれた中学校社会科の学び～「見方・考え方」を働かせた個別最適な学びの実現を通して～』のもと、今年度10月31日に小城・多久地区にて三分野の三会場同時開催による県大会を実施しました。小城・多久支部の先生を中心に、昨年より数回に渡る指導案検討会や準備・運営等をしていただきました。おかげさまで多数の会員の方に参観していただき、佐賀県社会科の研究について理解を深めていただく充実した場とすることができました。

また、11月15日には、第56回九州中学校社会科教育研究大会が長崎県で開催されました。『「よりよい社会を問い続ける生徒の育成」～自ら課題を設定し、追究・探究する学習を通して～』の大会主題のもと、長崎大学教育学部附属中学校、長崎市立西浦上中学校にて研究授業と研究発表が行われました。本県からも二十数名が参観され、各々の今後の実践に生かされると思います。また、その大会において本県より、小城市立小城中学校の江上哲平教諭に研究発表をしていただきました。「自他を認め合い、共に学び続ける生徒の育成～西九州大学留学生をLPとした歴史的分野の授業実践を通して～」というテーマについて、研究協議会では多数の質問等があり多くの先生方より高い評価をいただきました。江上先生、そして小城・多久支部の先生方には、県大会だけでなく県の代表としての研究発表と多忙の中準備をしていただきありがとうございました。佐賀県の研究が年々向上し各地区にて実践していただいており感謝の意に堪えません。

来年度は九州中学校社会科教育研究大会が福岡県で開催を予定しております。本県からは地理的分野において、佐賀市支部の先生に発表していただきます。これから佐賀市支部の先生方には発表のためにご尽力していただくことになりますが、ご理解・ご協力のほどよろしくお願いいたします。また、令和9年度には、全国社会科教育研究大会佐賀大会を開催します。大会開催のため、全ての会員の先生方には準備や運営にご協力していただくことになります。よろしくお願いいたします。全国大会に向けて事務局を中心に準備を進めて参ります。

最後になりましたが、佐賀県中学校社会科研究会研究推進のため、ご多忙にもかかわらず、ご指導していただいた佐賀県教育センターの先生方、教育委員会、県下各支部支部長、理事、研究員の先生方に、本県中社研事務局を代表して深く感謝申し上げます。

今後とも、さらに佐賀県中学校社会科研究会が発展するために、ご指導・ご協力をお願いいたしましてご挨拶とさせていただきます。

令和7年1月末日

佐賀県中社研事務局長　村岡　裕一郎